
俺的妄想ファンタジーに俺を送り込む話。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺的妄想ファンタジーに俺を送り込む話。

【Zコード】

N5715E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

俺がファンタジーの話を設定して、そこに俺を送り込む話。どうなるかはしらないよ？期待しちゃダメだよ、先期待しちゃダメ、俺だからな？つまんなかったらほつといついよ・・俺勝手に中で暴れてるからさ、好きな事するんだ。

俺的ファンタジー案を練る ものの1

俺の名前は宅だ。

宅っていってもオタクじゃないよ

まーそんなことはどうでもいいんだよ。

俺はや、ファンタジーの世界に飛び込みたいんだよ。

俺がファンタジー世界とやらに飛びたら

どうなるのか知りたいのさ

何日生き残れるだろうな?

考えただけで恐ろしい。

よし、ファンタジー世界の創造だ。

俺が入つていく世界だ。

もちろん、かっこいいのにしたいな・・

どんな世界がいいだろう?

やっぱ俺が活躍できないとな・

天空の城なんてどうだ?

かつこじいじさん

夢あつそうだ

いやいや、そんなのもいつ何個も小説のネタにされてて

ダメだろ？ パクリって言われるに違いない。

でもや、とつあえず俺が入る世界用意しないと

この物語ははじまらないぜ？

よしー、剣と魔法の世界だ！

定番だよー。定番！

魔法使いまくりだよ俺。

魔物とか、建物破壊しまくってやるぜ。

設定はざっくりと。

やっぱ俺はかっこよくなないとな？

世界はそつせな・・・中世のイタリアの建物とか歐州系統の建物みたいなのが

一杯建つてて、取り合えず、俺がその世界で暴れるのが良いな

とにかく俺全知全能！ どんな奴にも負けないはずだ。

後・・女欲しいな！ もちろん俺に近くすタイプの女だ！

しかも美人で、かわいい女。

俺につつかかってくるタイプどうだろ？

俺は口汚い女とか強気な女苦手なんだよな・・

でもさ、スレって、一見きついんだけど、女らしさのある女

どういえば良いのかな・・昔のヤンキータイプのねーちゃん？

それでる女。

世間なんか・・先生なんか・・勉強なんか・・

とかいいながら、案外優しいとこがあるタイプ？

近付き難いんだけど、無口な男子に優しい言葉たまにかけたりする女

毎日弁当とか自分で作ってくる女。両親がややこしい家庭の女。

あ、それ、俺の中学校時代の横にいた女のことがな。

そういうタイプの女もいいな

とにかく、女はいるぞ！

よし女入ります。

で、世界は欧洲の風景な。

魔法と剣がある世界だ。

まだ足りないな？

まあ、物語中に追加していくつ

だつて俺神だもん。

なんでも追加できるや。

よしうちからそういう世界はじめるよ。

俺はわくわくそ

でも、もしire見る奴は期待するなよ？

俺ファンタジー世界に入る その1

さあ俺、いくよ~

ファンタジーの入口は俺の今座っている椅子の下だよ。

ここに穴開きます~

うわーー・・・・

死んじやつって・・

普通しぬつて・・

取り合えず落ちたときクッション頼む~！

助かった・・

俺生きてるよ・・死んでるはずだ?

異世界ですね・

取り合えず、地図も無いし、なんだか並ばっかりの場所だよ。

どうしよう・・

「大丈夫ですか?」

なんかかわいい女の子出てきたぞ。

「は・・はい・・」

初対面で相手女の子・

恥ずかしいよ、だつて俺童貞だよ?

どもっちやつたよ。

「あの、あなたどこのから来たんですか?」

どこのからつて・・そりや・・俺は・・・

なんて説明しようつ・・困つたな・・家の椅子の下に穴が開いて

じて着たつて説明すればいいのだろうか・・・

とりあえず、どこの村の名前だそつ。

アツチ村だ。そうだアツチ村から俺きたんだよ。そつこいつ」とこじ
よう。

「アツチ村から着ました」

なんかこの女、知らないそぶり見せてるぞ・・

まあそんなことはないよな?

よし話しかけてみよ!。

「あ、あの～、どうか休める村か都市みたいな近くにありますか？」

「あつおかよ、ここから近くまで歩いて、ロヂチ村があります。」

「おお、あなたがおしゃれ…じゃあ…どうして…」

「このまま、ここでよなうへで歩つてしまつたら

もういの女とはお別れだよ、それひよつともつたいなくね？」

「そ・そ・うだ・・・案内頼んでみよつか・・・

「あの、俺、ここに来たの初めてでして…なんてこつか…その」

「ああ、俺もつとまつあつ quem よ…だからもつないんだよ…

「案内してくれませんか…・・・？」

あ、言つちまつたよ…清水の舞合から飛び降つるつもつとまつたよ…・・・

「いいですよ

「おお、いいつて！」

俺ちよつともつしる？ 俺の顔つてやつぱまじな部類だもん。

とつあえず笑つて、良こですよつて言つてくれたよ。

「つやつて行くしかないよ。だつて俺なんもこの世界知らないしな

じついて行けり・それにしても綺麗なねーちゃんだ・・

手とか繋ぎたいな・・

俺女ヒヒヒヒヒー。

「あの・・その格好・・変な格好ですね・」

ええ・・そりや・・現実世界で買った半そでと半ズボンのまま

ヒヒヒヒヒー來たしな・・

俺の格好は中世の世界觀からしたら、変だらうな・・

でも、いきなり、それつゝこむの?ちよっとは遠慮してくれよ・・

俺凹んじゅうよ・・

「ナウですか?」の格好アツチ村では流行つてゐるんです

言つてやつた・・いくらなんでも変な格好はひどいか

つこ俺も悔しくて言つてやつたよ・・

「ナウなんですか?ふうん・」

なんか疑つてるよ・・この人・・

かわいいのに、結構直に態度に表すね・・

なんか既にキモがられてるよ。

絶対そうだよ、このは・・

俺は伊達にモテない歴々人生じゃないぞ・・

冷たい冷ややかな女の視線は感じやすいんだよ。

絶対零度だよ、この日は・・・

なんか話ついくなつたな・・・どうしよう・・・

しかし、いつまで歩かせるんだ・・疲れてきたよ・・

俺体力ないのに・・もう一〇分近く岩場歩いてるよ・・

靴だつて砂まみれだ、足だつてタコできたり・・

息も苦しくなつてきてるし・・

まだ・・?

「あの〜、村は後どれくらいで着きますか?」

「後5分ですね」

5分か・・俺の死力を尽くして歩くしかない・・

喉渴いたな・・

妙に暑いし、太陽の日差しあきついしさ・・

「着きましたよ。」

おお・着きましたか・・・

「有難うござります」

本当に有難う、あんたいなければ俺は、荒野で野垂れ死んでたよ・

「へへへ」

「じゃ私は自分の家に行きますので」

「うひょ・・・うひ来たのは良こナビ、俺金ねーし

知り合いもこない・・

「あの・・実は・・この辺で道迷つて・・お金もないし、知り合いまいなしで」

頼む・・俺のこの辺に言葉から俺の言わんとする事を汲み取ってくれ・・

「お困りですか・・?えつと・・ようじければ私の家にいらっしゃれますか?」

ええ・・いいの?藁にもすがる思ことほの事だ・・

「はこ・よろしければ、少し休憩させてもらひますか・・?」

もつあなたしかいない・・・助けて・・・

「はい、じゃあ行きましょ、う」

助かつた・・・取り合えず喉乾いています・・・

なんか・・村人俺みてるぞ・?

珍しいんだろうな・服が・

もしくは見知らぬ奴が来て警戒してるのかな・?

やな雰囲気だ・・

「着きましたよ。」

着きましたか!

「あの・狭いですが、よろしければどうぞ・・・」

はいはい、よろしくないわけないですよ

「お水もってきますね」

来ました、あなた氣が利く!

ついてきて良かつたよ!

「はい、どうぞ」

「有難い」やります～～

「ゴクゴク」

ああ・・・生き返る・・

俺の体に生が蘇ってきますよ～

俺復活しました、ほんとありますよ～

しかし、あまりのしだせに、周り見てなかつたけど

変な家だな・・?

藁か・・木のよつなもんで出来た家だよ・

はじめてみる家だ・東南アジアとか、原住民の家に近いよ。
ま・・そんなことはいいよ・

これからどうするかが問題だよ。

「あの・・」の後どうされるんですか?」

びつわれるんでしょ?うね・・俺

取り合えず、そんな事俺に聞いてくれるなんて

この人優しいよ。

よしーー！」少しソーファにずり靠へなつてみよ。」

取り合えず搦め手パターンで行こ。

かわいそつな俺を演じるんだ。

「あの・・・俺・・・お金もないし・・・行くあてもないんです・・・」

「道迷つて、ここがどこかも分からなくて・・・帰るにも帰れなくて・・・」

・

よこここで悲しそうに俯こ。

「そうですか・・・」

「それは・・・大変ですね・・・」

うんうん・俺物凄く大変ですよ。

「今日はもう遅いし、私の家にお泊りになられますか？」

ええ・・・いいの？

でも・・・女一人のところに俺泊めていいんですね？

「もうすぐ、夫も帰ってきますので、話してみますね」

夫もちか・・夫怖い人だとびっくり・・・

俺、しばかるんじや・・・

だからとひ言つて・・俺にはあてもないしな・・・

取り合えず夫待とう、そつじよつ。

アツチ村はいつのじゅ？

「夫が帰つてきました」

「おひへ、ただいま」

「あれ、そいつ誰？」

「うわ・・帰つて來たよ・・

しかも熊のよくな大男

上半身裸、胸毛まつまつ・・

熊のよくな奴だ・・

明らかに不振な目してゐる。

浮氣疑つてゐる。俺は違つんだ・

そんな目で見ないで・・苛めないで・・

「あのね、なんか、道迷つたしくつて・・

「お金もないし、帰る道も分からんんだって

「もへへ、暗いし、泊まつてこつてもひおつかと黙つて

「あなた待つてたの」

うん、その調子！

その調子で主人丸め込んでください・・

今放り出されたら、俺、野犬にでも食べられてしまします・・

神様

・そうか・・それは仕方なしな・・

「お客人、猶しか泊まつてしきなさい」

あなた。。悔い改めてるけど 良い人だ。

人を見かけて辨識したらしいけないな

反省ノハタ

油めてもらつたはいいけど、寝れないよ。

鼾うるさいけど、それ以上にこの状態では眠りに入れない。

だつて夫婦の足が俺の頭上にあるんだよ。

狭すきるよ！」・・

だけど、贅沢は言えないよな・・

野宿するよりましだよ・・うん

う～ん・・あれ俺いつの間に寝てたんだ・・

！

二人いない・・

どこ行つたんだ？

外出でみよう。

うわ・・俺が出てとたん、村の衆が俺を一斉に見るよ・・
ん・・?あのおじいさん、俺に手招きして
言つてみるか・・

「よお・旅の人・・ギッサムから話は聞いたよ

ギッサム・・?

ああ・・あの夫か・・

「道に困つて帰れないそつじゃな

「そうなんですよ・・・」

「大変ですね」

「大変なんですよ・・・

「朝食は済んだかな?」

「いえ、まだなんにも食べてないんですよ・・・」

「じゃわしの家こんかい?」

「おにぎり作ってあげるよ」

「親切なじいさんだ・・・

「ありがたい・・・

「俺は決めたよ!」

「お年よりはこれから大事にするよ

現実の世界に帰つたら、寝たふりせず、電車で席を譲るよ!」

「さあ、入つて入つて!」

「お邪魔します・・・」

「ちよつと待つてな

待つてますよ～

お、握ってる握ってる・・

おじぎり握のも口ツグがあるんだよな～

俺のむに、つけ麺じゃなーが、こつも不細工なんだ

あの意味尊敬しますよ

「ひ・・たべなとこ」

「有難うござります・・

おこっこ・・

おじぎりがこんなに美味しいなんて・・

たかが、おじぎり、わざと、おじぎり・・

ありがたや～・・

はー食った食った・・

お茶がほしにな・・

そんなものせ、リリシヌ無いかな・・

「「」れ飲んでくだせ～

ん・・・土製の古びた茶碗に、何か液体が入ってるな

とつあえず・・飲んでみよう・・

おお・・これは・・・

サクランボのような酸っぱい匂いがするけど・・

おいしいな・・

「あの～、」この飲み物はなんですか・?」

「ああ、それは、イルボの実をお湯につけて作った飲み物ですじや

イルボの実？初めて聞くな・・

とりあえずおいしから、何でもいいよ～

「それより客人、この後どうするつもつじや・・?」

「ええつと・・」

そつだ、俺どひするつもつじや・・?

そうだ、アツチ村の場所聞いてみよう、あるかもしれない。

「アツチ村を探してるんですが、心当たりないですか？」

「アツチ村ね～、ちよつと地図だしてみるよ」

頼む！

「ビーリじゅつたかのあ・・・」

「あつたあつた・・・」

「ど～れ・・アツチ村・・アツチ村・・」

お願い見つけて～

「あつたよー、ヒーヒから北に5km川沿っこあるよ」

5km・・?

まあ・・歩けない距離じゃないけど・・

おじーさん、あんた最高だよ～

「地図見せていただけますか？」

「ほれ・ヒーリじゅ

ふむふむ・・

ヒーヒから川沿いに確かにアツチ村つてあるな・・

よし言つてみるか～

「俺行つてみます・・・」

「やうか・気をつけてな・・・」

じへさん、ありがと～あなたの事は一生忘れないよ・・・

「ああ・・・やうつ待ちや・・・」

「これ持つていきなされ・・・」

おお、地図と水と藁に包まれたお元氣つゝつ・・・

俺こんなに親切にしてもうつたのいつ以来だろ・・・

泣けてきた・・・

「頑張つてな・・・」

「ありがと～・・・」

声が震えてしまう・・・

涙で前が見えないよ～・・・

ここが村の出口か・・・

俺は新たな旅路・・・

いくぜ・・・

もう後ろは振り返らない・・・

といひで・・・

アツチ村行つて、俺はなにすんの・・・

決めて無かつた・

次の章で設定しよう。

設定完了、再び妄想世界へ

今、現実の世界に帰ってきて、俺はこの文を書いてるわけだが・・・

めんどくせこよな・・・

なんか良い方法はないものか・・・

ずっとあっちにこる方法・・・

そうだ・・よい事思いついたよ。

あっちの世界にいながらにして設定可能な方法

そうだ・・妄想世界にいながら設定可能な携帯を持たせよ!。

携帯に設定を文字で打つと

打った事がすべて現実になるんだ

いいよなこれ・・

なんかこいつ設定書あった氣するけど

パクリとか言わないで・・

携帯にしたから、あれとは違うー。

あれは教えません。

後、そうそう、いずれ、ちょっとした効果や、物事を説明する人が必要だ。

たまに、神の声として、ナレーション入ります。

何が起きてるか、説明してくれる時があります。

オンオフ可

説明臭くなったら切れます。

さあ、またファンタジーのやつきの世界に戻らないといけないな。

あ、そうそう・

今行ってるファンタジー世界がだるくなっちゃきたら

一回いちに戻つて違う世界設定します。

このときだけ俺はいちに戻れます。

よし、プログラミングしました。

あ、そそ、これ見てる人！

俺、頭おかしくないからね。

勘違いしないで・・

よし、取り合えず、やつらのフランタジーの世界に帰りや。

携帯持つたな。

よし行きます。

再び六カモーン！

ストーン

墮ちて行きます、墮ちて行きます

はい、帰つて来ました。

今、やつらの門にいます。

さあ、次の章から俺の旅再開です。

携帯をつまんで使いましたよ

はい、俺、さつきまで寝ていましたよ。

やつぱり俺は一応人間なんで眠くなるんですよ。

早速携帯使いました。

俺の家と打ちました。

俺の家、川沿いの道端にありますよ。

夜は物騒かもしないんで

鍵かけましたよ。

でもそれだけじゃ不安だったんで

バリア張つきました。

原住民が珍しがって、ドアージを開けてきて

入つてこられたら

困りますからね。

夜盗とかだつたりしたら

泥棒されたりして

拳句の果てに殺されたりしたら

ジ・エンドですからね

困つますからね~

取り合えず、そんなことはいいんです。

わあ、俺は田を覚ました。

この世界で俺は生きて生きます。

取り合えずこの家は捨てておきましょう。

だって俺は携帯握った時から、もう神なんです。

いくらでも、どこでも俺は建てれますから

ああ・・・でも・・・俺の世界がつまらなくなると困るから

俺はこの世界を堪能したいので

あんまり無茶なことはしませんよ。

地味に携帯使用します。

いきなり、超人な俺とか携帯には打ちません。

だつてそんなことしたら、旅がつまらなくなつてしまこますからね。

ただ、来た時より心の余裕ができましたよ。

意欲が溢れています。

あ、そうそう・・

取り合えず、こちらで設定しないと・・

そう、俺は昨日、この世界に入る前に

中世の世界観、女、剣と魔法の世界つて

設定したんだけど

それだけじゃ物語がつまらない事に気づきました。

だって、目的がないんですよ。

このままじゃ村を渡り歩く流浪人生活してしまいますよ。

それじゃつまらない。

なんかピリッと塩味が欲しいといふ・

そうだな～・・

やつぱり、剣と魔法つて行つたら、魔王いるかな・・

魔王は書いてる分にはいいけど、俺小心者だから

あんまりグロイ奴だと、見ただけで心臓麻痺起こしちやう。

目に優しい魔王でも作りますか

人間の格好した魔王にしましょ。

携帯使います。

はい・・人間の格好した魔王つと・

あ、ちょっとどんな奴か書いてないな・・

どんな奴にしよう。

あんまり凶暴だと、俺、怯えちゃうから

優しい魔王。

うーん、どうなるか分からないけど

これでいいか・・

優しい人間の格好をした魔王入りました

後、俺寂しがりやなんだよな・・

家族がほしいな

現実の俺の家族がアツチ村に住んでいる」と云ひよう。

アツチ村に俺の家族が住んでいるつと。

アツチ村に俺の家族入りました。

よし、取り合えずこれで行つてみよつー。

さあ、アツチ村いくぞ。

5kmだつたな・・

まあいいよ。

最近運動不足だから・

俺鍛えられるよ。

アツチ村着いたよ！

川沿いなんて歩くの久しぶりだな・・・

あれ・・なんか前の方に入いるぞ・・・

子供だ・・・

何してるんだろ・

上半身裸・で釣りしてゐるな・・・

何が釣れるんだろう・

ちよつと氣になる。

お・バケツがある。

近付いて、中覗いてみよう。

岩魚？

岩魚つてここにもいるのか・

少年、不審そうに俺見てるな・・・

取り合えず、愛想良く話しかけないと

気持ち悪がられてしまつ。

「釣れますか・・・？」

あ、バカな質問してしまった。

釣れてるから、バケツ魚いるんだろ・？

相変わらず「ミコニケーション下手だよな・

「はい・・・ぼちぼち・・・」

なんか、うつとうつそだな・・・

変な奴きて、明らかに面倒くさいうな顔してると・

でも、俺は大人だ。

俺は小心者だけど、子供には強いんだ。

恥ずかしいけど、俺弱い奴には強いよ。

だから、ちょっと上から目線でなんか言つてみよう。

「じゃ、頑張つてな・・・

「はい」

上から目線で言つてみたけど

やつぱり俺ジョントルマン！

酷いことは言えない。

無難に去るよ。

俺はそういう性格じゃないんだ・

地味な奴だから・

5kmって結構歩くな・・

俺足がもう筋肉痛になってきたよ。

ハアハア・・

なんか息きれています。

喉もまた渴いてきた。

アツチ村まだですか・・?

暑いよ・・

どひやり・・現実の世界が夏だったもん

俺の妄想世界も夏が反映されてるようだ・

暑すぎる・・

帽子持つてないよ俺・・・

川沿いの道の左側は、木がずっと続いているから

木の陰に沿って歩こう。

あちー・・・

アツチ村まだかー・・・

え・・・なんだ道分かれてるぞ・・・

そんなバカな・・・

どうしよう・・・

俺もう疲れてるって・・・

すんなり村に着かないと

俺また家建てるしかないよ・・・

取り合えず、やつきの地図見てみよう。

左か・・・

よし行つてみよう。

お・・・看板・・・

アツチ村

やつた・・

もつ近いぞ・・・

門だ・・門がされてるよ・・

村の門戸がわれてる。

ビハシヨウ・・

鉄の門だよ・・

なんだよ・・・

入れてくれって・・

俺の家族がいるはずんだよ・・

口ヲ、開けろ・・

ガンガン！

びくともしない・・・

蹴りいれてみよう。

オラ！

入れろ！

暑いから俺気が立つてるんだよ・・・

早く開けてくれ・・

あ・・なんか人来たよ・

槍持つた人が・・

怒られるかな・・・

でも俺ここに住人なはずだよ。

知り合いのはず。

大目にみてくれるよ、きっと。

「一ひり、門蹴るんじやないよ、拓

「今開けるから」

おっちゃん、早く開けて・・

力チャン！

「ほら、開けたよ」

「どこ行つてたんだ？」

「」の物騒な時に・・・

ええ・・・物騒つてなんかあつたの・・?

気になるな・・

聞いてみよう。

「何かあつたんですか・・?」

「ああ・・最近この辺り、魔物がいてさ」

「人間をさらつていくらしこよ」

「だから、長老が、今、村の門閉めさせてるんだよ」

ふむ・・

魔物つて・・どんな奴だろ・・

怖い・・・

そんな事とは露しりず、さつきまで余裕こいて歩いてたよ・・

取り合えず、俺んち行こ。。

どいだ・・

そういえば、さつきの村と違つて

iji) せ木の家が多いな・・

アメリカの西部劇に出でるよつたな家が多い。

家といつより、小屋か・・・

俺の家しらないんだよ・・

俺の村だつて言つのに・・

ぢひつめしゅうひ・・

路頭に迷つてます。

我が家に着いたよ！

狭い村だ・・

どこかに俺の家族はいるはず

あちこち探してみよつ。

ちゅうと・・いない・・

「こんなにちわ～拓

ん・・？誰よ・

誰か分からぬけど

挨拶しとくか

「ここにちわ・・」

ぼそつと挨拶。

それより家族だ

俺の家族どこぞ

あ！～！

妹いやがつた！

あいつに話しかければ分かるはずだ

「おい、智子」

「ん？お兄ちゃん」

「ど」「行つてたの？」

「ど」「ひて・・なんて言おう・・

うへへへん

悩む・・・俺は言い訳がしにくい奴なんだ。

友達いないんだよ！

友達の家行つてた　却下

この言い訳がダメならなんて言おう・・

「ちょっと一人旅してたんだよ」

苦しい理由だが、これしか選択肢はない。

「ええ・・お兄ちゃんが・・？」

「へへ・・そんな事できるんだ・・」

俺だって、できるよ・・たぶん・

「どうして泊まつてたの?」

「コラチ村つてどいだよ

「コラチ村か〜・・

「知らないわ

そんなことはビリでもいいんだよ

家を見つけないと。

「おこ、智子、一緒に家に帰るつ

「いいけど・・

良いけど、なんなんだよ?

智子につれてこう。

しかし、智子、なにその格好は・・

インディアンみたいな格好してやがる。

智子が小屋に入つていく・

ここか!俺の家!

そうと分かれば、話は簡単。

踏み込むまでよ。

ガターン

「ただいま～」

誰かやつてくれる。

母ちゃんだ。

智子は奥のほうにいるな。

「拓一、どうせいつも歩いていたの？」

「心配したでしょ」

「魔物がうひうひしてゐるついで」

「あんたつて子は」

母ちゃん・・・俺も歩きっぱなしで疲れてるんだから

説教勘弁して・・

取り合えず、なんか言わないと治まらないぞ・・

「一人旅してたんだよ・・」めんよ

「一人旅？あんたが？」

「やうだよ」

「へ～珍しい」

「あんた、そんなことできるんだ」

ちつ、親子そろって同じような事言こやがつて

俺、何にも出来ない奴つて

判押されてるからな・・

この反応には驚かないけどな。

逆に言えば、俺は一人旅したという勲章を

今日得たわけよ。

ちょつとは家族の目が変わるかも？

まあそんなことはいいんだ。

飲み物ほしい。

「母ちゃん、なんか飲み物くれ、冷たい奴

「奥に水瓶があるから勝手に飲みなさい」

ええ・・水瓶つてなんだよ・・

そつか中世だもんな、冷蔵庫なんてないのか

ジューース飲みたいけど、水で我慢するか・・

我慢なんねえ・・

取り合えず、俺の部屋に行くぞ・・

ん~・・ゞの部屋だ・・

ここは・・女もんの下着とか吊つてるし

おかんか妹の部屋だな・・

ここはめどりだ・・

ここ・・男くさい・・

鉄砲が壁にかけられている。

もしかして、おとんの部屋・・?

ん、壁になんか張り紙書かれている。

週2回掃除しなさい、母より

これ絶対俺の部屋だ！

よし、ドア閉めて・・・

鍵かけてっと・・・

携帯使つぞ・・・

もう喉渴いてんだよ。

カラカラ・

俺の部屋に自動的に永久補給する自動販売機設置しよう。

自分の部屋の片隅に全て無料の全自动永久補給自動販売機を設置。

なんか文字長いけど、いいか。

よし、書いたぞ。

自動販売機出できた！

さあ何飲もうかな・・・

無料だから、金入れる必要が無い。

便利だよ。

一生これ担いでれば、飲み物には困らない。

まあそんな事は良いんだ。

カルピスソーダが欲しい

あるある。

ボタン押してつと・・

ガラーコンコン

出て来た、出て来た！

プシュー！ゴクゴク・・

うめ～～～！

最高！水とかありえないよ！

ははは、俺はこの世界で一番良いもの飲んでるんだよ

たぶん、そうだよ！

俺の家族は水だつてよ。

へへへ・・かわいそうにな・・

取り合えず、飲んだし

俺、眠くなつてきたよ

ハンモックがあるな・・

柱と柱で繋がれている。

なんか気持ち良さそうだ。

気持ちいいのかな?

取り合えず寝転んでみよう・・

おお・・柔らかい・・体が沈み込んでいく。

ゆりゆり揺れてるよ。

この揺れが、また気持ちいいな・・

なんだか、眠くなつてきたよ。

寝てしまおう。

鍵OK!

じゃあ寝ますか・・

ねやすみ・・

取り合えず俺この村に慣れるよ。

ああ、良く寝た・・・

こには・・・

俺の部屋だったな

ふあ～～

眠い・

取り合えず、この家に慣れないとな

家族は同じ顔しているけど

習慣や生活が全く分からないし・

しばりへじに留まって、この生活を知りつ。

自分の俺の拠点だ。

外は人攫いの魔物がいるらしいし

臆病な俺が外へ出る道理はない。

この村の生活に慣れるべ。

今何時だ・・・？

時計あんのかな・・

らじきものは、この部屋に無いな・・

丸太を組んだログハウスのようなこの家

木の香りすゞいよ

わけの分からぬ、装飾品あるし

何で鉄砲置いてるんだろ

やっぱ泥棒とか、盗賊除けか？

剣と魔法の世界の癖に鉄砲あるんだな

まあ・・その辺は俺の創造した世界・

穴だらけなのは分かつていたさ

さて、どうすつかな・・

なんか薄暗いけど、夜みたいだな

そろそろご飯かな

一階降りてみよう。

ん・・?

この壁に掛けてある、カウボーイハット見たいな帽子

カウボーイが着そつた服とズボン・・・

俺の私服・・・?

これ着るつてか?

この暑いのに・・・

そりこや、智子の奴、インディアンの女みたいな格好してたな

良く分からん世界だ・・・

ただ、郷に入れば郷に従えつて諺あるしな?

よし、着てみるか

ああ・やつぱり氣色悪い着心地

ズボンが蒸れる・・・

仕方ない、我慢してやるよ・・・

でつかい長靴あるな

これは勘弁してもらおう

サンダルのままでいいだろ?。

しかしカウボーイにサンダル

す」に変だよな

さて、全部着たし

一階行ってみるか

重い扉だな・・

ふー開閉が大変だよこれ

取り合えず、階段降りるか

ん?

智子なにしてるんだ?

鉢みたいなんで、なんか摺つてるよ

「智子、なにしてる?」

「ああ、お兄ちゃん今頃起きてきた

悪かったな・

「パウパウの実、摺つてるんだよ

「こつものパウパウの、アマ煮だよ」

ほー

また良く分からぬ実が出てきたな

うまいのかな?

まあいいや、食えば分かる。

「お兄ちゃん、お父さん呼んでたよ」

「なんか用かな」

「たぶん、魔物が良く現れるから」

「剣術の稽古でもさせんんじゃないの?」

「今みんな村の人たちは訓練してるからね」

「なんで剣だよ? 鉄砲あるじゃん」

「撃ち殺しちまえよ?」

「なに言つてゐるの?」の間出た魔物

「全然、銃効かなかつたじゃない」

「だから村で、男達は剣の練習するつになつたんでしょ?」

ええ・・俺に剣もたせるの?

そんなんできるわけないじゃん・・

俺はいつちゃなんだが、バッグ以上の重さのもの

最近持つた覚えないぞ?

誰か来た、親父?

「拓一ほり、食べる前に訓練するぞ」

「表にでる」

「ええ・・・」

「お前も一家の長男なんだから」

「女子供守れなくてはな」

「俺に訓練させるの?まじで?」

それにして、親父、その格好なんだよ!

鉄の甲冑着込んでからに・

盾もつてるし

うわ、その太い剣俺にもてつてか？

いや、その前にその重そつなの俺着るの？

「拓！-わいつわと着替えてこりんか！」

「一階の部屋にあるだろーとつとと着替えて来い！」

「痛い・」

盾で尻殴られたよ。

取り合えず一階に上がるか、逃げ、逃げ

親父、家では大人しいサラリーマンだと思つてたけど

なんですか、あの勇猛果敢な性格は・・

現実の家じゃもつと疲れた顔してる癖に

くたびれた感じで、家で「ロロロロロト」みてるじやん・

環境変われば性格も変わるってやつですか？

これ着るのか・

取り合えず全部着てみるか

これから着よう。

まず足かな？

うんしょ、うんしょ、入った。

ふう・・

次はこの鉄の鎧・・

頭からかぶるか

髪はささまつた！

ちゅつと待つて・・

スボ！

入ったよなんとか・

次は頭だよな

いや、これ今着たら

たぶん、階段からこけて落ちるよ

酷い目にあうに決まっている。

脇に抱えて降りるか

盾も持つていかないとな

あそそ、剣も・・

ちゅうと一回じゅや運べないな・

剣と盾は後で持つていこづ。

よし動くぞ！

うわ・・重いよ・・

ガチャンガチャン言つてゐし

うお・・こけそづ・・

うわ・うわ・・

ガシャン！

痛たたたた

尻餅打つた・・

まともに歩けないよ

びひしきよ・・

いや・・もう一度チャレンジだ

立つぞ・・

足に神経を集中せり。・

よし・立てた。

じゅ・歩くぞ・

右・左・右・左

何とか歩けそうだ・

階段怖いな

この格好で落ちたら死ぬぜ?

・・・

どうじょ・・・

ええ~い

やけくそだ・・

やつたる。

いくぞ・

手すりもって・・

慎重に・

こななによひて、こななによひて・・

右足からだ

ミシ・

よし、なんとかいけそうだな・

ミシ・

その調子その調子・・

ミシミシ・

ダン!

よし一躍に降りたぞ

俺す、こー！

快挙だよ

ハハハ

俺やればまだかるじ ゃん

でも、降りたけど

上がれねえぞこれ！

剣と盾どひしょ。

「拓用意できたか？」

「剣と盾が上にまだ・」

「親父とつてきてくれない？」

「仕方ないな・・・

親父上がれないだろうな・

俺でこんな状態なんだ

あんたフル装備だぜ

無理無理・・

え・・・

え・・・?

・・・なにその軽い足取り・

スタスタ上がっていきやがる。

ガシャンガシャン、わせながら。

ミハミシコッてるよ

す」によ親父

パワフル！

ちよつと見直したよ。

お、降りてきた。

「ほり」

「甲冑の腰のベルトに挿しておけ」

「重い・・」

「なに言つてるんだ、こんなもの如きー・」

「よし、外出るぞー！」

ああ、本氣でやらせるのね・・

死ななきやこいけど・・

へたれできたよー！

「拓構えろ」

「何を？」

「盾と剣をだ

「重こみ・・・」

「無理だよ、親父」

「歩くのだって、ままならなこの元

「何言つてゐんだ

「せひ、構えろ」

親父・・無理・・・

初めから無理だよ

だって、俺はもともとへたれなんだよ・・・

無茶い・すき・・

つこひいけねーよ・

とにかくやさんねーからな

断固拒否！

「仕方ない奴だな・・」

やつと折れたか・・

「今日はお前晩御飯抜きだ！」

いらねーよー

親父なんか怒りながら家入って行つたよ。

俺は勝利したぜ。

俺のヘタレを貰いた。

晩飯だと？

そんなもん携帯さえあれば・・

取り合えず、家入ろー。

「あ、帰つて來た」

「お兄ちゃん、お父さんカンカンだよ

「あ、そつ」

ほつといってくれ・・

俺は元々へたれなのはお前も知ってるだろ？

取り合えず、この鎧脱ぎ捨ててやる。

やつてられつか・

オラオラ～

ガシャン、ガシャン、ドカ！

はーすつきりした。

「ちよっとお兄ちゃん・・

「これ糞重いんだよ」

「もう少し丁寧に扱いなよ」

「ほつとけー！」

うるせーなー・

取り合えずだるいから

自室に帰るぜ。

親父の説教も聴きたくない。

わざと入って鍵閉めよう。

ダン・・ダン・・・ダン！

階段一段飛ばしで上がつてやつた。

キイーーーー！バタン！

力チャカチャ！

よし、俺の身柄は安全だ。

口口は俺の聖域

誰にも邪魔はさせねえ・・

ドカ！

ギイ、ギイ！

ハンモック気持ちいい～

この揺れ最高。

ネットサーフィンでもしたいな・・

あるわけないか・・

だんだん、この世界の不便さが

俺の身に染みてきたぜ

はつきりいってきついよ、

このままでは、何れぶちきれて

とんでもない方向に行くだらうな。

どうすつかなー・・

そうだ、取り合えず、俺

前々から夢があるんだ。

空をとびたい。

漫画の主人公みたいに、スイスイ飛ぶんだよ

道具もなんもなしにな。

超能力みたいなもん？

そうだ、それしよう。

今の荒れた気分を立て直すには

それしかないよ。

携帯使つぐ。

お題は〜

俺は自由に空を飛べるつと

よしボタン押して発動！

これで俺はもう飛べるはずだよ。

寝たまま浮かんでみよう。

お・・・・浮いてきたぞ・・

おお・・・上げえ・・

ふわふわ、浮いてるよ。

天井にへばりつこて見よつ

忍者みたい。

ちよつと部屋を一周してみよつ。

ブーーーン！

ドカ！

照明に頭ぶつけた～・・

痛え・・・

血だよ、血！

ちゅうとせまい・・

ドクドクでてるよ・・

携帯だ！

なんて書いつ。

よし、なんでも治療マシーン

これで良いだろ？。

やばこから早く

押しだぞ。

なんか天井から出てきたよ。

このHレベーターの箱みたいなのに

入ればいいのか

やべ・・そんな事語つてる余裕がないよ

血イイイイ

ウイーン、扉開いた。

入りや。

シユー——

扉閉まつた。

頭上から気持ちいい空気みたいなものが

出てきたぞ

チン！

ん？なんだ、この歯は・・

お・・・・血止まつてゐる・・

す”こ”・・・傷もねーよ。

シユー！

ドアが開いた。

ふ”・・ひとまず俺の傷完治

びびらせやがつて・・

それにもしても、空飛べても

俺の体は脆いままなんだよ。

外でたら、俺のことだから

またドジ踏んで、木とかにぶつかって

勝手に大怪我しそうだよな。

どうするかな・・

そうだ・・・俺の体の周りに

見えないバリア常に発動させよつ。

よし決定！

携帯だ！

俺の身を守るバリア・・

待てよ・・・これ作つたら・・

物とか触れなくならないか・?

触れる前にバリアが邪魔するんだよ・

それは困るな・・

コップだつて持てない。

飲み物も触れない。

どうしよう・

簡単だ。

俺の身を守る、どんなものも通さないバリア、オンオフ自由！

これでOKだ。

ボタン押した！

よし試すぞ。

今バリア状態。

まず浮いてみよう。

そして、この状態で壁に突っ込むぞ。

少し早めに突っ込んでみよう。

ちょっと怖いけど・・・

いくぞ・・・

オラ～～！

ドカーンー

やべえ・・・

壁貫いたよ。

階段まで出でたよ・・・

木材がひりひりてるよ。

家壊しちまた。

ああ、みんなここ見てる・・・

これはまずい！

逃げるぞ・・・

いつなってはこの村出ぬしかない・・・

わいば俺の家族・・・

またいつか余おつ・・・

「オヘヘ！」

俺は今窓から飛び出で

かなり上空まで一直線で飛んできたよ。

夜の空、気持ち良いく〜！

最高〜

わいの後ひつかな・・・

小難しい事考えてみたよ

ふう・・

飛び続けています・・

さつき、不覚にも全てが面倒くさくなつて

切れてしまつた。

そして、携帯を乱用してしまつた。

そう、俺は既にさつき一つの事柄を

現実化してしまつた。

それがどういうことか・・?

もう普通の人間ではありません。

超人になつてしまつています。

これは避けたかった。

しかし今更無理な事だ。

携帯には解除ボタンはない。

解除できるのは、この世界をテリートしたときのみです。

まあやつちまつたものは、しょうがない。

夜空を飛びながら、そんな事を考えていた。

ポジティブ思考でこの世界を楽しもう。

超人として、生きるしかない。

今、俺の能力は

1・空を飛べる 自由自在。

2・体に何者をも寄せ付けないバリアを晴れる、オンオフ可

1は大して問題ないかもしれない。

飛ばなきゃいいんだから。いざつてときだけ、飛べば良い

だけど、2のこと、深く考えてみた。

2もオンオフ可なので使用しなければ、問題ない。

ただ、使用した場合、どうなるか

要是は無敵のバリアを自由自在に操れる力

そのバリアを、どんな力も貫く事はできない。

それがどういうことか？

そのバリアをはつたまま、物体にあたると
どうなるのか？

例えば、バリアはつたまま手で何かを殴るうと考へる。

そのバリアはどんなもので攻撃しても貫けないといふことは

そのバリアを張った状態で手が移動する分、物体も移動する。

それは即ち、移動が大きいほど物体へのダメージが大きいといふ事。

思いつきり殴れば、どんなものも破壊できてしまう。

どんな頑強のものも、思いつきり殴れば一撃で壊れるだらう。

この能力の危険さが、分かつてきた。

今、バリアを張りながら、飛んでるけど

触れる物、全て壊していきます。

木にぶつかれば、木をぶちあつて、進んでいきます。

相手が植物ならまだしも、これが動物だと

すごいグロイことになってしまつ。

加減して叩けば、それほど効かないだらうけど

思いつきり叩けば、碎け散る事間違いなし。

そして、俺は更に気づいてしまった。

小説やアニメで人や、魔物を倒すって

簡単に書くけど、それを実際に見た場合

とんでもない精神的ダメージを受ける事を。

要は魔物を倒せば、魔物殺し

人を殺せば、人殺しなんだ。

そりや、魔物といえど、破壊したら

ぐちゅっとなります。血もびざびざっと出るでしょう。

俺はそんなのに耐えられる自信がない。

今まで平和に生きてきたんだ。

ファンタジーの世界で活躍するとか

気軽に書いたけど、中の世界は現実であり

起こったことに対しても、精神的ダメージを受けるのも

俺だ。

甘かつた・・

例え、これが超人パワーなしの場合だとしても

剣が相手に当たれば頭は割れる。

その光景を考えると、恐ろしい・・

だから、俺は平和にこの世界を旅したい。

ただ、どうなるかは分からぬ。

旅には危険がつきもの。

ましてや、優しいとはいへ魔王がいて

魔物がいる世界です。

剣と魔法の世界なんです。

相手を破壊しなければいけない、シーンがあるかもしねりない。

そうなると、それを受容するだけの精神が無いと

俺は壊れてしまつ。

なんか難しい事言つてるけど、そういうことなんだ。

2の能力は慎重に使わないといけない。

ただバリアとして使うだけとか。

間違つても、バリア張つたまま、女の子殴つちゃいけない。

軽くはたいても、死ぬかもしない。

強弱を覚えないとダメだ。

オンオフの時のタイミングも考えないと

さてと、家飛び出してきた俺は

ビルへ行けば。

そうだ

とりあえず、町に行きたい。

イタリアや欧洲のような町だ。

綺麗な建物、レンガの家。

中世らしい建物がいい。

もう、訳分からん村はいやだ。

村が嫌！

あんな長老とか、村根性ある場所が嫌

共同体みたいなの嫌なんだ。

とりあえず、一人の旅人として、街に潜入したい。

街ないかな。

街探すぞ！

従者作ひやうひよ？

俺は街を探して高速で飛び続けている。

高速で飛ぶと、顔に当たつてくる風が

半端じゃないので、前が見えなくなる。

それを防ぐため、バリアを張つている。

街はないか・・?

中世ヨーロッパの街がいいよ。

村はもういい。

どうかないかな・・・

景色が後方へすっとんでいく。

すじこスピードだ。

今眼下には山脈が見える。

山脈と山脈の間には川が流れているな。

街はどうだ・・・

ん・・?なんだ・・?

海・・・

海が見えてきた。

潮風の香り。

あ・・・なんかぶつかつた・・

やばい・・・やつちまつたかも・・

カモメか・・・?

いや〜〜

も「つ」たってからも進んでるから

その残骸を田にしないけど・・

「めんなさい、カモメさん、成仏してください。」

見なればいい・・

見なければ、なかつたことに・・

罪悪感にさいなまれない。

だんだん俺の感覚が「ううううのを

繰り返して麻痺していくんだろうな・・

ん、海を越えたぞ・・

また大陸だ。

・・・

平地が続いている。

ん・・・！？

あれなんだ・・？

なんか丸い円状の白いものが見える。

これは・・

都市だ・・

しかも城下町っぽい

俺は急停止した。

上空からその街を眺めている。

真ん中にお城が建っている。

その周りには、放射状に道があり

建物がいっぱいあるよ。

木の家じゃない！

レンガや土？石？でできた家だ。

俺は中世の家はしらないから

何で出来ているかは分からないうが・・

これは・・とうとう見つけたか・

かなり飛び続けてやつと見つけた、街。

よし、街へいくぞ。

そうそう、俺は超人ではあるが

超人である事は取り合えず隠しておきたい。

街の少し手前で降りて、歩いて入っていこう。

街の入口には兵士が立っている。

取り合えず素通り。

ドキドキ・・・

なんかこいつを見ていますが

呼び止められなかつた。

ふう・・

街潜入成功。

石畳の道が続く。

両側には、石の壁の家、レンガの家、漆喰の壁の家が立ち並ぶ。

結構人いるな・?

綺麗なドレスに羽帽子みたいなのがつけた女の人

鉄の帷子つけた、兵士? 傭兵?

貴族風の男

布の服をきた平凡な感じの男

スカートに上はコルセットみたいなのつけた町娘

小汚い布の服をきたおっさんが地面で座つていてるし

やつぱり俺見られてるよ。

半そで半ズボンは珍しいみたい。

サンダルだしな。

ちょっと建物と建物の間の細い道に入ろう。

樽がある・・・

樽・

何が入ってるんだろうな。

両脇には石の壁が続く。

人はいないな・・・？

俺がなぜこの細い人気のない脇道に入ったか？

そう、俺はあるものを実現化するため

携帯を使うために入つたんだ。

俺は空を飛びながら思い出していた。

一人旅は心細いと・・・

俺は空を飛びながら思い出していた。

偉い人とかには、従者みたいなのが付き添つてゐるよなって

水戸黄門とか、助さん、角さんいるよな？

ドンキホーテですら、パンチョつて従者がいたはず。

そう、俺は俺に忠実な旅のお供が欲しくなったんだ。

俺の命令に絶対服従で

俺の話相手になってくれる。

優しい性格。柔らかい口調。

話にあわしてくれる、

言つ事をすべて温かく聞いてくれる。

たまには助言してくれる。

暴走をとめてくれたりする。

俺のために命を投げ出してくれる。

俺に説教臭く垂れない。

機転が利く。

そういう従者がほしい。

ある意味保護者?

そんな旅のお供が欲しくなったの。

携帯使ひや

なんて書いへ。

俺に全忠誠を誓つ従者としようつか？

その前にどんな奴か設定しないと。

男か？女か？

この場合は男の方がいいかな。

女だと緊張するし

男の事が良く分かる奴がいい。

顔は、どんなにしよう

イケメン？いやダメダメ

俺がコンプレックス感じるような奴はダメ。

ブサイクにする？いやそれもまた、それでいいものがある。

横歩きたくなくなる。

普通の顔にしよう。

あ、その前に年をいへよいへ。

じーさん？若者？

うーん、中年にするか。

30後半のおっさん。

じーさんだと体力的にきつそうだし

若者だと、人と対面するとき舐められそうだし。

それ相応に押ししが利く中年がいいだろ。

ヒゲはやす？

ヒゲ却下…むれ苦しい。

頭は？ハゲ？

短髪でいいな。

金髪にしよう。

目は細く優しい顔にしよう。

背の高さは、俺より少し高くくらい

ああ、ちょっと待てよ

こんなに書いたら携帯の文字がすこい長いやん。

まいつか、少し削りつつ。

俺に全忠誠を誓い、すごい従順な30後半で
短髪で金髪で背は俺より少し高いくらいの、
優しい目をした、優しい性格で優しい口調で
喋る、機転がきく、普通の顔をした貴族風の
ヒゲの生えていない男性の従者。

なげえ・・・

しかし何とか打てる。画面スクロールしたけど・・・

これでボタン押すぞ・・・

さあ出て来い

我が僕よ！

従者「きつかうよ~？」

どんな奴ができるんだろ・・

煙のよ~うな者が現れたかと思つと

だんだん人間の姿へ変わつてくる。

「いっは・・

ブラックドピットの出来損ない見たいな顔してゐるぞ・・

確かに金髪、ひげも無い。優しげな細い目

30代後半くらい、俺より少し背が高い。

大体外見はそのまんまかな。

中身だよな?

「はじめまして、『主人様』」

「私の名前はピエール、レプリコットと申します」

「なんなりとお申し付けください。」

「うんうん、いいかんじ。」

「えっと・・・ピエールさん、私は拓つて言います」

「拓様ですか、分かりました」

ふむ・・・まあまあかな

初対面の挨拶は終わったから

ジリジリ偉そうになつていいくかな。

「あ、ピールさん、ピールって呼び捨てにしていい?」

「どんな呼び方でも、結構でござりますよ」

うそうそ、忠実ですな。

「じゃ、ピール、街の中心部にでも行ひつか

「はい、かしこまりました」

会つて3分も経たなこづちに言葉が、変わつていく俺。

わて、どこ行くかな。

大通りに出るか。

俺の少し後ろをピールは歩く。

話せる距離は保つておるようだ。

「ピール、喉が渴いてきたよ。」

「どこか、酒場にでも寄りましようか？」

「俺酒飲めないよ？」

「ジュースもありますよ」

「でも、俺金ないよ？」

「…………」

「ん？ ピールどうした？」

「お任せください・・・」

「拓様、少しこの外灯の下で御待ちいただけますか・？」

「いいけど

「じゃちよつと行つてきます」

「こつてらつしゃい

ピールは人ごみに消えていった。

どこ行つたんだろうな・・・？

ん・・・？

ピール帰つて來たよ。

「お待たせしました・・・

「お帰り、ピエール」

「ど」「行つてたんだい?」

「あ・・それがその・・・」

「主人の質問にはきつちり答えてくれよ」

「ちょっと偉そうに言つてみた。

ん・・・?

ピエールどうした?

俺に顔を近づけてきて・・・

「大変言つにくい」となんですが・・・

「よひしいでしょか・・・?」

何で、そんなボソボソしゃべるんだよ?

「実は・・人ごみに紛れて、ご婦人から財布をすつてきました

え・・・・・?

ええええ・・・?

「お、お前、それ犯罪じゃないのか？」

卷之三

「お静かに・・」

「分かつております。」

ですが、ご主人様がお金が無いと言わされましたので」

私もお金は持つていませんので……」

一早急に手にいれるには、これが方法がながつたんですね。

ପ୍ରମାଣିତ

「大丈夫です、私こうみえても、手の先は器用なんですよ」

「何の感触も残さずにすり過ぎましたから」

「婦人は愛してないはずですよ」

二二一 お前は

アハセー 又ハノンかよ・・・!!

俺の従者はいきなり、泥棒はたらきやがりました。

俺はこいつの主人だから、いきなり共犯かよ！

俺に犯罪者の汚名、いきなり着せやがつて・・・

とんでもない奴だ・・・

まあ、でも、俺はそんなん気にしないからいいよ。

ばれてないんだろ?

余裕余裕。

少し冷静に考えたら、なんかこいつ遅しく感じ始めたよ。

「じゃ、ピール酒場へ行こうつか」

「はー、参りましょ。」

「(+)の酒場はいかがですか?」

「どうあえず、オレンジジュースあつねひ?」

「たぶん、『やれこま』

たぶんか・・・

まあいつか、アルコール入つてなればいいよ。

「よし、入るわ。」

「御意!」

微妙に言葉代わる奴だな・・・

まあいいか。

「おーい、そこ」のバーテン

「この方に、オレンジジュース持つてくるよ!」「元気

俺以外には、ふてぶてしくなれるのな・・・

「へいへい、オレンジジュースですね」

「ちよっと御待ちを。」

「拓様、そこの席が空いていますので」

「どうだ?」

お、椅子引いて、手を傾けてくれてる。

良いぞ、良い感じだ。

「へい、御待ち

「拓様、オレンジジュース来ました」

「お召し上がりください。」

「つむ」

だんだん王様氣分になってきたぞ。

「ゴクゴク・・・

おこしこれよ。

「ペホールよ、この後どうするへ。」

「そうですね。」

「拓様、いらっしゃり、初めてですよね。」

「そうだよ。」

「実は私も初めてなんですよ。」

そりや、さつき出来たばかりだしな。

知つてたらす、じよ。

あ、また顔寄せてきた。

ボソボソ

「とつあえず・・さつきの『婦人』・・

「結構お金持つてましたので・・

「しがりへまお金に不自由しないとかと思われます。」

「今日の宿を予約しておれたないと思こませ。」

「ふむふむ」

なみせん・

「JRの料を出せばいい、宿の料配してもいいね。」

「あー、わかった。」

「じや、出来つか」

「イエッサー。」

言葉変わる奴だな・・

「服買ひまつたや〜

「宿の手配してきました」

「うむ、ありがと〜」

・・曇潤つたし、この後どうすりつかな・

「ペトール、俺なんか退屈だよ

「それは困りましたね」

なんか面白いことない〜?

「拓様、キャッチボールでもしますか?」

「やだよ」

「俺、前ボール取り損ねて、顔面に当たってから

「アラマドリーナってんだよ

「そんな暗い過去が・・

「もつと面白い事ない〜?

「ちよつと街を歩きましょ〜か?」

「そうだな」

人多いな・・

俺は人ごみ、あんまり好きじゃないんだけど

しかし、どいつもこいつも、ジロジロ俺見やがる・・

嫌になつてきたな・・

この格好が悪い・

「なあ、俺、この格好だと立ちすわるよ」

「さつきからジロジロ見られて氣分悪いよ、ピエール」

なんとかして・・

「そつですか・・じゃビンかで、着るもの購入しつこましう

「鎧とかカウボーイの格好は嫌だからな

「軽い布の服がいいですか？それとも私の着ているような貴族用の服とか？」

「軽い布の服でいいよ、」

「その格好は暑苦しい」

「承知いたしました。」

もつあのガチャンガチャンは絶対嫌だ・・

熱いんだから、通気性のいい服装が良いに決まっている。

「では、ここに仕立て屋に入りましょ。」

「OK!」

カラソカラソ

「主人いるか?」

「はーいはーい、どのよつな服お探しですか?」

「拓様に、軽いお洒落な布の服を用意して欲しい」

ああ、この主人もジロリン」と俺を見てるよ・

珍しいんだろうな・・

「ええつと・・では・・ちょっとサイズを

巻尺取り出して、俺のサイズ測りはじめたよ。

・・俺最近ウエストが・・心配だな・・

太ってるかもしれない・・

「ちよつとお待ちを・・・」

「これなんか、いかがでしょうっ。」

「ちよつと色暗いな・・・」

「上は明るい白がいいな。」

「ズボンも白っぽい色でいいや」

俺は服装はあまりこだわらない。

とにかく軽くて、さっぱりしたのがいい。

「これなんかいかがでしょうか?」

「あ、いいなあ・・・」

「それ試着させてくれ」

「では、いらっしゃへ・・・」

うん、中々着心地いいぞ。

風通しもいいし、肌触りもいい!

「これどうだ? ピール

「似合つていぢやないですか?」

そつか、由つぽい上卜の布の服とズボン。

これで決まりだな・・

後サンダルどうじよつか・・

長い靴嫌だな・・

「あんまつ長くない靴ある?・・

「ええ・・ありますよ。」

「それ持つてきて。」

「かしこまりました。」

「どうぞ」

お、良い靴あるじゃん。

短めの皮靴

履いてみるか

うん、いいかんじ

サイズはあつてるかな?

「サイズもぴったりのようですね」

店主が俺のつま先を押す。

歩いてみるか。

カツ、カツ、カツ

いいね

「気に入つたから、これ全部もひつよ」

「有難いわいります、では会計致します。」

「ピエール、俺外出てるから、会計頼むよ」

「仰せのままに」

いいねーいいねー！

新しい服は

こつちきてから、汗だくのまま

ずっと同じ服着てたんだから。

気持ちいいよ。

ほらほら、みんな全然みないよ。

溶け込んでるよ。

ピールいいよ~？

「お、ピール出てきた。」

「拓様、かつこいこですよ、その格好」

「決まりますよ」

「だり、だりー。」

ピールお世辞つまいな~・

世渡りつまやうな奴だよな~お前。

まあ、俺も決まってるとは思つてたんだ。

格好いいかはしらないが、わざわざしてるよ。

南から吹き込む風が俺に清涼感を送れる。

服装が新しくなると、風の心地よさを感じる余裕が出てくる。

取り合えず散歩したくなつてきましたよ~。

気分最高潮、夕方の散歩と行こうじやないか。

「ピール、あそこの高台へ通じる路地を歩いて行こう。」

「かしこまつました。」

少し坂道を歩いて上がっていく。

気持ちいいな

そんな俺の静かな気分をぶち壊すような

けたたましい声が聞こえてくる。

なんだなんだ

俺が夕方の散歩を穏やかな気持ちで、満喫している時に・・

「あんた――――」

「あの女と浮^{ハラ}してゐるでしょ―――。」

「だから、それ勘違いだつて!」

「嘘おつしゃ―――!」

「私みたのよ――――。」

「あんたが樂しそうに喫茶店で、あの女と話してゐるといふや

「それは仕事としての付き合いだよ」

「わうわ・・これは・・

男にとっては修羅場ですね。

浮氣の現場発覚して、嫁さんが発狂しますよ。

ああ、引き返したい。

「ピエール、なんかつるさいから」

「さつさと通り抜けよう。」

「わうですね。」

よし、さつさと通り抜けるぞ

巻き込まれないよつに・・

「あんたなんか、死んじやえ！」

「ひりひり、物なげるなー！」

「人が通ってるだろ」

「やめひつて」

ガーンー！

グアア・・

痛い〜〜！

フライパンが足に当たった〜〜！

「ルア～～！」

「いたたたたた」

「拓様大丈夫ですか！」

「痛いよーーーーー！」

赤くなつてゐよ・・

「ほら、当たつただろ・・」

「どうあるんだ・・」

「あんたが悪いのよ」

なんだといひー

お前の責任だらうが！！

「拓様・・ちよつと御待ちください」・・

ピエールは一人に駆け寄つていいく。

ピエール、お前どうするつもりだ・・？

犯罪だけは辞めてよ・・

「申し訳ないが、今、あなたの投げたフライパンが

「私の主人である拓様に当たりました。」

「どう、責任とるおつもりですか・？」

「『めんなさいよ』、うちの家内が・・・」

「あんたが浮気なんかしなければ、こんなこと・・・」

「いつ、自分のしたこと謝らないつもりか?」

「んじゃない女だ・・・

「ちゅや、怪我してるんだぞ。

「はつきり言いますが、あなたの投げたフライパンが」

「我が主人に当たったんです。あなたの『主人は関係ない。』

「責任とつてもらいましょうか? もちろんあなたに・・・

「ええ・・・す・すみません・」

「おお、さすがピエール、押しが聞くじやないか。

まあ当然っちや当然。謝るのはあの女だよ。

「拓様はこの街を治める市長の甥に当たるお方」

「俺ってそうだつたんか・・・ほんと・?」

「謝つてすむ事じやありません。」

「兵隊を連れてきて牢獄にいれましょ'つか?」

「おいおい、そこまで言わなくとも・・・

「従者殿、それだけは勘弁してくださこ。」

「家内に悪氣はないんです。」

「私が浮氣したのが、悪かつたんです。」

「あんた・・」

「そんな事は知つた事じやないですよ」

「あ・・賠償金払います。」

「リリーリー50万ポルンあります」

「怪我の治療にお使いください」

お金・・

「仕方ないな・・今回はそれで勘弁してあげましょ'う」

「次は気をつけとくださこね」

「はい、すみません――」

土下座をむくるな・・

ピールの奴、うんうんって頷いてるし。

あ、ピールにつけた。

「拓様、さあ病院へ参りましょう。」

「きつちつ治療代はもうつてきましたよ」

つて、50万ポルンつていくらなの?

もうこゝでなんじや・・?

でも中世の病院つてなんか怖いな・・

医療技術いまいちだろ?

「え・・病院・・? 中世の・・?」

「なんか怖いよ」

「ほりみてみてー歩けるよ

「足見せてください。」

「ほれ・・」

「アザだけですが、骨にヒビがあるかもしないですよ

「やうなの？」

「あ、でもこや、絶対嫌。

病院は拒否。

「いって！」

「お前は俺の言つ事聞けば良一のことはいい！」

「は・はー、宅様がやうのでしたり・

後で携帯で治療マシーンだして治していやつ・

まあ、こいつの強さと俺への忠誠心は

本物のようだ。

これからも頑張ってくれよ、ハール！

犯罪者まつじぐひだよ～？

「拓様、そろそろ宿屋に参つましょ～。」

「はーい」

なんかこことこると、楽なんだけど行動が縛られるんだよな。

「部屋はまじりになります。」

「夕食は7時に召使がお持ちいたしますので」

「うわへつしてこつてくださこな」

はいよ～宿屋のおつかや～。

疲れた足取りで階段を登る俺

「ホール、背中押せ」

「はーい」

俺はホールに、もたれかかる様にして部屋まで歩いていく。

「セイの突き当たりの部屋ですね

「開ける」

「はい」

「イーイ

ああ、もうクタクタ・・
気持ち良さそうな、ふかふかベッドだ。
俺は沈み込むようにして、ベッドに寝つけるがった。

俺はずっと考えていた。

従者を作ったものの

色々やつてくれるけど、過保護すぎるとて・・
俺はこんな体たらくな、生活送るために
この世界きたんじゃないよ。

「ペーパー

「はい」

「なんかこいつ、もつと刺激的なことがしたい

「刺激的ですか・・

「俺はそ、平穏な奴だけど、スリリングに満ちた生活を

「送りたいって願望もあるのさ。」

「なるほど・・

「じゃ、船でものつとつて、海にでもいきまいか?」

「はえ・・・」

お前突拍子も無いこと言つ奴だよな。
お前の発想の転換が結構好きだぜ。
しかし泳げない俺に海は酷だ。

「それは辞めとこりつ、他にいいのない?」

そうだ、女が足りねえ

旅だといつのに、野郎一人なんて嫌だ。

「なあ・・・俺は女と旅がしたいぞ」

「(ノ)婦人とですか」

「そうだ」

女だ

女を持つてまいれ。

「分りました・・・」

「でも、取り合えず今日は寝ましょつ。」

「そうだな・」

ピールはランプの光を消すと横になつた。

・・・・・チョンチョン

「うへへん・・朝か・・・・」

ねむいなあ・・
でも暑いから、もう寝てられないよ
あれピエールいないぞ。

「拓様」〜〜〜！」

なんじや ひまい？

「外に馬車を用意しました。」

「街を出ましょひ。」

「なんだよ急」〜〜・・

「朝飯もまだじゃないか・・？」

「朝食もまだじやないか・・？」

ほお～でもなんで、そんな急いでるの？

「わへ、チョックアウト済ませてこますので・・」

「行きましょひー。」

わかつたよ・・・

俺達は宿をでると、馬車の前までやつて来た。

「拓様、私が馬を走らせておきますので」

「その隣にお座りください。」

ええ・・なんでも中によつて座らせてくれないの?」

ん・・・?

え・・・・

俺は馬車の中を見た。

後ろ手を縛りられて、口にナフキン歯まれた女の子が乗つてくる。
なんか、うーうー言つています・・

「おこ・・・この後の席の女の子はどうなた・・?」

「・・・・・・」

「とある、家の町娘をそひつて来ました。」

「ですので、足がつくと必ずこので」

「馬車で早めに、この街から出て行くをましまづい。」

「おこ・・れつて・・誘拐つて言つさじや?・?」

「話しあは後ですー。」

「ハイヤー、パシーンパシーンー！」

馬車は猛スピードで走っていく。

俺・・どうなつちゅうんだう・・

殺されちやうよ・・

俺達は街から随分離れた森までやつてきた。

「ピユール！」のくんならいいだろ」

「やひやひ止めてくれよ」

「酔つかやひよ」

ゲロゲロ～、ピユール爆走しそぎだ・・女の子も心配だし

止まつてくれ、そろそろ・

「分かりました、ここは人気のない森」

「ソレなら・・泣いづが叫ぼづが助けはきませんね。」

ピユール・・さらりと怖いこといつ奴だ・・

「ダウダウー」

馬車は停止した。

「ピユール女の子可哀相だから

「解いてやつて」

「はい、拓様」

「すまないね、痛かつたでしょ、今解くから」

ピエール、誘拐してきたわりに、何その優しい態度。

まあ・・・やっぱり俺の作った従者。

ジエントルマンなことは持ち合わせてこりゃうだ。

「ブハ」

「ゲホゲホ」

ちょっと女の子咽てるな。かわいそうに・・・

「ゲホ・・・」

「ふー」

女の子美人だなあ・・・はつきりって可愛い。

俺の好み、色白だし、ぽっちゃり体型デブじゃないし、目はパツチリしてて

栗色の髪にボーネテールつというのかな、後ろで束ねているだけか

胸も程よく大きいよなあ・・・あ・・・俺、無意識に審査してる上

そんなどころじやないよ。今から怒涛の言い訳しないとな・・・

「あの～すみませんね。うちの従者が・・とんでもない事を」

「ん?この人攫い、あなたの従者?」

「ええ・・・」

うわ・・誘拐されてきた割に、怯えるビックリか

そんな強気な態度で・・結構きつい子だつたりして。

「あなたが命令したのね!」

「いえ・・滅相もありません・」

「問答無用!――!――!――!」

「ギャアア」

「うわあ・・女のお子が飛び掛ってきた。

右パンチ顔面にもらつた～!

「うつー!」

腹に蹴り!俺の体が九の字に折れる。

「ぐえ・・・」

さつき食べた物リバースし・・ぐえ・・

アッパ～顎が跳ね上がる、頭くじらつときたよ

「辞めて…お願い…ううう」

尻に蹴り入れられたら、痛いって・

俺、地面に倒れこむ。

「ドサー！」

「辞めて辞めて…」

うげえ…唇切れた…痛い、痛い！いじめないで…

怖い、マジで怖い助けて…ピエールなんとかせんかい！

俺死んじゃうぞ。

「この～蛆虫が～ドカドカドカドカ！」

まだ、俺、腹蹴られてるってば！

この糞女、止めてってば…

死ぬ～！ダズゲテ…

ピエールは女の手を掴んだ。

「ゴラ～！拓様になんてことを…！」

「つるさい～」の人攫いめ！」

「あんたもこいつなるんだよ！」

「私を舐めるなよ～これでも武道の心得あるんだから～。」

おめー遅いんだよ・・もつと早く・・

ピエール・・・お前がやられたら全滅だ・

なんとかしろ・・・お前やられたら、もうバリア張つけやつよ。

ん・・?

ピエールなんか笑つてる・・

「ふ・・」

「しんじゅえ～！」

「ふんー。」

おお、ピエール女の子の右パンチを、左手で余裕で止めた。

「まだまだ～」

うわ、女の子の後ろ回し蹴り

「グハ！」

ピール頭に受けちゃったよ・・

その後、女の子しゃがんで、水平蹴りで足狙つてるよ。

ピール危うし・・

「ホッ！」

ピール、小ジャンプして水平蹴り避けた！

お・

おおおーー

「ふんー。」

「ぐふ・・かは・」

ピール、女の子に右ボディ一発

更にボディー！

あ、これは・・右手を取つたぞ

その体勢から背中に担ぎむれば・・一本背負いー

「あやあああー。」

「ドスンー。」

決まつた！

勝負あり！一本！

女の子は背中から叩きつけられ、動けないようだ。

「ゲホッ、ゲホッ！」

「悔しい・・・」

女の子地面の砂掻んで、悔しそうに半泣きしているよ。

「所詮、女の力ではここまでようですね」

「さてと、すみませんが、あなたに選択をしてもらいます」

ピエール、少し中腰になつて、冷たい視線で女見下ろしてゐるよ。

氷のよつな目だ・・

「ゲホッ・・選択・・？」

「私達と黙つて一緒に旅をするか、それともここで死ぬかです。」

え・・・ピエール・・そんな2択は無いでしょ・・

お前は鬼畜か・・・？

しかし、俺もここまでボロボロにされたし

下手したら殺されてたかもな・・

それくらいの脅しあつてもいいかもな・・

「わ・・分かつたわよ・・付いていくわ・・

「よかつた・・あなたを殺さないで済んで」

ピエールは右手にナイフを隠し持っていた。

ピエール本気だったのね・・

怖いよ・・ピエール・・

「じゃ、貴方のお名前を聞いておきましようか?・

「私はアンリ・ソルティア」

「アンリだね。よひじく」

「起き上がるか?手を貸さう」

・・なんだ・・ピエール、その優しい態度。

アンリのお前を見る目が、さつきと違つた。

俺の女・・って、こんな凶暴な女、好みじゃないけどさ・

まあ、いつか・・旅のメンバーに女が入ったんだ。

凶暴でも美人だし、旅が少しほは楽しくなるはず！？

新しい街作りやうよ？

俺達を乗せる馬車は、「じじ」した音やサボテンが続く
舗装されていない道を、目的地を定めずに、ゆっくりした速度で
走る。ガタガタ揺れるその馬車の上は、一種異様な雰囲気が支配し
ている。

れっきの凶暴女はもちろん一緒に。

「あなたたち、どこへ行くつもり？」

アンリが俺達の後方から、行き先を尋ねてくる。

行き先なんてものは初めから持ち合わせていない・・・

無い物は言えないのだ。

俺は何を言おうか苦慮してゐる間にも、気まずい雰囲気が馬車を包
む。

ピエールがその雰囲気を嫌つたかは、不明だが、俺より先に口を開いた。

「さあね

おいおい、それだけですか、ピエールさん・・・

俺は呆れた顔で、飄々と馬車を走らすピエールの横顔を見つめる。

でも、それは至極当たり前と言えど、当たり前。

だつて、俺はこいつの主人であり、ピエールは俺に絶対服従の従者。

俺の要望を忠実に聞き入れ、その命令の通りにしか動かない。

・・・・たまに暴走はすることはあるが・・・

その主人である俺が行き先なんものは、頭の片隅にも置いてない。

答えは「さあね」 無難だよな・・

「ピエール、どこか街を探してくれ。」

取り合えず、俺は街に行きたい。

街にさえ行けば、何か楽しい出来事が、棚から牡丹餅のように降つて来るはずだ。

俺はそんな短絡的な思考でピエールに気楽に言つてみる。

「街ですか？」

「地図もないし、今走ってる場所も分かりかねます。」

「どうしまじょうか

わすがのピエールも今このこの状況では、肯定的な答えは返せない
だ。

俺はこの永延と続くつまらない光景に、嫌気がさしてきたので

新しい街を見つける打開策を、馬車に揺られながら練り始める。

・・・うへん、やっぱり携帯かな。携帯しかないよつな氣がする。

「ピエール、ちょっと馬車を止めてくれないか」

「トイレしたいんだ。」「

「できれば、俺の姿が馬車から隠れる、昔があるといひて止めてくれ

俺は携帯を使用するとこを、ピエールや女の子に見られないよう

う

俺の姿を覆い隠せる昔がある場所に止めるよつ、ピエールに指示した。

女だけじゃなく、ピエールにも見られたく理由は・・・

そう、俺はまだピエールを信用していない・・・

携帯で、しつかり俺に絶対服従の優しい従者とな打つた。

出てきたピエールの今までの行動を、観察した俺の感想を述べると

確かに命令に背く行為はないし、俺に対しては従順で優しい調子で

接してくれはするが、俺以外に大しては鬼畜とも言える犯罪行為を

平氣ではたらくピエール。

そして、俺より行動力と実行力があり、頭の回りも格段に速いピエール。

いくら従順に設定してるとは言え、どうしても俺の性格上警戒は解けない。

こいつが携帯の存在を知った時、どういう行動に出るかが未知数な点も

俺を不安にさせる。

俺はこう見えても慎重な男だ。

まだまだ、信用できない。

ピエールとの旅路はこれからも、石橋を叩いて渡ることになるであろう。

「いいでいいですか？拓様」

うん、確かに俺が隠れることが出来る筈があるな。

俺は地面に軽く飛び跳ねて着地すると、岩場にこもじを隠れる。

岩場の影から、馬車の方をちらりと見る俺。

ピールは馬車の後方に顔を向け、体を捩っている。

女としゃべってるな・？

よし、こつち見ていないな・・

俺はポケットから携帯を取り出すと、音を立てずに、そーっと開く。

さて、何にしよう・・

街に行きたいわけだが、街に行つたところで、普通の街では

さつきと変わらない旅がこれからも続くだろう。

そんな、つまらない世界を旅するため、ここに来たわけじゃない。

そうだなー・・

魔物が支配する街でどうだらつ。

でも、それだと優しい魔王の設定に矛盾は生じないだらうか？

その優しい魔王の手下である魔物が何で街を支配しているの・

いや、優しい魔王の手下だから、街を支配している理由はなんにあるんだよ。

さつとやうだ！

それに・・怖い魔物がいたとしても、街に入つてから、バリア張り続ければ

俺に危害を加える事はできないはずだ。

よし、決めた。ここから西に5kmの地点に街を作るぞ。

どんな街にしようかな？

そうだ、湖の真ん中に土砂を埋め、その上に建てられた水の都。

俺は泳げないから、橋が4つあることにしてみや。

一つだと、いざつて時、橋を一本封鎖されたら

ジ・・ハンドだからな・・

よしそうしよう。

携帯を打つぞ、ピエールは・・・

見ていないな・・

ここから西に5kmの地点にある湖の真ん中にある

陸地から4つの丈夫な石でできた橋でわたる事が出来る

魔物が支配する街。

OK!

これでボタンを押すぞ。

押したぞ！

街追加～！

さあ、馬車に乗つて出発だ。

街にきたよ~?

俺は西の水の都へ行くために、唐突にピエールに命令をした。

「ピエール!」

「はい」

「(ここ)から西に5kmの地点で馬車を走らせる

「は?」

「は?じゃねーよ

「行くんだよ」

「分かりました」

ピエールは俺の突然の要望に、訳がわからないといった表情を一瞬したが

従者としての義務を果たすため、無言で手綱を引き馬の方向を変えると

馬車を西に走らせた。

さすが、俺の従者、俺の一見、意味不明な命令にも、口答えせず

何も言わずに要望にこたえる。

まさに従者の鏡。

「ん・・?ビニに向かつてゐるの?」

「水の都さ」

「はあ?」

「そんなのあつたつけ・・」

「あるのセ」

突然の進路変更に、不審な表情を浮かべ、行き先を聞いてくるアンリ。

俺はそのアンリに、にやけながら行き場所を告げた。

水の都、語呂がいい。そしてその場所を知っている俺。
少しアンリに俺の博識ぶりを、見せ付けた気持ちになり
なんだか、いい気持ちだ。

「ああ、喉渴いた。」

「あんたたち、何か飲み物もつてない?」

「ねーよ。」

「うーん、喉渴いた・・

馬車の後部座席で太陽に晒される事無く、もたれかかる椅子があり
快適なくせに、要求はしつかりしていく女、アンリ

後部座席で後ろにふんぞり返り、少し股を開き氣味に座っている。

なんて下品な女だ・・

いや、女ってこんなもんなんだろうか？

俺は今更恥ずかしくないが、童貞であることには間違いない。

女という者に、多少偏見や憧憬や幻想が入ってるのは仕方ないん
だが・・

それにして、見るに耐えない姿。

馬車についてるバックミラーから丸見えなんだよ・・

だ。

女らしくして欲しいな・・俺は清楚なかんじの女の子が好きなん
アソリを好きになる必要は全くないけれど、その格好は目に毒だ・
しかし、アソリって両親とかいるはずだよな。

無理やり誘拐されたあげく、変な奴等（俺含む）と一緒に
いきなり旅に連れて行かれて、悲しくないのかな？

寂しさとか無いのかな・・

そうだ、一応そのこと聞いてみよ。

「なあアンリ」

「ん?何よ

「君つてさ・・今の状況どうゆう?」

分かっているよ、馬鹿な質問してんなよ・・

でも聞いてみたいんだ・・

「はんー、どうもなことよ」

「こきなり誘拐され、暴行されて、脅迫されて」

「無理やり旅に連れて行かれて」

「良い迷惑だよ」

確かに・・その通りでござります。

めり立つよな
普段腹立つよな

「アンリ、家に帰りたいか?」

「そり、帰りたよ

「でも、セヒの男が許さないだろ?」

「たぶんね、剣で殺そうとしたしね。」

いや人事みたいに俺つて・

なんか罪の意識が芽生え始めた。

「「」あんよ、今から家に帰そつか?」

「・・・・・」

「いいよ、別に、私退屈してたからや」

「旅行だと思えば、氣も晴れるよ」

「へ・・・・帰らないのか?」

「私の両親は父親はどつかの女と浮氣してゐるし」

「母は私に毎日愚痴ばっかり言つてて」

「最近つらやうしてたからや」

「私がいなくなつて、あたふたしてるだろ?」

「ざまあみりつてかんじ」

なんか複雑な家庭のようだ。」

まあ、本人が良いつて言つのなら、良いのかな・・

そんな会話を聞いているのか、聞いていないのか

能面のような顔で、無言で馬車を走らせるピエール。

何にも感じていなかな?

なあ、ピエール。

「お・・拓様! 言われたとおりに来ました!」

「確かに湖に浮かぶ街が見えてきましたよ

「当たり前さ、俺はその街知ってるんだから」

俺は得意げな笑みを浮かべ、ピエールにぶつかりながら答える。

「湖! ? 水ありそつね、早くいこー! 」

喉をからからにしたアンリが、湖の浮かぶ街といつフレーズを耳にすると

急にかつと目を見開き、上部座席に半身を乗り出していく。

「おお、本当だ・・す! 」^{アーリ}、水の都だー! 」

アンリちゃん・胸あたつてますよ・・

俺はさすがに恥ずかしさを隠しきれず、体が硬直する。

緊張しています・・やつぱり女の子。

免疫のない俺には、生の女の子は刺激が強すぎる・・

馬車が石橋を渡り始める。

石橋のその両脇には湖がみえ、青い透き通った綺麗な水を俺達の目に焼き付ける。

アンリはその水を見つめながら、生睡を飲んで喉を引くつと言わす。

どこからともなく、涼しい心地良い風が、炎天下を走ってきた馬車に

吹き付け、俺達に一瞬の天国を体験させる。

間もなくすると、街の門が見えてきた。

つり橋の両脇が、一つの鎖で街の入口の石壁から繋がっていて

それが今走っている岩の道へと、敷かれている。

そのつり橋を馬車はゆっくりした速度で渡ると、街の門にさしかかる。

その時・・

突然、門の中から豚の顔をした人間みたいな奴が、一人でてきて馬車の前で

持つてる槍を両者の真ん中で交差させる。

「む・・・」

「なんだなんだ?」

ピエールは片方の眉を吊り上げると、緊迫した表情で手綱をひき馬車を止める。

俺はピエールの肩に右手を置くと、その醜悪な面の豚人間に少し怯えながら

肩を震わせる。

怖いです・・・

実際に見るとやっぱり魔物つてインパクトありますよ・・

後部座席のアンリはその豚人間を見たとたん、驚いた表情で顔を引きつらせると

体を平坦にして、奴等から見えないように姿を隠す。

するいよ・・アンリ・・

俺も隠れたいってば・・

上部座席から今更後ろに引っ込むわけにもいかないし・・

助けてピエール・・

俺達の運命は君にかかっているよ。

「おい、そこの馬車の人間」

「降りて来い」

豚人間は少し険しい表情で「ごみながら馬車に近付いてくる。

ひ～～・・・

怖いよ・・・

怖いよ~？

「おい、どうした、降りて来い！」

ピエールはしばらく、豚人間達を見ながら、押し黙っていたが手綱を離すと、ゆっくり降りていく。
その間際に、俺に何かを囁いた。

「拓様・・ここは奴等に従いましょう」

「お、おう・・」

俺も仕方ないので、少し怯えながらも、猫背で馬車を静かに降りる。

そして、ピエールを盾にするよう、後ろに重なるようにして立つ。

「人間、この街になんの用だ？」

「用つてほどの事は・・」

「ただの通りすがりの旅人です」

ピエールは眉一つ動かさずに淡々と答える。

ピエール強気だな~・・頑張れ・・

「隊長！馬車の中に女が隠れてましたぜ」

「なに？」

「こりゃ、痛いってば、なにすんの！」

豚人間の一人が馬車の後部座席で背を低くして、隠れていたアンリを見つけると

スカートの背中の部分を、片手で引っ張り、ひょいと持ち上げると外に連れ出した。

なんて力だ・・・豚人間強そうだ・・

「こりゃ、豚！私にひどいことすると、そこの男が黙つてないよ！」

アンリはそう叫ぶと、俺達の方を指差す。

俺はそれを聞いて、一瞬、冷や汗を書くと、アンリの指先の外へ体を移動させる。

「コルア！アンリ・・突然挑発的な態度とるなよ・・

大人しくしとけよバカ・・

「なに？・こいつが黙つてないって？」

豚人形が俺のほうを睨む。

だ・・・だから違うって・・・俺の前の男だよ・・・

勘違いするな・・・

俺は首を横にぶるぶる振りながら、地面に屈むと泣きそつた顔でピエールを指差す。

「私のことですよ」

ピエールは静かに言い放つ。その言葉を聞いて、豚人間が一斉にピエールを見た。

「そうそう、そいつだよ

あんりがダメ押しする。

アンリ、ぐつじょぶ・

少しひるは考え込むように、俯き黙っていたが、また口を開いた。

「ですが・・私はあなたたちに抵抗するつもりは、ありません

豚人間たちはそれを聞くと、一匹で顔を見合せた。

「どうか、その方が利口だな」

「よし、お前達を連行する」

俺達は後ろ手を縄で縛られると、ピエール、俺、アンリの順に豚人形に前後を挟まれながら、街の門の中へ連れて行かれる。

「どー、連れて行くのよー！」

アンリが両眉を上に吊り上げながら、不機嫌そうに豚人形に物申す。

「この街を治めるラクシャーサ様の所だ」

豚人間はアンリにそう答えると、アンリの背中を一回押した。

「痛いわねー！豚！」

「この野郎・・口元に気をつけろよ」

「ふーんだ！」

「ち・・」

後方の豚人間はアンリを訝しげに見つめる。

アンリ・・大人しくしようよ・・

このシチュエーションを理解しようぜ・・ＫＹは嫌われるぜ・・

怒らせることは辞めて・・お願い・・

アンリが静かのように口元祈る俺。

そして、ピエールの顔を、後ろから縋るように覗きこむと少し険しい表情をしながらも、口元が少し笑っているように見える。

な・・なんなんだ・・その余裕は・・
なんかあるのか・・?期待していいのか?ピエール・・
俺はこれから何が起こるのかを考えると、心臓の鼓動が激しく高
鳴るのを感じていた。

助かりそう？

俺達は豚人間に連行され街の中心部へと、進んでいく。街の中は人間の姿はなく、魔物の姿も見えない。

石畳のタイルが敷かれた道沿いには、街の民の住む家だと思しき木造やレンガ、石材でできた建物が両側に何軒も建っている。その道を抜けると大きな広場が見えてきた。そこには高く聳え立つ、大きなクリスタルの塔が

日の光を浴びて、眩い煌きを放つていて。

湖の上に建てられたこの街は、ほぼ円状の土台に、真ん中の広場のクリスタルの塔を中心に、家が円を描くように幾重にも建ち並んでいて、その家々の間に中心部から放射線状にいくつかの道が延びている。

俺達は、どうやらあの大きなクリスタルの塔の中へ連れて行かれるようだ。

塔の前には衛兵らしい豚人間が遠目で見える。

どうなつてしまふんだろう・・・

俺達は前後を豚人間に挟まれ、逃げれそうにも無かった。

ピエール君・・どうするつもりだい・・

ピエールの後ろ頭を、不安に駆られながら眺めると、俺は最悪の状況を頭に思い浮かべていた。

あの塔には、きっと、豚人間なんか及びもつかない、凶悪な面をした巨大な化け物が

居るに違いない。

そして、良く分からぬ理由で、牢屋に押し込められて、処刑されるんだよ、きっと。

もしくは・・・

どこかの工場で、化け物のために、死ぬまで強制労働をせられるに決まっている。

支配されるという事は、そういうことなんだ。

ましてや、俺達は行きずりの旅人であり、人間だ

俺は根暗な妄想を、次から次へと頭の中に垂れ流していた。

「あの塔、綺麗～！」

アンリは無邪気な顔で、クリスタルの塔を後ろ手を縛られながらも興味深げに楽しそうに眺めていた。

アンリ・・お前はいいな・恐怖という物は貴方の心には存在しないんだね・・

俺はそんなアンリとは対照的に、足を震わせ恐怖していた。
そして最後の手段の事を頭に思い浮かべていた。

・・もう、こうなつたら、あの塔に入る前に、こいつら見捨てて飛び立とう・

そんな身勝手な行動を実行しようとしたその時・・

「おい！」

「ん・・?」

「ブシユ、ブサ、ドス、ズシャ！」

突然、数人の人間の男達が現れたかと思うと

俺達の前後に居る豚人間に、襲い掛かつた。

豚人間は剣で切りかかつてくる人間達に、槍で応戦するも
背後から剣で貫かれ、多勢に無勢で、血をざばざば流しながら

倒れていった。

「おせせ、だめだめ。」

アンリは、そんな殺戮シーンの中でも、倒れこんだ豚人間に暴言を吐いている。

アンリすげえ・・・いやこうシーン慣れてるのね・・

うげ・・気持ちわる・・とても、俺は凝視できねえ・

豚人間を倒した後、俺達にそいつ等は剣を持ったまま、近付いてくる。

俺は咄嗟に防衛反応を働かせて、体にバリアを纏う。

・・うわ・・やるさか・・しかし、俺にはバリアがあるぜ！

バリアを張つたとたん強気な俺。

「君達、後ろを向くなよ。」

・・後ろから、刺す気？

近付いてくる人間に、俺は手を振り上げ、バリアパンチを食らわそ

うとした刹那

ピエールが声を発した。

「拓様、彼等の言つとおりにしてください」

「え・・?」

ピエールのその冷静でトーンが低い割りに、何かの確信を含んだ
ような声に

疑心暗鬼ながらも、宥められると、バリアパンチを取りやめ
大人しくしてみることにした。

その人間達は、俺達の後ろ手の紐と手首の隙間に、ナイフを差し込
むと
紐を切り千切つていく。

「ああ、痛かつた」

「大丈夫か、お嬢ちゃん」

「酷い目にあつたな」

「うん、助けてくれてありがとな、おじさんたち」

「ははは、おじさんか～、確かにそつだな」

良く分からぬ人々と、瞬時に打ち解けあつアンリ。

俺は、たぶん敵ではないと思いつつも、微妙に警戒をして無口にな
つている。

ピエールは元々無口で、押し黙つていた。

「君達、俺達と着てこないか?」

カウボーイハットの、渋い顎鬚の男が俺達に言った。その言葉にピエールの右眉がピクッと上に持ち上がり静寂に溶け込むような静かな声で、言葉を発した。

「貴方達は何者ですか?」

「俺達は、この街のレジスタンスの者だ」

「詳しく述べ、ここでは話せない」

「衛兵がもうすぐ、こちらへやつてくるだろ?」

「来るのか、来ないのか、それだけ答えてくれればいい」

カウボーイの男は、強い口調で、俺達に語りかけるよつて言ひ放つた。

その間にも、塔の衛兵が気づいたのか、一ちらの方へ遠くから走つてくるのが見える。

「私は行くよ、付いていくよー!」

あまり物事を深く考えずに、即決断を口にするアンリ。

「行きますか、拓様・」

「ピエール行く?」

俺の問いかけのよつた言葉に、静かに頷くピエール。

「じゃ、俺も行こうかな・・・」

・・豚人間来てるし、ソレは素直につけていった方が良されうだ。
最後の俺の決断の言葉を、カウボーイ男が聞き取ると
俺達に呼びかけた。

「よし、じゃあ、俺達について来い」

「悪こなつてせん」

俺達は男達が小走りで、街の細い道へ入つていく後を
追いかけるよつて、行動を共にした。

勇気振り絞るよ？

俺達はレジスタンスと名乗る男達の後を、小走りで付いていく。
「ここまでいくつもりだらう・・・？」

「もう疲れたよ～私・・・」

アンリが息をきりながら、無言で走っていたが、だんだん口から弱音がこぼれ始めていた。

「もうダメ～」

「頑張るんだ・・・もつすぐだ・・・」

男達は疲れてきた俺達に、足が止まりそうになるのを防ぐかのように、励ましの言葉を点々と掛けてくる。

俺は息をハアハア言わせ、時々ふら付きながらも、後ろを振り向く。見ると、遠くから追つてきていた豚人間が、かなり俺達に追いついてきているのが分かる。

・・ゲゲ・・

俺はそれを見て、ガソリンの切れかけた体の、全パワーを振り絞るかのように猛ダッシュをすると、アンリを追い越し、ピールの横に並んだ。

「来てるよ～おっちゃん！～！」

声を振り絞り追つ手の存在を教える俺。

「む・・早いな・・」

「みんな、良く聞け！」

「こここの道をまっすぐ走ると、壁に突き当たる」

「その壁の下に、勇氣を振り絞つて、足から滑り込め

「ええ・・・」

「いいから、騙されたと思って、突っ込んでくれ」

そんな無茶な・・そんな事したら、足折れるじゃん・・

「わかった！」

アンリは強い口調でそう答えると、さつきまでの弱気な顔から、一
々しささえ漂わす

大人の女性の顔に変貌していった。
静かにピエールも頷く。

・・・一人とも格好いいよ・それに比べて俺は恐ろしいよ・・

「よしきだぞー！」

「足からつっこぬ～！」

・・・どうみても、レンガが積み上げれたその壁に足から突っ込んだら、足が折れる事、間違いなしなんですが・・

「イヤホオオ～！」

壁まで来ると、男達が威勢の良い声をあげ、次々と低姿勢でスライディングのように足から壁に突っ込んでいく。

すると、その姿が壁に吸い込まれるように、中へ入つていった。その様子を足を止め、啞然と見つめる俺達。しばらくすると、ピエールが額に汗を浮かべながらも、冷静な口調で俺達に語りかける。

「みんな、見ましたね？」

「同じように入るんです」

「分かったよ～！」

「わ・・分かった・」

俺達の返事を聞くと、先にピエールが意を決したように、勢い良く滑り込んでいくと壁の中へ消えていく。

それを見たアンリは、壁の前で足を止めると、足の先でみんなが消えていった辺りを突付いている。

足の先が、壁に吸い込まれたのを何度か確認すると、しゃがみ込み、四つん這いになつて

お尻を壁の方へ向けると、俺のほつを見上げ、言葉を発した。

「じゃあ先にいくね」

「バーイ！」

俺に無邪気な笑みを浮かべ手を振ると、そのままの格好で、恐る恐る体を後退させていく。

その間、俺は、焦る気持ちを全面に出しながら、後ろを何回もふりむき、その場で激しく足踏みをしていた。
やがて、大きな足音が迫ってくるのを聞き取ると、居ても立ってもいられなくなり

他に逃げ道がないか探し始めるが、見つける事が出来ない。

そうしているうちに、アンリが壁に吸い込まれ消えたのが目に入る
と、覚悟を決め

半ばやけくそ氣味に、壁に足から滑り込んだ。

・・・まよーー！

俺は壁の中に体全体が吸い込まれると、一瞬宙に浮かぶような感覚が
体を襲う。両手両足をばたつかせ、声ともならない声を発するが
気がつくと、どこかの建物の床で、仰向けで手足をバタつかせて
いた。

「うわ・うわ・・・

「あれ・・・

「びっくりしたか、坊主」

その声に我にかえると、俺は手足のばたつきを止め、床に後ろ手をつくりと体を支えるよ、うに半身を起こす。

その姿を、やつきの男達が笑いながら見下ろし、言った。

「無理もないよな」

辺りをきょろきょろして見渡すと、近くにピエールとアンリの姿が目に入る。
ピエールは、息を荒げながら、うつ伏せに這いつくばっていたが、徐々に体を起こすと、ゆっくり起き上がり、自分のズボンを、右手でパンパンとはたくと立ち上がった。
アンリは床で、少し息を切りながら額に汗を浮かべて、呆然とした顔で大の字になつて寝転んでいた。

話しげにやがりう?

俺は息を整えながらも立ち上がると、この部屋をひたすらじ始めた。

木の長方形の少し古びたテーブル、丸イス、壁に沿つて、剣立てでもいうのかな

剣を置いてける場所があつて、いくつもの剣が刺さっている。

(…「これ、爆弾かな・・? 鉄の丸いボールくらいのものが数個ある

(な)

大きな本棚には、大小様々な本が並んでいる。

(…広さは結構あるよな・・30畳くらいありそう・・)

(…試験管・・? これで何つくるんだろう・・)

ピエールとアンリは疲れているのか、テーブルのイスに座っている。アンリはテーブルにもたれかかって、顔を押し付けている。

「みんな、落ち着いたか・?」

額鬚の男が俺達を見回すと、一言発した。

「ええ、まあ・・なんとか・・」

適当に言葉を返す俺。

「じゃみんなテーブルについてくれ

「色々話そうと思つ

「君達も聞きたい」とは山ほどあるだね!」

俺はその言葉の通り、ピエールの横に座る。顎鬚以外の5人の男達も椅子に座つていく。

「ピエール、大丈夫かい？」

「はい、拓様こそお怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫だよ」

「それは良かつた」

「拓様、勇敢でしたよ」

「お、俺が？」

「はい、初めて会つたときより、随分逞しくなられました」

「ほ〜」

少し俺には意外だつた。

ピエールが俺の事に対して感想を述べるなんて・・

正直今まで、俺の事をどう思つてるのか、何考えているのかさっぱり分からぬ、能面男としか思つていなかつたが

ピエールなりに何かを思つてゐるらしい。

ある意味発見だ。人形じゃなく、血の通つた生き物だという事をこの時実感した。

「さてと、何から言えばよいのや？」

「とりあえず、自己紹介しようつかな」

「俺は」の街でレジスタンスを組織するエンギルだ

「他の5人は時計回りで順に、タバスコ、ハン、コーネル、ムール、キルだ」

男達は名前を呼ばれると、立ち上がり、俺達一人一人に各自自分の名前を言い、そして俺達も名前を名乗り、挨拶をして握手をすると、席に戻つていく。

「自己紹介は済んだな」

「さて、旅人諸君、俺達に色々質問があると思うつ

「何でも聞いてくれ」

俺はそれを聞くと、ずーっとここへ来てから聞きたくて、うずうずしていた
質問を投げかけた。

「あの～、さつき、この部屋に入ったときの、あの壁の」

「なんていつたら良いのかな・・見えない入口・?」

「あれは一体何なんでしょうか?」

エンギルはヒゲを右手で一度さすると、快活な笑みを浮かべて語りだした。

「良い質問だ、あれはな、魔法だよ」

「この街には、所々に、この部屋に通じる魔法の入口が張つてありますな」

「逃げる時や、近道に、その入口を使うんだよ」

「この入口は特殊な魔法を施していくて、人間だけが通れるようになっている」

「魔物は入る事はできない」

「なるほど・・・」

(…便利な入口だな・・・ワープゾーンみたいな物か・・・)

「す」「いへ、魔法つて本等にあつたんだ！」

疲れた顔をしていたアンリに一瞬生気が宿ると、突然驚いた様子で目を輝かせ言った。

「ああ、他にも色んな魔法があるぞ」

「炎を飛ばす魔法や、凍らせる魔法、空を飛ぶ魔法など色々な！」

「す」「いへ！私も使えるようになりたいな・・・」

「ハハハ、そのうち教えてあげるよ」

「やつたー！」

俺は大して魔法の存在に驚きはしなかつた。何せ俺が作った世界だからな。

ま、実際にここの田で見てみたいとは思つたけどな。

アンリはすこく興味ありそうだ・・

あのお転婆娘に魔法・・・恐ろしいよ・・

「他に何があるかな？」

テーブルで手を組み、その話を黙つて聞いていたピエールが口を開いた。

「ここの街は魔物が支配しているよう見えますが

「どうこう経緯で、ここの事態になつたんでしょうか？」

エンギルの顔がさつきまでの和やかな表情を、一変させて強張らせる。

「おっと、いきなり核心をついてきたな

「当たり前といえば当たり前の質問だ

「ここの話をすると長くなるが、重要な事なので心して聞いて欲しい」

エンギルは真剣な口調で話し始める。

聞いた感じを大まかに要約すると・・・

この街は元々、人間達が平和に暮していた町だった。そな。

しかしある時、魔物の軍団がこの街へと突如やつてきたかと思つて
その圧倒的な力で街の民を粛清すると、この街を支配下に置いてし
まつた。

街の民のほとんどは殺され、生き残った人々は、クリスタルタワー
にある

捕虜収容所に捕まつてゐるらしい。

エンギル達は魔物が襲つてきた時に、何とか逃げ切つた人々が
集まつて、いつか、街の民をクリスタルタワーから救い出し
魔物を街から追い出すために作つた、赤いサソリというレジスタン
スの組織の
メンバーだと言つていいだ。

俺はこの話を聞いて、ふと疑問が頭によぎつた。
その疑問をエンギルに投げかけてみる事にした。

「エンギルさん、話しさは大体分かりましたが」

「一つ気になる事があります」

「ん?なんだい、拓、何でも言つてくれ」

「実は、私の聞いたところによると、この世界を支配する魔王は

「優しい人格の持ち主だと聞いています」

「その優しい魔王の手下である魔物が・・・」

「なぜこのような酷い事を行つてゐるのでしょうか?」

「・・・・・」

一瞬俺の質問に沈黙をするエンギル。

「これまた、鋭い質問だな・・」

「その話をするなり、この世界の成り立ちから、話すしかないな」

エンギルは深く息をつき、一瞬目を閉じると、目を細く開け少し遠い目をして、話しを続け始めた。

必死に推敲中
・

話長いよ？

また、エンギルは長い長い話を語り始めた。
長すぎるので要約すると・・・

この世界に君臨する優しい魔王は、魔族と人間との共存共榮をスローガンに掲げ

魔物と人間が打ち解けあい、お互いの存在を認めて、平和な世界を築く事を理想としていた。

魔王は魔族だけが棲む国、シャンギリラに居を構え、人間が住む国々との

国交を絶やさず、常に平和的外交を行つてきた。

魔族に作れないアイテムや食べ物、特殊魔法の技術者、魔族の文化、そういう物を人間たちと分かち合い、逆に人間の国にしかない産物、技術、文化も自分達の国に積極的に取り入れ

そういう交易をする事によって、魔族にも人間にも利益をもたらす事に成功しているように見えた。

しかし、魔族人間の双方にそれを好まないものが多い。

優しい魔王の政策を快く思わない魔物たちは、シャンギリラから出て行き、あちこちで

人間を襲つたり、野で暴れたりし、その中には若干はあるが、魔王を打ち滅ぼそうと

画策しているものまでいるそうだ。

そして、魔族との国交を疎ましく思う人間達は、離反した魔族と組んで、魔王を倒したい者

、利害関係のからみで魔族と組み、同族の人間の国を襲い、そこにある宝物や、技術を

奪うもの。野に出て魔族を敵対とみなし孤高に戦う者、集団。

いろんな勢力が双方にいて、一見平和にうまくいっているこの世界

も、実は混沌としたものとなつてゐるやうだ。

・・・・まあ・・・現実の人間社会とほぼ変わらないと言えば変わらないかも・・

「話しが長くなつたが、そういう事だ」

「二の街はそういう魔王を裏切り離反した魔族達の一部の者が・・」

「理由は分からぬが、襲つてきて支配し、現状のようになつたわけだ」

「なるほど・・

「なんかすゞいな・・」

俺は少し驚いていた。

面白くするために、短絡的に優しい魔王が支配する世界と携帯に銘打つたが

これほど、壮大な世界に発展していよとは夢にも思わなかつた。ある意味エンギル達に、こんな世界を作つた事に対して責任すら感じていた。

(…『めんよ、エンギル、そして数々の人間達、魔物たちよ・・・

「ね、難しい話はおいといて、お腹すいたよ~」

アンリはさつきまで眠たそりに話を聞いていたが、空腹に堪えきれず

長い話が落ち着いたのを見計らって、自分の欲求をストレートに言い放つた。

(…確かに、俺も飲まず食わずにいると来たし)

「俺も喉乾いたし、腹もへつてます」

俺はアンリに、ただ乗りして同じ要求を言葉にした。

「ははは、そらもうだな」

「あれだけ走ったんだ」

「よし、調理係のミントにじり馳走を頼もうか

「ミントこるか?」

「はーい

年若い、アンリくらいの年かな?

俺から見たアンリは高校生くらいの年に見えるから
16つでところか、金髪を後ろで白いゴムのよつなもので束ね、緑
の丸いイヤリング、
少し暗めの赤と茶色の混じつたようなスカート、同じような色のシ
ヤツ
エメラルド色の眼に綺麗な顔立ち。とても可愛い子だ。

・・・なんで、俺がいちいち、説明するかつて言えぱ・・
・・・実は・・モロタイプなんだよ・・へへ・・

ミントは俺達に挨拶し、人数の確認を済ますと、優しい笑みを浮かべ、丁寧に会釈したかと思うと、また調理場へ戻つていった。

(…かわいいなあ・・)

「さて、飯ができるまで、少し時間がある」

「とりあえず、吾達に今こる場所の説明をしようか

エンギルがまた長くなりそうな話をするみたいだ。

「いじは、街の中のある民家の地下にあつてな」

「その民家の地下室の地面の一角に重い石の扉が隠されてこる」

「そこから入ることも出る事も出来るんだ」

「唯、さつきも行つた様に、魔法の入口が多数あるので」

「そこから入ることも、ほぼ無いと言つてこいだらひ」

「ただ、魔法の入口が多数あっても、出口が一つじゃ困るよな?」

「万が一、その扉から魔物たちが入ってきた場合」

「そこを抑えられたら俺達は終りだしな」

「だから、このレジスタンスのアジトにも・」

「もちろん、外の魔物の目に触れない安全な場所に通じる・」

「見えない出口が何個がある・・・」

「その場所を今から、アジトの説明も兼ねて教えようかと思つ」
そつHンギルが言つたかと思つと、突然、神妙な顔つきに変わり
俺達の方を少し厳しく見つけて見る。

「とにかく・・・その前に君達に質問だ」

「なんで俺達が、見ず知らずの君達を助け、親切に対応し

「あまつせえ、アジトの生命線である出入り口の事まで」

「教えようとするのか分かるか・・・？」

しばりく、Hンギル達は押し黙つて俺達を観察するよつた目で見つ
めている。

俺はその張り詰めた空氣を感じ取ると、ピールの顔に訴えかける
よつた視線を送る。

(…ピール、俺は分からん、この空氣をなんとかしてくれ…何
か言ってくれ…)

アンリはそのまま空氣すら、どうでも良いらしく欠伸をしている。

(…アンリ…お前はいいよな…Hンギルの顔見ろよ、なんか目が
血走ってるよ…)

ピールはエンギルに鋭い視線を投げつけると、静寂に溶け込むよ

うな透き通るような声で
言葉を並べはじめた。

「私の推測でしかありませんが・・・

「貴方達は私達を信頼のおける人間だと判断し、レジスタンスの仲間へ引き入れるのが目的なのでは？」

「しかしそれが成り立つには、私達を瞬時に信頼における人間だと判断する方法を持つていたか、或いは、私達の事をあらかじめ知っていたか、どちらかになりますが・・・」

「ふむ・・・

「ただ・・・どうやつて、私達を瞬時に信頼に足る人間か判断できなかは、私にも分かりません・・・」

「そして、私達を知ってるという事はありえません、貴方達とは今日この街で初めて出会ったはず」

「仮に、私達の事をずっとつけて、観察してたというのなら話しあ別ですが

私はいつも周りを注視して警戒していますので、そういう形跡は無かったと思います」

「しかし、どういう理由か知りませんが、私達は貴方達の信頼を得ているようです。それも、私達がレジスタンスに入るかどうかで、敵意へと変わるでしょうが・・・」

エンギル達はしばらくピエールをじーっと穴が開くほど見つめてい

たが、やがて

笑みを浮かべると、言葉を投げかけた。

「プラボ~~~~！」

「ピエール君、君はすごいな・・！」

「大した洞察力だ・・！」

エンギル達は嬉しそうにピエールに賛辞の拍手を送っている。俺はその様子をほっとして眺めている。

(…なんか良くなき分からぬが、良く言つてくれた、ピエール)

「君の推測は間違つてはいない」

「核心はついているよ

「その洞察力に敬意を表して、君の疑問に答えよう」

「なぜ、俺達が君達を信頼できたか?」

「瞬時に君達のことを知る事ができ、信頼のおける人間である事を判断する方法を持つていた?」

「いや、そんな魔法やアイテムを私達は持つてはいない

「君は可能性を否定したが、そう、私達は君達の事を、”知つていたんだよ”」

はじめに はじめに（前書き）

結構勘違いして見てる人いますね！題名狙って書いたわけじゃない
ですから！
残念！エロはないです！

はめられたやつたよ~？

「知つてた？」

俺はエンギルの不可思議な言葉に思わずそう言つた。

「そう知つていたんだ、君達が今日来ることを」

エンギルは本棚に近寄り、赤い何かの魔方陣のような形が扉絵として描かれた
分厚い本をテーブルの上に置き、椅子に座ると俺達に聞こえるよう
に読み始める。

「第三章、A1089日、その者達馬車に揺られこの街へきたれ
り」

「彼等は異形の者に支配されし水の都を救いし救世主・・・

「彼等の一人は貴族風の男、年若い女、異質の世界からやつて來
た男子・・・」

「今読んだのは300年前にこの街に住んでいた有名な預言者バ
ッフェルが書いた・」

「預言書の一説だ」

「A1089日とはまさしく今日を示していて、俺達はこの預言
を信じ、待ち受けていたら」

「君達が来たわけだ」

「俺達は疑う事なく、君達がその救世主だと判断し助け出した」
（…うーん、ちょっと前に出来たばかりの町の癖して、歴史がある
なんて
調子いいなあ・・さすが俺の作った世界、帳尻あわせは天下一品・・
・）

俺は冷めた目で真剣に語るエンギルを見ていた。

アンリは聞いてるのか聞いていないのか分からぬけど、理解はしてなさそうだ。

ピエールは眞面目な顔でそれに聞き入っている。

「ま、そういうことだから、君達に助けて欲しいんだ」

「なんといっても期待してた救世主が来たんだ」

「これで俺達の街も助かるはずだ」

「ハハハハハ！」

エンギルって気楽な奴だな・・・思いつきり救世主まかせですか。
しかし、お前は俺の恐ろしさを知らない、そして、俺がどれだけ気まぐれな奴かも
分かつちゃいない・・俺の性格は言ひなれば、天邪鬼。
期待されたら裏切りたくなるんだよ。何も分かつちゃいない・・・

「取り合えず、エンギル、見えない出口の場所教えてくれない？」

俺はまじめ臭い話を長々と喋るエングルの会話に空氣を読まず分け入ると、そつ言い放った。

「わあ、そだつたな、済まない、重要な事だからな」

エングルはそつ言ひと俺達を呼び寄せ、アジトの案内と見えない出口の場所を

俺達に教えながら歩く。

ここは、今居た部屋を中心として、円状の廊下へ繋がる細い通路が

わづきの部屋から出ていて、その円状の廊下にはわづきの家の出口に繋がる

廊下が一つある。円状の廊下の両側には幾つか個室が用意されていてそこでエングル達は寝起きしている。魔法の出口はとにかく、あちこちに設置されているようで、覚えるところひとつは、隙間無くある入口をハシゴするかんじ？

「まあ、こんなかんじだ、君達の部屋も用意してある」

俺達は円状の廊下を進んでいくと、少し大きな木の扉まで来るエンギルがその扉を開いた。

「ここは客人用の部屋だ、大きめに作られている、ベッドも4つあるから好きなの使つてくれ

「じゃねつべつしてくれ、旅の疲れもあるんだから」

「食事ができたら、また呼びにくるから」

エンギルはそう言つと、部屋から出て行く。

俺は部屋をコツコツ足音をならせながら、ひたすらじてこの先どうするか考えていた。

「なあ、ピエール

「はい？」

「逃げよつが！」

「え・・・」

俺の突然のその言葉に動搖を見せるピエール。

その言葉を聞いたアンリが激しく突っ込みを入れてくる。

「ちよつと、またご飯も食べてないのに、」

「それに私ここで魔法教えてもらいたいの」

「変な事言わないでよ！」

アンリは俺を少し睨みながら、両手を腰に当てて肩をくからせる。

「いや、しかし・なんかほら・・・ラボー男の態度見た?」

「何か気に入らなくねえか?」

「なんていうか、もう完全に俺達任せといつか・・」

「確実に勇者かにかと誤解してまつせ、アンリちゃん」

「そうかなあ・・・」

俺はかなり面倒くさくなつていて、投げやりに言葉を垂れ流す。アンリはやはり話を禄に聞いていないかんじで、取り合えず、料理と魔法にだけしか興味ないかんじだ。

俺の一連の言葉にピエールが何か言いたそうにしている。

(…何か意見あるんだろうけど、俺が主人だから遠慮しているんだな・・ここは一つ言葉を投げかけてみるか)

「ピエール君、言いたいことあれば言つていってよ」

「そうですか?」

俺は笑顔でピエールに向かつて一回頷く。

「それでは・・・」

ピエールが部屋に置かれている椅子に手をさし掛けるので、俺はその椅子に座つてみる。

そして、ピエールも顔が向かい合つ席に腰掛ける。俺はとりあえず仲間の一人である

アンリに手招きして隣の席に呼び寄せる。少し不機嫌そうにアンリも席につく。

「確かに、拓様の気持ちも分かります」

「今日会つたばかりの人間に、助けられ親切に色々教えてもらいましたが」

「私達にひとつこの街は、どうでもいいはずなのは確かです」

「アンリは魔法を覚えたいと言いますが、それなら他の街に行つても覚える事は可能です」

「ほんとに〜?」

アンリが魔法といつフレーズに敏感に反応する。

「そうです、彼等の話しだと、この世界にはあちこちに街があるのは確かなようですね」

「どこか平和な街で魔法を教えてもらえばいいでしょう」

「そういえばそうだね!」

ピエールのその言葉に納得すると、さつきまでの怒りが消えうせ笑顔が戻る。

(…アンリって単純だな…ある意味扱いやすいよ)

「よしじやあ、話しあは纏まつたな

「やつを教えてもらつた出口から出よいか」

「拓様…私も逃げたいとは思つのですが、そいつまく行くでしょ

うか?「

「彼等の預言書に書かれた言葉は非常に正確な物でした」

「つまりですね・・・」

ピエールは部屋のドアに近付き、開けようとしたら、鍵が掛かっていて開けられない。

「じうじう」となんですよ

「え・・・？」

俺はドアに駆け寄り、鍵をガチャガチャ音を立て、力いっぱい回すが、鍵が確かに掛かっていて開ける事ができない。

「ええ・・・じうじう」とだよ

ドアの外からエンギルの高らかな笑い声が聞こえてくる。

「ハハハハ！済まないな

「だが、君達の事は”知つている”と言つたはずだ」

「あの預言書は完璧でな

「君達の性格、行動パターン、今日何する今まで全て書かれてるんだよ！」

「俺達は君達を逃がすわけに、いかないんだ」

「な～に、この街を救つてくれたら、自由にしてやるから」

「心配しなくていいぞ」

(…糞～～、はめられた…悔しい…)

ペトール怒ったよ〜？

「糞〜、あのヒゲ親父め〜！！」

俺は右拳を堅く握り左手の平に何度も叩きつけながら、悔しさを体全面に顯し

部屋をぐるぐる回っていた。たまに、怒りの波が大きく押し寄せる扉にケンカキックを何度も叩き込む。そんな荒れた俺に、相変わらずのとぼけた調子で

アンリが言葉を飛ばす。

「いや、拓！もつ少し大人になりなよ

「ペトールを見習いなさい」

「あ・・・？」

そのアンリの言葉が微妙に俺の怒りの琴線に触ると少し遅れて怖い顔でアンリに視線を送ったが、いるはずの場所に既にその姿は無く

部屋の隅にある木でできた金な台に置かれた地球儀を、手で回転させて遊んでいた。

その無邪気に遊ぶ姿を目にしているうちに、なんだか気が抜けると、溜め込んでいた怒気が払われ俺に冷静さが戻ってくる。

(… そうだよな〜… いつまでも怒っていても、仕方が無いよな…
ここは一つ前向きに
色々考えようか…)

取り合えず俺はピエールが座る隣の椅子にゅつくり腰を落とすと、腕を組み目を閉じて

この後どうしようか思いを馳せる。

頭を左右に振りながら、この街を出て行く方法を全力で考えていたがどうしてもその方法が見出せずにいた。

様々な脱出方法を思い浮かべるもの、全てそれが水泡と帰す。なぜそうなるかと言えば、やはりエンギル達が持つあの預言書のせいだ。

俺達の性格や行動パターンが示されているあの忌まわしい分厚い本。それだけならまだしも、今日俺達がどう行動するかまで逐一書かれてるらしいじゃないか・・

これじゃ、どんな策をろうしても、全て奴等に筒抜けであつて、それを行動に移しても散々な結果は見えている。

考えれば考えるほど、俺の顔は苦悶に満ちたものへと変わり、苛立ちが体に積み上げられていく。そんな俺の様子を見てピエールが静かに口を開く。

「拓様・・お気持ちは分かりますが

「いくら考へても無駄な事です・・」

「私達の全ての行動を示したあの本があるかぎり」

「全て徒労に終わります」

さすがに・・ピエールも分かつてりつしやる・・・俺も分かつちやいるけど

人間つていうのはそう簡単に諦める事ができる動物じやないんだよ。しばらく俺は無駄な努力を続けていた・・が

突然ある事に気がつくと、思わずはつとして天井を見上げ、テープルに手を付き立ち上がると、田を見開き一言呴いた。

「俺は神だった・・・

突然の俺の奇妙な発言にピエールがこちらに視線を送る。

「どうされましたか・?」

「いや・・・」

そうだ・・俺はこの世界を自由に変えることが出来る携帯を持つ神なんだよ!・・気まぐれに文字をそこに打てば、それがこの世界に全て反映されるんだ。

気にいらないなら、怒りに任せて、『この街にいる俺、ピエール、アンリ以外のすべての生き物消滅』とでも打てば、ゴーストタウンの出来上がりだ。

俺はそう思い付くと、感情の赴くまま、スボンのポケットに押し込んでいる携帯に手を伸ばしてみたが、途中でその手を引き戻す。

(ちよつと待てよ・・それは前から分かつていた事じゃないか?
今までその禁手を出来るだけ封印して、旅してきたのは何のためだ・
?)

それを籠が外れかけた俺自身に問いかけると、強気に満ちた俺の表情が力なく崩れ落ち
落胆ではないにしろ、脱力感のような物と一緒に席に体をゆっくり落としこむ。

(そうだった・・俺はこの旅を楽しい物とするために、敢て携帯

を使う事を制限していたんだ・・・

もう俺は考える事を辞めていた。旅を楽しむため作ったこの街でこれから起くるであろう出来事を、成行きに任せ楽しむ事に決めたからだ。

(…携帯はもうちょっと封印しておこう…)

・・・・・

俺は気がつくと、退屈そうに欠伸をしながら、部屋を徘徊するアンリの姿を田で追っていた。アンリは後ろ手を組み、栗色の髪を靡かせながら、靴の先を空に高くあげてゆっくり部屋を練り歩く。時折、物珍しい置物に感心が向うと、気まぐれにそれを手にし

色々な向きに傾けながら穴が開くほどそれを見つめていた。

(アンリ、暇そうだな・・・)

しばらくすると、堅い靴の底で石の地面を蹴る鈍い音が、断続的に扉の向こうから聞こえてくる。その音は初めは静かのものであつたが、やがてその音の主が近付くに連れて大きなものへと変わり始める。その音が部屋の前で一度大きく波打つたかと思うと、消えうせ

次の瞬間、短い静寂を破り部屋の扉をノックする音へと変わった。

「みなさん、お食事の用意できました」

その声にアンリが感嘆の声を小さく上げ反応すると、立ち止まり体を扉のほうに向くと向け

溢れんばかりの笑みを浮かべて、両手を胸の辺りに組み合わせたま

ま耳を欹てる。

「で～・・・その」

俺はその間の抜けた弱弱しい声を聞いてるうちに、警戒して強張つていた体から力を抜き取つていいく。なぜなら、想像していた声と違う事にある意味落胆したからだ。

完全に俺の耳は、あのエンギルの憎たらしき渋い声を捉えていた。

「ええっと・・・・あ・・・やつだ・・・・」

「いれを渡さなきやな・・・・」

金属が擦れるような音が聞こえ、突然、扉の下部に長方形の手が通るくらいの空間が空いたかと思うと、部屋の内部に何かが投げ込まれる。良く見ると、扉の前に敷かれている燃えるような紅い絨毯の上に、丸い輪つかのようなものが、無造作にばら撒かれている。

「えーっと・・・・」

またその声の主が、じどろもどろした泥を這つのような口調で言葉を繋いでくる。

「あの～・・・・できれば・・・・」

「みなさん、それを首につけてください・・・・」

その言葉に俺達は不意を突かれ、沈黙を余儀なくされる。

しばらく扉の両側を静寂が覆うが、やがてピエールが扉の向こうに

顔を向け、男が聞き取れる必要最小限の声で言葉を投げかける。

「どうこう意味でしょつか・・・？」

そのピエールの横顔を上田遣いで見ると、思わず体全体に凍てつく
ような冷気が
奔る。普段落ち着きはらつた能面のよつたな顔を保つているピエールが
両眉を上に大きくつりあげ鼻に皺を寄せながら、怒りを表情に滲ませていたからだ。

その表情をアンリも目にしたのか、田を丸くして絶句している。

「いや・・・特に・・・」

「ただ・・・ヒンギルさんが・・・」

「それを着けないひまは部屋を出すなって申されて・・・」

それを聞くや否や更にピエールの表情が険しさを増し、体を小刻みに震わせ始める。

俺はその様子を見て悟る。ピエールの気高い自尊心とこつものこの男の言葉
が故意ではないにしろ、大きく傷つけてしまい、眠れる魔神を呼び起こしてしまった事に・・・

「私達を犬か猫と勘違いしてませんか・・・・?」

「いえ・・・私は・・・」

その迫力が扉の向こうの男に伝わったのだろうか、元々弱弱しい声が
さらに小さいものへと変わっていく。

(ひええ・・ピエール怖いよ・・・)

またかよ？

「分かりました・・・その首輪しなくていいです。」

男はピエールの迫力に折れたのか、力なくそう言った。

「私も・・・強制することは不本意であります・・・」

「すみませんでした・・・」

「鍵開けますよ」

鍵穴に鍵が差し込まれ、向こうから中へ向けて扉が開かれる。
その瞬間、ピエールがその男に襲い掛かる。
音をほとんど漏らさずに、男のみぞおちに一発右拳がめり込む。
その男は低い唸り声を上げたかと思うと、その場に倒れこんだ。

「ピエール何を・・・？」

突然のピエールの奇行に戸惑う俺。

アンリだって、体震わせてその場で固まっているよ・・・

「拓様、この場所を出ましょう

「え・・・？」

ピエールを見ると、やつべきまでの鬼のような表情は消えていて、いつもの沈着冷静な能面顔に戻っていた。

「無駄だらうへ。あの本のおかげで、どうにせなんないんでしょ」

「私もやつ思つていました…」

「しかし、いへりあの本に全てが書かれていやつと…」

「それに対策を施すのはエンギル達、そつただの人間なわけです」

「そして人間のする事に、完全といつものはないんです」

（…わっさのは怖い顔は居たのか…・びびつたよ…・）
俺はその言葉に妙に納得してしまい、ピエールの判断に任せることにした。

アンリは倒れた男を、少し複雑な表情を浮かべて見下ろしていたかと思うと

屈んでその男の体を起こし、壁にもたれた状態にして置く。
その普段見せない気遣いのようなものに、違和感を感じてアンリに言葉を投げかける。

「どうした、アンリ？」

「・・・・・」

「」の人良く見たら私の叔父さんだ・・・

「なに・・!？」

俺も、そしてピエールもその言葉を聞いて、一瞬体の全ての動きを止め、
唖然とした顔で、男の前に屈むアンリを見下ろす。

「行方不明になつてたの・・」

「なんでこんなとこにいるんだね?」

そう言葉を並べるアンリの眼から悲哀に満ちたものさえ感じ取れる。アンリ、どうしたんだ・・なんでそんな悲しそうな眼を・・。叔父さんだし当然かな・・・?それにしちゃ・・感情籠つてるけど・・。ピエールが辺りを警戒しながら見渡すと、アンリに向けて落ち着いた口調で話し始める。

「すまない、アンリ・氣絶させただけとは言え、貴方の叔父さんには」

「暴力を振るつた事は詫びます」

「しかし、冷たいようですが・・・私たちには時間がありません」

「あなたがここに残りたいのなら、無理に連れて行くことはしません」

「決めるのは貴方です」

「ここに残るか、私たちと着いて来るか、即決してください」

アンリは涙を流していたのか、目を袖で一、二度擦ると立ち上がりて一言発した。

「あは、何言つてんの、私があんたたちと別れるつて?」

「冗談じゃないわ、誘拐され連れてこられて

「「」んなとこで簡単に捨てられたんじゃ」

「私の腹の虫が納まらないわ、まだまだ一緒に遊んでもうつから
ね」

アンリは何か吹っ切れたような顔で笑うと、奇絶している叔父さんに視線を向けて言った。

「バイバイ…またいつか会おうね…」

俺達は廊下を出来るだけ音を立てずに歩くと、見えない出口の前で立ち止まった。

ピエールが蚊が鳴くような静かな声で俺達に語りかける。

「気をつけとくだわい、この出口の向こは、十中八九何か罠を張つてゐるでしょ」

「ヒンギル達が待ち構えているか、それとも・・ビコの牢屋に続いているか

「その答えは分からないです」

「もし後者なら、手のつちよつが有りませんが、悩んでいても仕方ありません」

「これは賭けです、隙あれば逃げ出す事も可能ですが、無ければまた捕まるだけの事」

「彼らは私たちを救世主と呼びます。逃げ出したからと言ひて、そんな私たちに危害を加える事は無いと思われます」

「留まる選択肢を好まない以上、低い確率ですが、逃げ切る事に全力を尽くすしかありません」

「行きましょう・私が先に入りますから、続いて来て下さい」

俺達は静かに頷くと、ピールが先に脚から飛び込んでいった。次にアンリを先に行かせる。また前の四つんばいの姿でお尻からゆっくり入っていく。

そして俺の番・・心臓の鼓動は早く脈打つ、その音と共に体も揺れているように感じる。

・・・行くぞ！！！

「せいやー！」

俺は空手家が正拳突きを繰り出す時の様な声を発して、右足から滑り込ませる。

次の瞬間…また前のふわっと浮いたような感覚が襲つたかと思つとその出口の向こう側に移動できたようだ・・見ると、ピールとアンリは既に立ち上がっていた。
しかし…ここはどこだ・・?

どこかの部屋のようだけど、今まで見てきたありふれた部屋と何かが違う。

透明な色をした床や壁が光を反射してか、眩しく輝いていた。

これって・・俺は部屋にある窓というにはおこがましいが、長方形の何も張られていない

空間から外を眺める。眼下には広場のようなものが、見えていた。
おい・・・」いつて・・・・！――！――！

「ふー・・やられましたね・・」

「完全にはめられました・・」

ピールが鼻の辺りを右手でつまむかのよつとして俯いていた。アンリはいつもと変わらずに、その塔の物珍しげに目を輝かし見入っていた。

「おいおい、こきなり魔物の塔かよ・・・」

エンギルやつてくれるぜ・・・・・

俺達に
やだよ
わかつたよ
しなくていいから
でておいで
おっしわかつた
おりや
ダウン
きてじうじよ
外出たけど
まず外に出ましょ
わたしあかんがえました
いくらあの本が力があつたとしても
その対策をするのはエングギル達
その対策に穴があれば
にげだせるはず
さてつでたゞ
さてつでたゞ
どいづする?
出口から出ましょ
たぶん出口にはエングギルの仲間がまちかまえてこるでしう
おいおい
そいつらじうじするんだ?
わたしたちでたおしてしまえぱいいですよ
そんなばかな
おれたちよわいよ

俺頑張るよ？

やれやれ、どうしてもエンギルは俺達に魔物を倒して欲しいようだ。

ハハハ、しかしあまだ甘いよヒゲ親父。

俺がそんなに素直に君達のために、魔物に体張つて挑むと思つているのかい。

「冗談じゃない、甘い甘い甘い甘い！……俺達をクリスタルの塔に送つたから

自然解決してくれるだらうなんて、そんな言い話はこの世の中にはないんだよ。

俺は床に座り込んで胡坐を書きと、頭を円を描くように捻りながら考え始める。俺の敵は悪魔でエンギル達。

もうここへ来て、魔物の事はどうでもよくなつてきている。エンギル達の鼻を明かす事だけが俺に課せられた命題だ。

そうだ、奴等を仲間にして、エンギルのとこに襲撃をかけさせよう。

「ピエール！」

「はい、拓様」

座り込んでいたピエールに声を掛けると、すぐに立ち上がつて俺の傍までやつて来る。

さすが従者だね。アンリはそれとは対照的に、暇そうに寝そべつたまま

床の上で遠心力を利用して転がつていて、
ガキみたい…まあいいよ。

「今から下にいる、魔物たちと交渉してくるよ

「え、それは無茶ですよ」

「相手は話しの通じるような相手じゃないですね」

俺も分かっているよ。

「大丈夫、俺に任せてくれないか?」

「何か策がおありなんですね」

「うん、だから少しお前達はここで待つてくれよ

「え? お一人でいくつもりですか?」

少し驚いた表情でピエールが問い合わせてきた。
そりや、驚くよな、俺一人とか、どれだけ勇敢なんだよって思うよ
な。だって俺だし、
俺は柄にもない言葉を続ける。

「うん、まあ大船に乗った気持ちでこの部屋で待つてくれよ

「分かりました、お待ちしています。ただ、無理はしないでくださいね」

「わかった」

ピエールは俺の自信に満ちた目と、主人の強い口調に押し切られる
ように

それ以上話すことを止め、納得した素振りを上辺だけ見せていた。心配するな、俺はお前達の前では携帯を使えないの、ここに残つてもらいうんだ。

そして封印していた携帯を、あのエンギルをギャフンと言わすためだけに使う事に決めたんだ。そんな会話にやつと好奇心が揺れたのか、アンリが俺に言葉を掛けてくる。

「拓、どうかいくの？」

「ああ、ちょっととな」

「ま、子供はじつでゆつべつしてくれよ」

俺は上か見下るすように、少し冷めた目をアンリに浴びせる。こんな馬鹿にしたような言葉と蔑んだ目線を向けたのだからアンリは当然怒つてくるものだと予想をしていた。
しかし、それは間違いだとすぐ気づいた。

立ち上がりつて、俺に静かに歩み寄つてくる。

そして、突然俺の右腕に両手でしがみ付いてきたかと思ひつと、額を擦りつけながら

上目遣いで俺を見るという、なんとも可愛らしい態度をとつてくるじゃないか。

突然のアンリの想定外の行動に俺は度肝を抜かれ、しばらく体を硬直させていた。

「ア、アンリちゃん、どうしたのかな・？」

「拓死ぬつもり？」

「え！？」

アンリは俺達のやりとりをしつかり聞いていたようだ。

何か誤解しているな。

さつきの冷めた目を違う意味に解釈したのか。

死に逝く目と受け取つたみたいだ。

しかし、アンリでも間近でしおらしい顔されると可愛いな、
元々土台は良いから、日の光がクリスタルに反射して彼女を照らすと
白い肌が益々輝きを増し、その姿を目にした俺の心臓を高鳴らせる。

「し、死ぬわけないだろ？」

「ほんとに？」

「あ、当たり前だよ」

俺は体を硬直させながら、声を引きつらせ言つた。
もう既にアンリを見ることができない。
それくらい緊張してしまつっていた。童貞の性だね、
俺は動搖して頭が真白になつていた。

「拓、行くつて決めたのならさつさと行けー！」

ドカ！

突然後ろから罵声を浴びせられると、尻を蹴り飛ばされ、前に体を
弾かれる。

思わずその衝撃に前方の壁に手を突いた。

「いきなり何すつだおめー！」

振り返ると、アンリはさっきまでのシリアルスな表情と打って変わって無邪気に笑い、俺に向って舌をだし、左目の下の筋肉を左人差し指で引っ張り

まあ、いわゆる、アツカンベーをしていた。
女つて良く分かんねーな、まいつか。

「じゃ行つてくる」

俺はいつもと違う精悍な表情を顔に漂わせ、背筋をピンと伸ばして右手を頭につけ、それを彼らに放つように挨拶を交わすと部屋の外へ颯爽と駆け抜けていった。

今、俺、格好よかつたよな？たぶん。

部屋を出ると、廊下が長く伸びていたが、同時に両脇にも壁が続いている。

魔物たちの姿は見えない、この場所はクリスタルの上層にあるため、奴等はここまで上がつてこないようだ。

壁の窪みを見つけると、迷い無くその中へ体を押し込み、ポケットから携帯を取り出した。

魔物たちを俺の仲間、要は手下にして、エンギル達のアジトに突っ込ませる。

一見無謀な上に不可能とさえ思えるこの案も、携帯さえあれば可能だ。

さて、どうしようか？俺は取り合えず何にも考えていなかつた。行き当たりばつたりが信条の俺には良くあることだ。

既に宿っている力、バリアアタックで奴等を叩きのめし、支配下に置こうかとも

思つたけど、それは時間が掛かる上に、下手をすればピール達に被害が及ぶ

可能性がある。だから、もっと安全に、且、確実に魔物たちを俺の

ペツトにする

方法を考えないと、そつだ、俺に見られた魔物は全て魅了されて戦意を失いペツトと化す、これでどうだろうか？でもこれだと、見るたびに

ペツトが増産されちまうな。後々面倒なことになってしまふかも、いらなくなつたらいつでも捨てれる、オンオフ可にしようか、しかも、俺の目が金色の眼に変わったときだけ使える能力。普段は黒眼だよ。良し纏めよう。

俺は眼の色を自由に金色に変える事ができる、その時に俺が見た魔物は全て忠実なペツトとなる。黒目に戻つても其の効果は続くが、いらなくなつたペツトに俺が蹴りを入れると野性に返る。そんな能力を手に入れた俺。

ちょっと腰こねだ、これで行こう。

携帯だ。ペペペペッ！

OK！

よし、もつ俺無敵モードだよ！

行くぜ！

やばいよ？

この大きなクリスタルの扉・・

俺が身長175だろ、その10倍くらい高さがあるよ。

この大きさからして、扉の向こうにはラクシャーサつて言うこの塔の主がいる事は間違いないはずだ。普段の俺なら、この扉を開けるなんて無謀な考えは絶対起こさない。

だけど、俺の後ろには、下りてくる際に金色の眼で仲間に引き入れた數十匹の豚人間が、

規則正しく2列で並んでいる。そいつらに顎で合図を送ると、俺は後ろに下がり

扉の前を覆うように並ばせた。

取り合えず、ラクシャーサはいらない。こいつは邪魔だ。

どうせ馬鹿でかい団体で、大きな椅子に踏ん反り返っているんだろうが

小回りの効かない奴は、邪魔なだけだ。

豚人間に一斉に飛び掛らせて、始末してしまおう。

俺は豚人間に合図を送ると大きな扉を開かせる事にした。
真ん中で割れた開閉式の扉。

扉の両側に5匹配置させ、同時に押すように意図を伝えた。

言葉は使わない、全部にいちいち指示する面倒くささがあるからだ。心で思つたことをテレパシーのようなもので彼らに通すかんじ？最初に俺が仲間にした豚人間が、階段を下りて欲しいと思つただけで、降りていったのを見て、其れができる事に気づいた。

合図や顎での指示は俺の演出だ。その方が格好いい気がしたからだ。豚人間が一斉に扉に力を与えると、ゆっくりだが、確実に扉が開き始める。

地面と擦れる大きく鈍い音が、途切れることなく俺の耳を暫く震わせていた。

扉が大きく開かれ、内部の様子が視界に飛び込んでくる。

思つたとおり、部屋の奥には玉座がある。

幾つかのクリスタルの太い柱が、扉から玉座までの見えない道を挟むかのように

両側にいくつか建ち並んでいた。

！？

どういうことだ・？玉座はあるけど、誰も座っていないし、中に豚人間の姿も無い。

それに玉座が小さすぎる。

俺の想像していた奴が座るのなら、もっと大きい物でないと、理屈が通らない。

その予想を覆す部屋の様子に、俺は警戒心を強め先に中へと数名豚人間を歩かせた。

そして、俺を囲むように豚人間を配置して、そいつ等の後をゆっくり付いていく。

なんだよ、いないじゃないか、緊張して損した。

俺は豚人間が接近しそぎて、臭いのと気持ち悪いのに嫌気がさして離れるように指示した。豚人間が俺からゆっくり放射線状に離れていった。

ふー、少しは周りの空気がよくなるぜ。

そう心で思ったのとほぼ同時に、俺は首に何か冷たいものが当たがられる感触を覚える。

気がつくと、視界を遮るような大きな鎌が眼の前でギラギラと鋭い光を放つていた。

「動くな……」

「少しでも、動けばお前の首は飛ぶ」

「いいか、私の質問に忠実に答えよ……」

大鎌の刃を首に向けられ、後ろを振り向く事ができない。
俺は恐怖というよりは、死を感じていた。

背後にある魔物？の異様な殺気が俺に全てを諦めさせる。

「お前は何者だ？」

「た、唯の旅人です」

「ここへ何しに来た？」

その質問に俺は言葉が詰まった。
なんて言えばいいんだ…

ここに居る魔物を仲間にして、エングル倒そうと思つたって言えば
いいのか？

「なるほど…」

え、俺まだ何にも言つてないんですが、
そう背後の者が言つたかと思うと、首から鎌が離れていった。

足を震わせながら、その場にゅっくり膝小僧から崩れ落ちる。

「拓君、こちへ来たまえ」

その言葉は部屋に反響しながら俺の耳に届く。
とても落ち着いた、しかし、どこか非情さを漂わす冷たい声。
なんで、俺の名前知ってるんだ？

そんな当たり前の疑問が浮かぶも、取り合えず行くしかない。
踏みどまれば、殺される。それだけは実感できた。
俺は立ち上がり、音源の方向へと足を進める。

そこは思つたとおり、玉座だった。

豚人間を動かすとかそういう気持ちすら湧き起こらない。ただ俺は声の主の前へと行く」としかできなかつた。

「はじめましてと言つておひつかな・・・」

「私はこのクリスタルの塔の主、ラクシャーサだ」

その姿を田の辺りにした俺に、より一層の冷たい何かが体を駆け巡る。

黒い擦り切れたフード付きローブの中に、骸骨の顔のようなものが覗いている。

大きな鎌と言い、俺がイメージする死神像とぴったりそのままの姿をしていた。

言葉が出てこない・・・実際死神を田にした時の戦慄は想像以上の物だ。

びくりとも動けない。

「君のこの塔でやるやつとしていた事は大体分かつた・・・」

「ポルク達は後で直してもいいぞ」

ポルク・・・ああ、豚人間の正式名称か。しかし、どうやって俺のやううとしていた事が分かつたんだ？

「腑に落ちないって顔だな」

「今お前は、何で俺のやうとした事が分かつたんだって思つてゐるだろ？」

その通りで、」とこたえます。・・・

「私はお前に触れた時、お前の心の中を読み取つただけだ」

なるほど・・・そういう力をお持ちなんですね。

「お前はこいつも思つてるはずだ」

「なぜすぐに殺さないのか?つてな」

いえ、それは思つていませんでした。てか、殺さないで・・・

「大丈夫、お前を殺しはしない、お前の仲間もだ」

ほ、本氣ですか?助かつた、嘘なら泣きますよ、

「俺の標的はエングイル・・・」

俺の仲間・・・ですか?

「厳密に言えば、エングイルの持つ『True Bible』だ」

ロープの中にある骸骨の田の奥に広がる闇の中に、一瞬赤い怪しい光が灯つたように見えた。
更にラクシャーサは言葉は繋ぐ。

「拓君、君と仲間を逃がしてあげよう」

「ただし、私の話を聞いてからだ」

どういう事が理解出来なかつた。

しかし、ラクシャー・サが俺に向けるものは敵意では無く、かといって友好的なものでも無い。

その不可思議な立場を理解すべく、俺は話を聞いてみることにした。

死神は語るよ？

「話をする前に一つ言つておきたい事がある」

「エングイルは君達に色々話したと思つが

「あいつの言つ事は信じない方がいい」

ラクシヤーサの表情から読み取れないが、どことなくそれがあまりの殺氣の様なものが

薄らいでいて、口調に柔らかさを感じ取れた。彼はその後、長い時間俺に語り続けた……。

魔法の書は元々優しい魔王の物だつたらしい。それをエングイルがどうやつたかは分からぬが、魔王城に潜入しまんまと盜み自分の物としたとか。

「あいつ等はとんでもない悪党だ……。」

「魔王の書は持ち主の知りたい情報を、触れている手から読み取ると

「その紙に示す魔力を帶びた書」

「それがどれだけ恐ろしい事が君にも分かるだろ?……」

「なんとなく分かるよ?」

「拓君、君はなぜここへ来たか分かるか?」

「わあ、来たくて来た訳じゃ」

「成行きかな？」

俺がそう答えると、ラクシャーサが低い声で笑い始めた。

「違うな……」

「君はエンギルのシナリオ通りに動いたにすぎない……」

「どうこの事?」

多少そういう所もあるけど、俺がラクシャーサに油断しなければ今頃あいつ等に復讐できただはず。
そう思つと、ラクシャーサの言葉に違和感を感じて思わず聞いてしまつた。

「やつから思考を読み取つて分かつたが

「君はポルクと私を操り、エンギル達に仕返しをするつもりだつたはずだ」

「もし私たちを仲間に引き入れて、奴等のアジトに行つたとして

「果たしてエンギルに一泡ふかす事ができただろ? つか……?」

そつ俺に話すとラクシャーサが急に立ち上がつた。
身を翻すと、そのロープの一部が俺の体をかすめる。

「つこてきなさ」……」

静かにそう言ひつと、ラクシャーサは床を滑るよひにして移動し始める。

最初その様子を眺めていたが、すぐに遅れて後を付いていった……。

俺が降りてきた塔の階段を上つていくラクシャーサ。

5階分くらい上つただろうか……。

その階で上ののを止めたかと思つと、細い迷路のよひな廊下を進んでいく。

なんかここ見覚えあるな……。

これは……。

クリスタルの床から盛り上がるよひにして形を成す歪な台。その台の上には七色に光る球体が浮いていた。

俺は降りてくる途中これを見ていた……。

何だらう? って思いはしたが、豚人間が次から次へと

襲つてくるので、すぐにそれを無視して通り過ぎたが……。

ラクシャーサはその球体の前にやつてくると、その動きをやつと止めた。

黒いロープから白い骨で組まれた右手が伸びてきたかと思つとその手の平を球体に翳す。

すると、左の方から重い引きずるよひな音が聞こえてくる……。

その音がする方へ視線を送ると、わざままで平坦な壁だと思つていた所に

縦長の長方形の入口の様なものが突如姿を現した。

俺が樂々入れそうな大きさだ……。

「ここは牢屋だ」

ラクシヤーサは静かにそう言つと、中へ入つていく。
俺は入口の手前で動きを止め、そーっと外から頭を覗き、
中の様子を確認する。

危険が無さそうなのでゆっくり中へ足を踏み入れた。
意外と広い。部屋の隅にはクリスタルのベッドがあり、その上に布
団まで敷かれていた。

布団の汚れ方や、無造作に折りたたまれた部分を見ると、確かに誰
かがここに寝泊り
していたようだ。

竜の顔をした彫像みたいなものが壁から突き出でいて、その口の部
分から絶え間なく水が
床の丸いへこんだ窪みへと流れ落ちていた。
中心部分には水をどこかへ流す穴も空いている。

「やはりいないな……」

ラクシヤーサは俺にその骸骨頭を向けると、顔を近づけてくる。

あまり、近づけないで…。怖いから…。

俺から50㌢くらいの位置でその顔を止める
更に言葉を続ける。

「我々は幸運にもエンギルの仲間を捕獲する事に成功した

「そして」の中に幽閉したはずなんだ…」

「しかし、今みるとこいつの姿は影も形も見えない……」

「どうやって逃げたのか?」

「ポルクを大田に警備に当たらせていたはずなのに……」

それってまさか……。

俺はラクシャーサの怖い顔に動搖した視線を向け話を更に聞き続けていた。

「そう、君が降りてくれる間にポルクたちを魅了」し

「下に引き連れていつたために、ここを警備するものがいなくな
り……」

「エングイルが仲間を救い出す事ができたんだ」

「つまり、君はエングイルを手助けしたわけだ……」

まさか、そんな……。奴はそこまで計算に入っていたって事が?
いや、そななる事を予め知つていた。魔王の書を使って分かつて
いたんだ……。
てことは……、俺はずーーーっとあいつ等の手に平のエテ公だつたつ
て事か?

「君は奴等に頭く丸めこまれ、奴等のシナリオどおりに動いたに
すぎない」

「あいつのこの街での目的はただ一つ、捕らえられていた仲間の
救出だった」

まさか…、あいつから聞いた話って全部嘘か…？

捉えられていたこの街の住民は？街から魔物を追い出す計画は？

俺は激しい衝撃が頭を貫き困惑していた。

いや、混乱していると言つてもいいだろつ。

ちよつと待てよ、ピエールとアンリは……？

一人の事を思い出し、何か言いようの無い不安がよぎる。

俺はラクシャーサをその場に置き去りにし走り出ると、額に冷たい汗をかきながら

一心不乱に階段を上っていく。

何か嫌な予感がする……。

必死だよ？

俺は階段を息せき切つて駆け上がりしていく。

上がってる時間が永久にも感じれるほど、俺の心の中は焦燥感で満たされていた……。

まだか……！まだか、まだか！

あれは……！？

階段上に鷹の形をしたオブジェがクリスタルの台の上に浮き上がっている。

見覚えがある形……。

ここだ……。

その階で上がるのを止め、俺は右の廊下を一直線に走りぬける……
次は左だ……右の壁を足で蹴り、鋭く曲がった。

長いクリスタルの廊下が眩い光を煌かせ暫く続いていたが、やがて、壁の先に明かりが指す場所を視界に捉える。

ここだ……！

早く二人の姿を視界に入れようと、滑るように左足を大きく前に突き出し、体を横向きにして入り口の前に立った。

「ピエール、アンリ！！」

「あ、拓帰つてきた」

「拓様！　お怪我はありませんか！？」

ピエール、アンリ……いた！ いたよ！ 良かつた！ 二人の元気な姿を目にしたとたん、寒氣のような喜びが体を走り抜ける。

それとほぼ同時に目から自然と涙があふれしてきた。

心の底から湧き立つような喜びと安堵する心、悲壮な気持ちの反動のようなものが、涙を止め処なく外へと押し出す。

曖昧な視界に映る一人のぼやけた姿を頼りに、3歩ほど歩くとその場で佇んだ。

涙で前が見えない……。

「ほら、ハンカチ！」

アンリの高い声が聞こえたかと思つと、右手に白い布があてがられる感触を覚える。

それを無造作に掴むと目に押し当てる。

「えぐ、うぐ、俺お前たちがもしかしたら、連れ去れたり、殺されたりしてないかって」

「心配で心配で……」

「だけど、大丈夫だった……」

「ほら、拓、泣かないの」

その優しい綺麗な声と共に、俺のお腹のあたりが包み込むように抱き込まれる。

とても、か細く、そして柔らかい腕の感触……。

「アンリ？」

涙が多少ふき取られ視界がはっきりしてくると、視線をお腹の辺りに落としてみる。

……アンリが目を瞑り俺の体に、小さな体を押し付けるようにしてハグしていた。

普段の俺なら、こんな状況だと慌てふためいて、体を強張らせて緊張するだろうけど……

今日はそれをする気が起きない……」そのままずっとじりじりしていたい、自然に任せてしまう。

……俺はその柔らかい体がだんだんとおしくなると、抱きしめたい衝動に駆られる。

「どうせ紛れて抱いちまうか……怒らないよね?」アンリ

両手を彼女の背中に回してみた。
すると、当然の「」とく……

「調子乗るなよ!」

腹に強烈な右ボディ炸裂……やはり無理だったか、「ごめんなさい

俺は体を丸の字に曲げ腰を落とした。

「拓様、本当にお体大丈夫ですか?」

「平気平気!」

アンリのボディ効いたけど、それ以外は平気や……。

俺の言葉を聞くと、ピエールは細い眼に優しさを滲ませ口元を綻

ばせる。

そう言えれば……

「ピートール、この部屋にエングイル達来なかつたか？」

「来ましたよ」

ピートールはあっけなく平然と答えた。

「何もされなかつたか？」

「いえ、特に」

「彼等は魔物を倒しに行へと言つて、部屋を出て行きました」

「あ、そう言えば……」

ピートールが何かを思い出したのか、顔を一瞬上に向けると、懷から白い紙のようなものを取り出した。

「これ、拓様に渡してくれと言わされました

「俺に？」

「何だらう……？恋文か？」

白い封筒の開け口に赤いハートを貫く弓を模つたシールが張られていた。

なんぢゅう、趣味の悪い……。

俺はシールを剥がし、手紙を開けて中のものを取り出す。折りたたまれた便箋が2枚入っていた。
なになに……？

『Dear God、もとい宅君へ』

なんだ、この出だしは……？

『君は今頃、仲間と再会し笑顔を浮かべているだらうね』

『急いで階段を駆け上がってきて、汗びっしょりだらう』

『しかし、君が心配するような事は起きないよ』

『ピートル君も、アソコちゃんにも手を出すわけないわ』

『生憎俺は、この世界の神を怒らせると鹿じやなこのでね……』

『まあ、お互い神のよつなもんだし、仲よくやひつやー』

『ラボー男よつ』

ぐふ……はははー！この野郎！

本等にふざけた奴だ！

でも、お前のした事は正しいよ。

もし……一人に何かあつたら、『Hンギル一味死す』とか『魔王の書消滅』つて怒りに任せて、携帯に打つてただろうから……。

まあ、魔王の書は危険だから消しておきたいけど、一応残しておくよ。

俺の物語を楽しくするためにな。

どうせ、俺がそう決めるのも、奴は魔王の書を見て知ってるんだ
うつけど……。

……それにしても、携帯の存在を知りながら、なぜ奪おうとしな
かつたんだろうな？

まあいいか……一人は無事なんだし。
あれ？もう一枚の方の紙に地図……？

『追伸、アンリちゃんに魔法を教えられなかつた事が残念だ』

『（）から南東20kmの場所に魔法都市セルギランダがあるから』

『そこへ連れて行つてあげたまえ』

魔法都市ね～、まあアンリ喜ぶわな。
しかし、悪党の癖に親切な野郎だな……これも罷つてこと無いだ
ううな？

まあ行くかどうかは、後で決めるか。

「ピエール、アンリ、下行こうーー」

「はい」

そうそつ、二人をラクシャーサに会わせておこう。

死神と再会したよ？

「ほり、じるだ」

俺はピールとアンリをラクシヤーサのいる部屋まで連れてきた。途中、アンリは階段のあまりの長さに不満不平たらたらで、先を走る俺に相変わらずの罵倒を浴びせてきていたが、「後で、魔法都市連れて行つてやるから」と告げると、急に機嫌を取り戻し静かについてしてくれた。

ああでも言わないと、ずっと文句垂れてるだらうか……
言つてしまつたから行かないといけないかな…… やれやれ。
ピールはとにかく無駄な事を一切喋らずに、ついてきてくれるんだけどね……

「ただいま戻りました～！」

ラクシヤーサに何も告げず放つたらかして部屋を出たのだから、たぶん怒つてるだらうな？って思いで部屋に入る。

なんといっても彼は魔物。

得体がしれない上に顔も怖い、姿も死神に瓜二つ。

丁寧な言葉と腰を屈めた低姿勢で、『機嫌伺いをしてみる。

「やあ、どうだった……？」

あれ？ 思わぬ反応。

彼の姿形からはとても想像できないような、透き通るような声。心なしか、最初に会つたときより口調が軽い気がした。

機嫌は…… 良さそう？

しかし、何がどうだった？って言つてゐるんだが……

「何のことです？」

「君の仲間の事だよ」

む、俺が何しに言つたか分かっているようだ。

ああ、俺に最初触った時に仲間の映像も見たんだろうな。で、俺が急いで上がつていったから……

「はい、無事であります」

「ほら、入つておいで」

ドアの向こうに取りあえず待つて貰つた、ピエールとアンリに声を掛ける。

一人は俺の声に反応して、ゆっくり中へ入ってきた。

ラクシャーサの姿を見た時の反応は、それぞれ違っていた。

ピエールはほんの少し息を吸いこんで、体を3度（傾斜）ほど後ろに傾けたくらいなのに対し、アンリはあからさまに怯えていた。相当怖かったんだろう、小さく悲鳴を上げると、ピエールの背中にじがみ付き震えていた。

「ははは、私の姿が相当怖いんだううね」

アンリの怯えた様子を目にして、とてもフレンドリーな感想を述べるラクシャーサ。

案外いい人？　いや、いい魔物？

「みんなこっちへおいで」

玉座に座つたまま、俺達に声をかけ呼び寄せる。ここは彼の言つとおりに行くしかない。

拒否したら怖いしね。

俺を先頭に彼の近くまで、歩み寄る。ピエールにしがみ付きながら、及び腰で歩くアンリ。

「拓君、君は仲間に事の次第を話したのかね？」

「いや、まだです」

そういうや、何にも話してないな。

「一応話しておいたほうが良くないか？」

確かに……

仕方ないので、ラクシャーサの前で長い長い話をピエールとアンリに話してみる。

要点をまとめて話すのって結構難しい。

「まあ、そういうことだ」

「俺達は嵌められたんだよ」

「なるほど」

拙い説明で一人に大体の事を話し終えた。

もちろん、携帯を使った事や、その存在、それによつて得た特技は隠してだけだ。

取りあえず、俺の巧みな話術で魔物を説得した事にした。

もちろん、豚人間には説得が通じない事を前提に、話の分かる魔

物ラクシャーサの所まで、豚人間に追われながら、勇敢、且、幸運にも辿りつく俺の武勇伝つきで……

「エンギル達の事は分かりましたが」

「それにしても拓様、素晴らしいです」

「感動しました」

「拓、すうじこね、見直したよ」

俺を褒め称える一人。

殆ど口から出任せだけど、悪い気はしないな。

俺の左腕に両手を絡ませて、その場で笑顔で撥ねるアンリ。だから胸が当たつて……大きいよな、アンリの胸。

「それほどでも無いよ……」

あんまり、浮かれて話してたもので、ラクシャーサの存在を忘れていた。

適当な事言つてるから、気分害していないかな?

そう思い軽口を止めると、彼の方へそーっと視線を向けた。

まあ、黒いローブの中の骸骨顔から分かる訳ないんだけど。

彼をいつまでも蚊帳の外に置いているのも悪いんで、いや怖いんで話を振つてみる事にした。

「といひで、ラクシャーサ様は何故この町を支配されたんですか?」

「

俺はエンギルの話を鵜呑みにして聞いてたから、頭の嘘話の修正

を図るため

彼にその質問を投げかけてみた。

本当にところを話してくれるに違いない。

「支配したという表現はどうかな」

「元々ここは魔物と人間達が共に暮らす街だった」

「しかし、引っ越す者が後を絶たないでね」

「ポルクがどうも民衆に嫌われていたらしい」

分かる気がする……顔は怖いし、臭いし、頭悪いし、あんなのに
うわうわされちゃうね。

「だから、いつの間にか人間達はこの街からいなくなり、残ったのはクリスタルの塔に住む私達だけになつたんだよ」

表情からは読み取れないが、声の調子から落胆が窺えた。

苦労してるんだね、あなたも……

あ、そうだ、もう一つ聞いてみるかな。

「あ、そうそう、エングルはどこいったんですかね？　まだアジトにいるとか？」

「それは無いだろう、アイツ等は今頃どこかで……」

うわ、声が低くなつた。

たぶん、機嫌害したよ、よっぽどエングル嫌いなんだな。
俺はここで話を止める事にした。

怖いから……彼の心の痛みに触れてはいけない、触らぬ神に祟りなしつて言つからね。

でも……本当はもう一つ、物凄く重要な事を聞いておきたい気もしたが……

「ラクシャーサ？ ちょっと聞いてもいい？」

無口を決め込もうとした矢先、アンリがラクシャーサに向つて軽口を叩き始めた。

どうやら、俺と淡々と会話を交わすラクシャーサを見ていて、思つたより良い魔物だと判断したんだろうけど……
いきなり呼び捨てかい……

俺は顔に手をあて、指の間から動向を見守る。

お願い、変な事言わないで……

「なんだい？ えーっと前は」

「アンリだよ」

「アンリちゃんか、何でも言つていじり」と

ラクシャーサは彼女に氣をへて声を掛けた。

「あなたはエングイルの仲間の事に詳しいですか？」

「あなたはエングイルの仲間か……」

「エングイルの仲間か……」

途端に言葉尻に暗雲が立ち込めるラクシャーサ。
余計な事を……。

「知ってるよ、奴等の事は調査すみだ」

「もちろん仲間の事も良く知っている」

ラクシャーサがそう言つと、アンリは少し俯いて間を開ける。
そしてまた彼に視線を戻すと、堰を切ったかのように口早に言葉
を奔らせた。

「私の叔父ムールの事を教えてください、お願いします」

「ムール!? 君の叔父さんなのか!?」

その口調からは驚きと動搖が明らかに感じ取れた。
アンリの叔父ってあの時の……

すいりこくまー？

「エングイルを頭に掲げる赤いサソリ」

「その構成メンバーは7人」

「エングイル、タバスコ、ハン、コーネル、ムール、キル、ミント」

「彼等は各自特殊な能力を持ち合わせている」

「その中でも、君の叔父ムールは、亜空間魔法を得意とする」

「それを聞いたアンリが、聞きなれない言葉についてラクシャーサに問いかける。

「亜空間魔法ってなんですか？」

「亜空間魔法とは、この世界を覆う空間を3次元の空間だとすると

「その3次元の空間に4次元もしくは、5次元の空間を重ねて作り出す事が出来る高等魔法」

「要は普通なら地面を掘ったり、地表に建物をたてたりして居住空間というものが生まれるわけだが、亜空間魔法を使えば、どんな場所にでも独立した亜空間を作り出し、その中に部屋を作ったり、そこで生活したりできるわけだ」

「エングイルがそんな便利な魔法を使う彼を、放つておくわけはない」

「彼を都合よく使つため、ロハ丁で仲間に引き入れた」

「ムールは元々流されやすい性格をしてるので、エンギルが仲間に引き入れるのは容易かつただろうな」

「はーなるほど」

俺もなんとなく凄い能力である事が分かつたので、空気が抜けたような声を発しながら、軽く頷いた。

アンリちゃん、さすがに今のは分かつたよな？

「なるほど！」

ほんとに分かつてんのか？」？

アンリは顔に明かりが灯つたように笑顔さえ浮かべていた。
さつきのマジ顔はどうへ言つたんだ？

「まあ、私がムールについて知つてる事はそれだけだ」

長い話を終えると、ラクシャーサは玉座で突発的病氣で生き絶え放置された、偉い人の白骨化死体みたいに動かなくなつた。

「分かりました～、ありがと、ラクシャーサ」

アンリはラクシャーサに体を向けて、スカートの両端を軽く持ち上げ会釈をした。

「ハハハ、面白い子だ」

「ラクシャーサは」機嫌はいいようだ。

さてと、大体話も聞き終わったし、どうよつかなー？
ピールさんに聞いてみよう。

「ピールの後ひづかぬ？」

「はー、特に何も浮びませんね」

いやそこを頭を捻らねえのが、従者の君の仕事じゃないのか
い。

俺がピールに多少がっかりした視線を浴びせて、軽くため息を
ついてると、アンリが何か思い出したみたいに俺に目を輝かせなが
ら近付いてくる。

やつぱり来たかーー！ どんとこーー！

「よし、拓、魔法都市いーー！」

「へい……」

君は本当に魔法が好きだね。

「私も亜空間魔法覚えるよー」

「なー？」

「うーつむりだ、叔父さんのパクリかい？
もつむりと独創的ないと見えよづ。」

「ほひこくよー」

「ちよ、待てつたら、服ひづかぬよ

「うわ、わ、ピエールも来い」

「はい、拓様」

「あ、ラクシャーサ様また~いつか~」

何か分からぬが、アンリが勢い良く俺の服を引っ張り、外へ駆け出そうとするもんだから、成行きでクリスタルの塔から、立ち去る事になった。

ピエールも俺の指示でちゃんと後からついてくる。

ラクシャーサにお礼も挨拶もきっちり出来ないまま、クリスタルの塔を滑るように降り、外へ躍り出て、水の都を一直線に出口に向つて三人で走り抜けていった。

「なあ、お前たち

俺は長い距離を止まらず走り続けたせいで、息がきれまくりで、その場で地面に四つんばいになつて、呼吸を整えていた。
多少楽になつてくると、ある事が頭に浮んで立ち上がり、二人にその事を聞いてみる。

「馬車ど~じやつたん?」

いや、出口まで来たのは良いけど、移動手段の馬車はどうなつたんだ?

「あ、そつ言えば、あの馬車ど~なつたんでしょうね」

「ラクシャーサの魔物に捕らえられたので、やつぱり彼の所にあるのでしょうか？」

何……？ この距離をまた引き返せといつのか～？

俺はもう歩けなかつた、いや歩きたくないといつのが正解か。その場で尻をついて、腕を組み座り込む。

そんなふてくされた顔をした俺をよそに、ピエールが懐から金色の笛を出したかと思うと

街の方向に向き直り、大きく息を吸つて、笛を咥えて思いつきり息を吐いた。

ガラスを鍵爪でひつかいたような嫌な音が俺達を中心に、周りへと波紋のように広がつていぐ。

ピエールの最大肺活量分の息が途切れたのか、笛の音も終わりに近付くにつれて、か細くなつて最後には消えた。

街の奥の方を細い眼を更に細くして眺めるピエール。

「着ました、どうやら無事のようです」

「へ？ 何が？ え、あれは……」

街の石畳みの地面を馬の蹄鉄が叩く音が、遠くの方から俺達の耳に届く。

しばらくすると、蹄鉄の音だけではなく、馬の嘶く声とぼろい木の馬車を引張る猛々しい一頭の白い馬の姿が視界に飛び込んできた。

「おー、リリー、ポン、無事だったのね、良かつた～」

アンリは手を挙げその場で撥ねながら、馬をこちうに迎え入れようとしていた。

しかし、センスねーな、リリーとポンつて……

馬は興奮しているのか、馬車を引っ張りながら、スピードを弱める事無く、にこちらへ突進してくれる。

ちよ、ちよっと、止まらないよ、どうすんの！

「任せてください、拓様」

「少し離れてください」

「10、9、8、7……」

ピエールは馬車の進路外へ俺とアンリに離れるように手を突き出した。

それに従い俺とアンリが、門の影に素早く隠れる。

突進してくる馬車に、微動だにせず真正面に立ち向かうピエール。良く分からぬが、馬車を見ながら、カウンタダウンをしていた。馬車はもう田の前だ。

「ピエール避けろ！」

思わずピエールに俺は叫んだ。

「0ー ハイヤー！」

変わった掛け声と共にピエールが半歩横に体をずらしたかと思うと、馬車が通り過ぎる直前で体を横にして馬車の側面に飛びついた。側面の布をしがみ付いて、馬車の窓から必死に中へ入り込もうとしている。

馬はそんな後方の様子を氣にも留めず荒野へと荒々しく駆け抜けていく。

「ああ、ピユール～！」

「うわー、やるー」

ピユールと共に荒野の彼方へ消えていこうとする馬車の後姿を、しばらく、はらはらしながら眺めていたが、やがて視界から完全に消えてしまう。

アンリはある状況のピユールに何か期待してゐるんだろうか。
さつきのやるーは何なの？

「ん？ あれは」

俺は呆然と馬車が消えた先を、しばらくその場で佇んで見ていたが、やがて消えた先から馬車がおつとつした速度で引き返してくるじゃないか。

「ほらね、帰つて来た」

アンリが分かつてたよと言わんばかりに、俺に得意げな目を向けて言つた。

「拓様～、さあ行きましょ～」

馬車の座席で馬の手綱を握つて、額に汗を滲ませながらクールな微笑みを浮かべるあの男が、俺達に手を振つている。

俺はその笑顔に吸い込まれるように、もう何も言わずに、彼の元へ自然と駆けていった。

あらがいくへ？（後書き）

ちよつと……雑かもしない。

「物語は終了だよ？」

俺は馬車に乗りながら、物思いに耽っていた。

一応ややこしい一件が落ち着いたものの、何か俺はこの世界を気に入りつつも、現実の世界の事が恋しくなり始めていた。

ホームシックともいうのだろうか？

相変わらず、後ろでマイペースに穏やかな顔で鼻歌を歌うアンリ。隣で能面顔で手綱を持つピエール。

彼等との旅は楽しい。

しかし、俺は現実の世界に帰りたくなっていた。

「ピエール、アンリ」

特に言ひことも無いが、二人の名前を読んでみる。

「どうされましたか？」

「いや……」

「うーん、ジーしょーかなー。」

一時的にでも現実世界に帰ろうつかな？

でも、俺が急にいなくなつたら、二人はどうなるんだろう？　どう思つだろ？

「ピエール、一つ聞いていいかい？」

「はい、何でしよう？」

「もし俺が急に煙のよけに消えたり、どうする?」

ピートルは俺に質問に前を向いたまま押し黙る。

「えーっと、そうですね……」

「どうするかは分からぬですが、困りますね」

「主人を無くした従者に価値があるんでしょうか?」

むう、ピートルは本当に従者の中の従者だな。
俺から解放された後の人生を考える事はしないんだろうか。
よし、次はアンリだ。

「アンリちゃん~」

「なに? 拓」

「もし俺が急にどこかへ消えたら、どう思いますか?」

「別に?」

即答かい! とぼけた顔で残酷な言葉を放つアンリ。

俺つてアンリにとつてそんなものなのかな? ……

その場で体を丸くし、頭を下げ落ち込んでみる。
そんな俺の様子を見て心が動いたのか

「でもさ、拓いなくなつたら寂しいよね」

お、ちょっとは人間らしい心があつたんだね

「てか、何で急にそんな事言つたの？」

「別に？」

さつきの仕返しだとばかり、アンリと同じ言葉を返した。

「ちよつと

アンリの声がさつきよつ俺に近い位置から聞こえてくる。

「どうしたの？」

気になり始めたかい？

よし、ここは焦らせよう。

わざと深刻な表情を浮かべ、黙つたまま俯いてみる。

「なんか言つてよ

「まあか……」

ん？

「私をこの辺に捨てて、一人でどうか行く気じゃないでしょ? うー」

どうしてさうなる?

「そんな事するわけないじゃないか」

棒読みで答えてみた。

「ちゅうとーー何たくらんでいるのー。」

「いって」

アンリが後ろから俺の髪を掴んで、上に引っ張りまくってきた。

「よせつてば、何にも企んでなんかいなってば」

「わう？ ならいこ」

俺の言葉を聞いて安心したのか、声の調子を穏やかに変え、後部座席に尻からどかっと座り込む。
アンリって単純だな……

わーつてつとピホールにまた振つてみるか。

「ピホール」

「はい？」

「君は俺が思つた以上の素晴らしい従者だよ」

「へ？ こきなりなんですか？」

別れの挨拶つてわけじやないけど、一人に一通り言いたい」とを
言った。

俺はこの後どうするか頭の中で固まりつつあった。

そういうの携帯には重要な機能がついていた。

俺が物語の途中で現実世界に帰りたくなった時に、物語の時間を止めセーブする機能。

よく家庭用ゲームのRPG、ロールプレイングゲームであるようなら、ある地点までの出来事を記憶させておく事ができ、気が向いたら、またセーブ地点から始めることが出来る、そんな素晴らしい機能。

そう、俺は今すぐそれを発動しようと、後部座席に移りアンリの横に体を移動させた。

そして、背中をアンリに向け、ピホールが後ろを向いていない事を確認すると……

着ている服の裏にあるポケットにしまっていった、伝家の宝刀『携帯』を素早くだし、それを体で隠すようにして胸の辺りで持つと、一時停止&saveと書かれたボタンを押した。

この世界の全ての時間が完全に止まる。

馬車も、ピホールも、アンリも、馬も、みんな全部動きを止め、俺の周りを静寂が包む。

俺はその止まつた世界で唯一動ける存在であり、神であった。

全く動かなくなつたピホールとアンリの姿を見ながら、色々な思い出が浮んでは消えていく。

「お前たち最高だよ

「また戻ってきたら、一緒に旅に出よう

「その時まで……」

「さよなら……」

俺は涙を浮かべながら、一時の別れを告げ、携帯の『Return』のボタンを押した。

体が光に包まれ、俺の体は浮かび上がり、馬車の天井をすり抜け、上空の丸い白い光へと吸い込まれていく。

「楽しかったよーまたいつか会おうー。」

大きな声で眼下に見える馬車に大声で叫んだ。

そして　俺は現実世界へと戻ってきた。

「母ちゃん、晩御飯何？」

おお、久しぶりに見る母上、会いたかったよ。

「ああ？ それしか言えんのか馬鹿たれ」

「イテ……」

時的にFINEです。

一回物語は終ったよ？（後書き）

一旦主人公は現実世界へ帰り、話は中断されました。
また、彼が気が向いた時、物語は紡がれる事になるはずです。その時までまた！

* * * 長い間「俺的ファンタジーに俺を送り込む話」読んで頂いてありがとうございました。

また、日を置いていつか続きを書こうと思います。

その時宜しければ覗いてやつてください。拓も喜びますので^ ^ *

* *

天空編　再び新たな妄想世界へ。（前書き）

え～妄想再開、それだけです。

天空編 再び新たな妄想世界へ。

やあ、拓です、お久し振り。

何かこう平凡な毎日もいいもので、TV見たり、飼い猫のクロと
じやれあつたり、漫画買いに行つたり、ゴロゴロしてました。
ピール達がいる世界はまだちゃんと残つてますし、いつか帰
るうとは思つてるんだけど、まだいいかなつて思つてて、でも、暇
持て余してるんで、そろそろ自分の作った世界で遊びたい気持ちも
湧いて来てて、今思案中なんだよ。

この間の世界はなんていうのか、西洋的な世界観だつたんだけど、
広すぎたね！

もうちょっと、狭い世界、例えば、映画の一いつまのような場所に
俺が潜入するつて言つのも悪くないかなつて思つてて、今考えて
います。

なんかないかな？…………。

あ、深く考えるのやめた。簡単に実験的に入つてみよう。

そうだな、まず、俺つて女いないよな。

女にもてまくりたい。そうだ、俺が複数の女にもてる話を作ろう。
で、舞台は？ うん、俺が世界観狭いから、悩む所だな。異世
界？ うん、でも魔法とか剣とか飽きたよな……、ん~変わった
のにしよう。

例えば、天空に浮ぶ島に街が一つあります。そこには複雑な悩
みを持つた人が集まっています。
俺はそいつらの悩みを聞き解決して金もらひ事を生業としていま
す。

まあ、なんていうの、必殺仕事人？ 違うな。まあ、便利屋だ。
何でも良い、そんな人。

そんな俺には女一人にもてています。助手もしてくれます。
よしよし、こんなかんじで。

後はなく、その島の雰囲気は現代っぽくしそうか。島国みたいにしようか。

現代なんだけど、ラフな世界観？ なんでもありだね。そういうたかんじ。

ま、そういうことで行つてみようか。はい、座布団の下に次元ホール空きます。

空いた！ おういええええい！ スポ！ ハイ来てしました。どこかの公園でしようか。芝生の上に座っています。青い空白い雲。

公園じゃないな、どこかの広場だな。周り木に覆われて何にもないや。

女は？ 女？

「どうした？」 拓坊

「あ、お前は誰？」

「寝ぼけてるのか？ ミルフィイだよ」

前だけ見てたけど、後ろに女が立っていました。

ミルフィイだつて。年は同じくらいだろうか？ つまり16。

ボーアッシュな頭つて言うのかな、短く纏まつた橙色の髪に少し太い眉、美人つていうよりは、可愛いに入るのかな。でもどこか愛嬌のある顔してるな。

濃いピンクの半ズボン？ 濶に白い線が入つてて、ズボンよりは薄いピンクの半そで。

いや～服とか知らないから、そんなんかんじ。赤い小さなリュックしあつてるよ。

まあ、とりあえず、この辺で外見説明終わりで、スキンシップはかろう。

俺の女って設定だしね。

「ミルフィイ、愛してるよ～」

いきなりガバッと、両手を広げて彼女に抱きつく。

「愛してるよ、あたしも！」

おお、素直にハグにハグを仕返してくれる。
すゞいよ～、なんかぞくぞくする。胸があたつてゐ～！

今すつごい抱き合っています。橙色の髪の頭の上に顎置いています。ちょっと俺より背が低いな。

しかし何か俺とてつもない事してるよな、俺の女設定で、従順だと大胆になってしまいます。あれ、何か後ろに人影……

「ミルフィイだけずるい……」

悦に浸つて鼻を伸ばしていると、後ろから低い女の子の声が。
俺はミルフィイに抱きつきながら、首だけ声のするほうへ捻つてみた。

すると、もう一人女の子が立っていたんだ。

薄青いスカートに肩から提げた淵にひらひらがついた白いエプロン？ 赤い淵のメガネかけてるよ、しかも美人で大人しそうだ。
清楚つていうんだろうか。メイドつて呼ばれるに近い格好？
右手に何かの本持つています。

「『』めんよ、サナ」

ミルフィイはハグする両手を下げるとき、俺の胸の部分に手を持つてきて、一時的に離れたいのか押してくる。

サナって子に気使ってるのかな？

よし、抱きつき対象変更へ花から花へへ

「サナ~~~~~！」

飛びつきハグへ、ミルフィーから手を離して、向き直り、サナに浮かれた顔で目一杯手を広げて抱きつこうとしたが

「ぐえ……」

強烈な本の角の一撃が、俺の顔面をヒットする。

思わず脳天くらりときて、後ろに崩れ落ちた。

だが、頭を打ちつける前にミルフィイが柔らかく背中を支えてくれたようだ。

「拓、もう少しあと優しく……優しくお願ひします。」

頬に本の角が当たったおかげで、鼻血ブーになつていなかつたので、取りあえず大騒ぎしなくて済んでいた。鼻血出でたら、さすがに大慌てしてたけどね……

そんな俺に何事も無かつたように、顔を赤らめ目を閉じたまま、サナは両手を開いた状態で静かに俺のハグを待つているかのようだ。ううん、乱暴なのは嫌だつてタイプだな。じゃあ、紳士的に。

「ごめんよ、サナ」

ちよつと真面目な顔を作り、彼女に体を寄り添わせ、両手を背中にそっと巻きつけて、彼女の背中の後ろで手を絡める。

えーっと、ちよつとまって。これなんの恋愛物語だよー！

彼女の頭の髪からとつてもいい匂いがしたんだ。

だから～、何の話だよ。

そう、俺はこんな事をしに来た訳じゃ……いやしききたのか？恍惚に浸ったサナの顔を見つめながら、そつと体を離していく。そのまま抱きついたまま、いちやいぢやしていくもいいんだけど、話が進まなさそうなので、いやいやいやを断腸の思いでやめる

と、

「さてと、俺達これからどうあるよ？」

後ろを振り向くと、ミルフィーが肩を下げたまま、じらりと目を細めた「コラみたいな顔でウッホウッホとか今にも言こやうな雰囲気で俺とサナを、睨んでいん？ 嫉妬つて奴か？

「拓～……前も言ったけどわ、一人と付き合ってるんだし、愛情表現は均等にしろよ。」

彼女は人差し指を向けて、腰を後ろに突き出し前屈みぎみに、ちよつと膨れた顔で俺に釘を刺した。

「まあまあ、氣をつけるよ」

はあ、もてたことのない俺が、こんな……いきなりもう未知な体験尽くしで、ドキドキっぱなしです。

#

俺達がそのままの先を、歩いていくと、少し傾斜のある横道に入つていく。

実はさつきいた場所はこの天空の島において、かなりの高所にあるわけで、今下りていく細い道からは、左にある丸太で出来た柵越しに、大きな街を見下ろせる。

この街が今回の物語のメインになるようだ。

街の真ん中に何か背の高い建物がある。ありや高層ビルかな？そのまわりに、街が「ちや」「ちや」あるかんじだね。案外現代風な家が軒を連ねているようだ。

そんな風景を俯瞰しながら、細い道で女の子に挟まれ、二人に両手をそれぞれ抱え込まれ、歩く俺つてば、幸せというか、これはもうハーレムだね！

「この前の世界とはえらい境遇の違いだ。」

しかし、そんな幸せが続くかと思われた矢先

下つていく細い道の先に大きな茶褐色の固まりが、こちらへ上がつてくるのが見えたんだ。

— — — — — $T_1 T_2 T_3 T_4 T_5$

「おい、あれ何なの？」

「また、きやがつた、熊五郎の奴！」

ミルフィーが頬に手をあて目を眇め、呆れた様なため息をついた。サナは俺の右手に左手を絡めたまま、その熊五郎を全く気にしない様子で、右手にもつ黒い本を読みながら歩いている。

「おい、何か凄い勢いで上がつてくるぞ。」

この状況で俺が、余裕こけるわけも無く、慌てて一人の腕をふりほどいて、逃げようとしたんだけど、がっしり掴まれて動けないんだよ。力あるよな一人。

いや、そんな事に感心してゐ場合、じやねーよー。

「逃げよ!せり…。」

「ふあー、あんで?」

ミルフィイはすっとぼけた顔を向けて、何か煎餅のよつなものをかじつたまま言つた。

「何でつて、こんな細い道で、あんな凶暴そつな熊が……ほらほらほらほら…。」

もうその距離10Mも無かつた。熊はテリトリーを侵された小熊連れの母親熊みたいに怒りを顕にして、低い唸り声をあげ、息を荒立たせながら、黒い剛毛に覆われた大きな体を、丈夫そうな太い4本足を使って前へ前へと、つまり俺達に向つて突進してきているんだ。

「間にあわねえ!」

熊が大口開けて両手を高く掲げながら、目の前3m付近に踏み込んだ時、俺は諦めたね。携帯はあるけど、そんなのしてる暇なかつたし、前の世界で使つていたバリアはリセットされて使えないしで、死を覚悟して胸元で手を合わせてたさ。

でもなんか、目を閉じてたんだけど、足に触れる地面の感触がふつと無くなり、体中を寒々とした何かが駆け抜けるような浮遊感が襲つてきて、その後また足が地についた気がしたんだ。

「拓、いつまで目閉じてるんだよ」

「拓……もつとじっかり……」

俺がその場にしゃがみこんで、両手を頭に当てて怯えていると、一人の声が上から聞こえてくる。

恐る恐る目を開けてそちらに目をやると、少し情けないものを見るような目で、上から一人に見下ろされてた。

しかも、今いる場所が、さつきいた場所より、更に細い道の先にいるようで、いつの間にか熊をやり過ごしていくらしく、一体どうなったんだってかんじだ。

取りあえず経緯を聞いてみようと、振るえは止まつていなかつたが、立ち上がつてみた。

「く、熊は……？」

震える声でミルフィイに熊五郎のその後を聞いてみた。

「ん？ ジャンプして飛び越えたらい、上方あがつて行つたよ

「ジャ、ジャンプつて」

「拓を真ん中にしたまま、三人で仲よくジャンプしたじゃん

ミルフィイが風で靡く橙色の髪を、右手で搔き分けながら、少し冷めた目で俺に面倒くさそうに語つた。

「拓……、どうしたの？ 昔は確かに凄い怖がつてたけど、最近慣れてきたつて言つてたでしょ、体調でも悪いの？」

サナが俺に心配そうな目を向けて、額に右手を当てる。体温なんてないよ！ 僕は強くは無いけど、簡単に熱を出すほどだ。

ひ弱でもないんだ。

ただ、怖かつたんだよ！　こゝきたばかりで、いきなり大きな熊に襲われて、普通びびるって！

うーん、何か微妙に俺はここでいた事になつていて、慣れた事になつてるらしく、時間軸がずれてるようだな。

まあ、多少ずれても、すぐに進歩するような男ではないのが俺だから、すぐ追いつけるだろ？　その辺は誤差の範囲つて事で、気にしないで置こう。

それにも、さつきのジャンプ？　といい、それに腕を抱える力といい、この子達強いんじゃ？　いやつらのもいいけど、怒らせないようしないと怖いかも？

天空編、全く分かんないよ？

細い道は白いコンクリートのようなもので舗装されていて、それが45度くらいの傾斜を伴つて、ずーっと下まで一直線に伸びていた。

たぶん前転したら、そのまま口ロ口ロと下まで転がつていいくだろう。

しかしもう、それも終わりのようだ、左に針葉樹のような木が鬱蒼と生え茂った森が見えてきて、前方にも大きな木々が連なる。どうやら、さつき居た場所は大きな岩山の天辺を平坦にして切り開いた場所で、その岩山は小さな森の中にぽつんとあるようだ。細い道は岩肌を削つて作つたんだろう。

下まで降りてくると細い道の先が左に湾曲して、少し広めの白い道に繋がっていた。

両側に針葉樹のような高い木々が寄り添い、その先に街のようなものが視界に入る。

「さて、」の後どうするの？

街に行くんだらうとは思う。だけど、その後が俺には見当がつかない。

設定はしたけど、それがどういう風に反映されてるのが未知数だ。本当に分からぬ。俺はこの世界でどこに住んでいて、どういうステータスなのか不明なんだ。彼女等から色々聞き出すしかないな。

「拓決まってるじゃん、事務所帰るんだよ」

「事務所？」

「拓、どうしたの？ 頭でも打ったんじゃ……？」

何かやり辛いな、この世界で色々してた事になっているんだよ。取りあえず、頭打つて記憶喪失になった事にしておこう。

「うん、どうも、記憶がないんだ、どこかで頭をぶつけたのかもしれない」

「「ええ～～」」

驚いたような声をほぼ同時に二人が上げると、両側から一人は顔を見合させて、口を〇の字に開けたまま、絶句している。

その反応に動搖した俺は、二人に交互に素早く視線を往復させた。……ピックリした……耳元で一人に大きな声上げないでくれよ……ミルフィーは人差し指を顎に当てるで瞳を上にずらして悩んでる様子、同じく右でサナも同じ様なポーズとつて俯いてる。

まあ、普通記憶喪失になつたとか急に言われたら困るよな？

「少し信じられないんですけど、拓の今までの言動それで納得いきました。本当に記憶がないようですね」

サナのメガネの奥の瞳に迷いが感じられない。

冷静に今までの俺の言動を分析して、俺が嘘を言つていない事を認めたようだ。

うん、この子は賢いな、瞬時の判断力、洞察力はピエールを思い出す。

「はあ～本当かよ？ でもサナが言つんなら本当だよな、は～～～」

俺に絡める手を離したミルフィーが後ろ手を組みながら、空を見

上げて虚ろな眼差しでため息をついた。

ミルフィーもサナの言つ事に信頼は置いてるようだ。

だけど、一気に一人の雰囲気が暗いものへと変わってしまった。

……途方にくれるよな、彼氏がいきなり記憶喪失とか……

一人とも俺から手を離していく、両隣に近接して歩いているけど、どちらも視線を下に向けて冴えない表情をしている。

その真ん中でどうしていいのか分からず、俺は次の展開を待つているんだけど……

「これは彼女等に任せることはない。俺には何もできん。

「まあ、悩んでも仕方ないし、一緒に行動しているうちに拓にも記憶が戻るはずです。取りあえず、事務所へ帰りましょう」

サナは顔を上げると、俺とミルフィーに穏やかな笑顔を向けて、前向きな意見を述べた。

ミルフィーはしゃーねーよなつと一言呟き小さく頷く。

うん、それしかないよな。期待していた通りの展開に持つて行ってくれて助かる。

いきなり、病院でも連れて行かれて、頭のレントゲン取られたり、同じ衝撃を加えれば　とか古の展開にもつてかれたりどうしようかと……良かつた。

#

俺達は真直ぐ白い道を歩むと、じぱりくして、街中に足を踏み込んでいた。

高所から見下ろした時は現代風の家、つまり、俺が現実の世界で身近に目にするような家が、この街に佇んでいるように見えたんだ

が……全然違うぞ？

四角い現代風の建物と思っていたものは、白い石でできた四角形のオブジェというか、窓も扉すら付いていない四角い箱とでも言つつか……

なんに使われるのか知らないけど、同じような高さのそれが、無数に街の中に等間隔に並んでいた。

しかも、街の真ん中に立つ黒っぽい高層ビルだと思つていたものも、まるで違う物体である事が分かつた。

とてもなく高い黒い石柱とでも言つべきか。

表面に四角い透明なタイルのような物が隙間なく貼られていて、これが陽光を受けて皓皓と煌いていたので高所からはビルの窓に見えたんだ。

「……」は一体何するところ？

俺は素直にそう思つた。

記憶喪失だと二人は納得してははずだが、それを聞いたとたん、少し息を吸い込んで小さな驚きを表情に浮かべる。

困惑気味の俺に近付いて、優しく丁寧に説明し始めたのはやはりサナだった。

「……」は、墓場ですよ……

「へ？」

俺は一瞬頭が真白になつた後、思考が宙に彷徨つた。

え、これ墓場？ 何で街の中に……？ それに仮に墓場だとして、黒い石柱はファラオとか偉い人の墓とか？

しばらく取りとめのない妄想が頭の中で渦巻く。

ミルフィーは白いオブジェに背中をつけながら、腕を組んで目を

瞑つていた。

まあ、俺の悪い頭で考えても答えは出るはずもなく、

「『めん、もしここ』が墓場だとすると、人間達はどうに？　いや、もう、何でも教えて！」

もう全て分からぬ事を前提に、彼女等、特にサナに全ての説明を求めることにした。

だつて分かんないものは、聞くしかないよな、一から100まで万遍なくな。

#

ミルフィーは俺の投げやりとも取れる訴えに、最初は困惑氣味だったが、すぐに考えを纏めて語り始めてくれた。

「えーっと、何から話そつかしら……取りあえず、この天空の島、ゲルスタシアの表面には人間の居住空間はないの

それを聞いた俺は辺りを見渡しながら、本当に人がいか確かめるが、人の姿を見つける事ができなかつた。まじで人っ子一人いません。

白い地面に白い箱、真ん中に黒い石柱はあるものの、殺伐としきだろ？

彼女達がいなかつたら、即座にリターンで現実世界に帰つていたかもしれないな。

更に質問を色々ぶつけよつ。

「ええ、じゃこの広い空間はなんなの？」

「うーん、憩いの広場ってどこかしあ？」

ふむ、要は公園とか山とか、そういうった空間かな？
じゃあ、一体人間達はどこに？ 街の住民は？
あ、そういうや、熊五郎はなんでいたんだろ。
それ聞いてみよう。

「そういや、ここ来る前に襲つてきた熊五郎は何でいたの？」

「動物は一杯いるわよ、後は実験的に作られたキメラとかもいる
しね」

聞きなれない言葉が耳にして即座にまた問いかける。

「キメラって何？」

その問いにサナは頬に左手を当てて、視線を上げて瞳を曇らせる。
え、何か悪い事言つたかな？

「ええと……」

「合成動物だよ」

サナが言葉に詰まると、壁に持たれて黙つて話しが聞いていた、
ミルフィーが口を開いた。

そう言い放つたミルフィーは、壁を尻でポンと弾くと、その反動
で直立して俺の近くまでつかつか歩いてくる。

そして、いきなり俺の左肩に手を伸ばし強く掴んだ。

「ま、その話はそのうち話すとして、記憶がないにしろ、拓があたし達の彼氏である事には違いないし、事務所へ行こう」

屈託ない笑顔で俺に淡々とミルフィーは語った。その瞳には一片の濁りも感じられない。

「この子　男っぽい口調でぶっきらぼうに話すけど、いい子だよな。

そんな事を考へてみると、ミルフィーがサナに田配せして、それに答える様にサナが首を縦に振った。

そして、サナは突然　黒い石柱に向つて走り出す。

俺はその後姿をぼーっと田で追つていると、

「ほら、行くよ、拓！」

「どうへ？」

「付いて来れば分かるー。」

ミルフィーがいきなり声をかけて来て、俺の右手を掴んで勢い良く引張つた。

俺は少し氣後れを覚えながらも、ミルフィーに強引に連れられ、サンの後を追つて黒い石柱に向つて走つていった。

天空編、降りていいくよ～？

「拓、今から居住空間に移動します」

それはいいけど、黒い石柱でつけえな～。幅も高さもどれだけあるんだ。

石柱にはやはり透明のタイルが張られている。

よく分からぬけど、何のためにこんなに張られてるんだろうか？
サンは首に掛けていた鎖状の銀色のネックレスを首から外そうとしていた。その端を掴んで首から頭へと持っていく間に、手繩り寄せられたネックレスの先にエメラルド色の宝石のようなものが、胸元から零れ落ちる。

「なにそれ？」

「宝石に興味はないんだけど、綺麗だったんで思わず聞いてしまつた。

「IDストーンよ」

はあ、IDね～いわゆる、個人証明みたいなものか、などと思っていると、サンが鎖を持ち上げ、黒い石柱にIDストーンを見せ付けるように突き出した。

すると、前方の黒い石柱の壁がふつと突然消えたかと思うと、真白い箱型の空間が姿を現した。エレベーターかな？

「居住空間への輸送ポートよ、入ってください」

まあ、言い方違つけど、合つてそうだな。サナを先頭に、俺、ミルフィーと中へ足を踏み入れる。全員入ると、向こうに移る景色が白く塗りつぶされるように消えた。四方上下を囲む白い壁には、ボタンらしきものがない。エレベーターなら何階かボタン押さないと行けないんじやないのか？

「ボタンは？」

「ボタン？ なんだそれ」

ミルフィーはボタンを知らないらしく、ちょっとした説明を彼女に施した。

「そりいや、そんなの昔あつたって、歴史の授業で聞いた気すんな」

はあ、なんかここ、俺たちの世界よりずっと科学が進んでるのかな？ ボタンは古代の遺物扱いか。

そんなやり取りしている間にも、この狭い空間はどこかへ進んでいるようで、独特の下腹がこそばゆくなるような感覚が襲ってくる。かなり早いスピードで、降下しているようだ

だけど、中での振動は大したことはなかつた。それにしても、真白で息が詰まるな……

「そろそろ、居住空間に差し掛かります、拓景色見たいですか？」

「見たい」

うん、見れるもんなら見たいよ、俺は閉所は苦手なんだ。景色でも眺めて気分を変えたい。

「じゃあ……」

サナは息を小さく吸うと、右足を後ろに反らして浮かせ、思いつ
きり白い壁を靴先で蹴りこんだ。

俺はそのサナの乱暴な行動に一時的に驚いたけど、それは取るに
足らなことだとすぐに悟る。

「うわ……なんだ」

サナが蹴り込んだ後、少し遅れて白い壁が突然焼き消えたかと思
うと、青い空間に俺たちは浮いていた。『じじじ』。やつを今まで白
い空間の中にいたはずだよね……？

青い空間かと思つていると、突然白い靄もやのよつなものに包まれる。
しかし短い間にまた青い空間へ。足元を見下ろしてみた。白い雲の
ようなものが凄い速度で迫つてくる。そしてあつとこつ間にその中
へ入つていく。

これつてもしかして 空を降下しているのかな？ いや、しか
し足場はしつかりしている。分かつてきたぞ、どこかへ移動した
わけじゃないんだ、白い壁が瞬時に限りなく透明になつただけで、
実際は同じ空間の中に立つているんだ。さつきのサナの蹴りは部屋
を囲む壁を透明化するためのものだつたんだ。たぶん、中から衝撃
を伝えると、そらなるんだろうな。

「どう？ 転送ポートから眺める景色は？」

「あーいね～、びっくりしたよ、でもこれってやっぱりやって動いてる
の？」

「Jのポートは重力操る装置が備わっていて、自動的に居住空間

のターミナルに向つむけ設定されているの

Hレベーターかと思っていたんだけど、自力で移動しているらしい。

小型ロケットみたいなものか？

#

「何か見えてきた」

「下に見えるのが居住空間、つまり私たちが今から向つ場所です」

「久し振りだなー」

薄い雲がかかっているせいで、白々としか見えないけど、建物群みたいなものがちらほら、山か平原か縁の一体も見える、青いものは海？ 川？ 茶色いものは岩場か、砂地かな。

あ、黒い物はなんだろう？ 僕は少し浮かれているかも知れない。上空から見る景色は雄大且、とても鮮明に目に映るから、楽しくて仕方が無かつた。

……それでも久し振りって、サナ達は少し居住空間を離れたのかな？ いや俺も含まれるのか。

「あの黒いのはターミナルです、上にあつたものと同じものです」

と、言つ事は黒い石柱か、あれは要するに、下の世界と上の世界を繋ぐ駅みたいなものなんだな。

「さてと……」

またサナが足を後ろに反らして、蹴る体勢に入っている。青っぽいスカートの中から伸びた白く細い脛^{ふくらはぎ}が顕になる。サナが勢いよく、青っぽい靴の先で透明の壁を蹴りこむと、また瞬時に白い壁が周りを取り囲んだ。

降りる前には普通に戻しておかないといけないのかな？ ビリでもいいか。

あ、外から聞こえる音が変わったような気がする。たぶん石柱の内部に入ったんだろう。とはいっても、それも気のせいくらいにしか分からぬ。白い壁は遮音素材で出来ているようだ。

#

ポートの小さな揺れが収まるごとに、サナが俺に振りむいて笑顔を向けた。

「拓着きました、この扉を開くと居住空間に出来ます」

「そつか、ヒューヒュなんていいう場所？」

「どこにでも名前はあるはずだよな？」

「空間全体を指すなら、第2階層モラクという場所です。そして今から出る場所は、このモラクで最も人口が多く、首都でもある力オスシティです」

「なるほど」

いや、よく分からぬので、はーそうですかみたいな意見しか言えないんだけど、この白い壁の向こうには、人が沢山いるらしい。あーなんかドキドキしてきた……ちょっと緊張してきて腹も痛くなってきた。

トイレ行きたいな。そうだ、トイレあるか聞いておこう。たまにはサナばかりじゃなく、ミルフィーに聞いてみよう。頭の後ろで手組んで、会話に混ざらずに虚ろな眼差しで壁にもたれたままなんだ。やっぱり俺の記憶喪失が堪えてるのかな？

「ミルフィー、トイレあるか？」

俺が声を掛けた途端、表情を改めて優しく快活な笑顔を向けてくる。

「トイレあるよー 中まで一緒についてあげるよー。」

いや……ついて来てくれるのは嬉しいけど、中まではいいよ……はあ、しかし、この設定無茶あるよな。何がって彼女が二人つてところがさ。しかも一緒に行動つて、最近よく見かける、冴えない男のハーレムパターンを模して作った設定だけど、俺には違和感ありますぐりで、なんだかしつくりこない。俺って一人の女の子に一途に愛を傾ける方なので、なんかな、大変だよ。一方だけ話し込むと、もう一方が疎外感を感じると思うんだよ。

「じゃ、拓、扉そろそろ開きますけど、油断はしないでくださいね」

「油断つて何があるの？」

「開けたら分かります……」

サナの声色が一段低くなつた。そして、俺の両隣にミルフィーと
サナが並んで、両腕もそれぞれの手でガツチリ組まれている。まる
で容疑者を護送する警察官のようだ……

な、何があるんだよ……本気で緊張してきた……横つ腹痛い——
——！

扉が開いた。真っ暗……？ 前方の黒い長方形の壁というか、闇といつべきか。

とにかく、光どころか音すら聞こえない。あれ、人は？ 居住空間は？

頭で描いていた扉の向こうの風景と、隔絶した前方の闇の世界に、俺は言葉を失った。

「サナ……」れは……」

「分かつてします、拓！ ちょっと後ろに下がってください」

「え？ うん……」

俺は一人の手から解き放たれると、後ろによろめきながら退く。二人の様子から今起こっている事、つまり前に広がる闇が尋常でない事が、俺にも何となく分かつていた。

後ろからその闇をじっと観察してただけど、気のせいか、何かが蠢いてるような気がした。何ががいる……俺はそう思うと、後ろの壁にめりこむくらい背中を押し付けていた。

怖い……まじで……。怯える俺の前で、ミルフィー達が顔を向き合わせ小声で喋っている。辛うじて俺にも聞こえるくらいの声で囁きあつていた。

「どうするー？」

「やっぱ……焼いてしまう？ それとも、平和的に話しかけてみる？」

「無理でしょ、聞くよつの奴じゃないし、だから焼いぢやお」

ミルフィイが最後に言い終えると、サナがそれに首を縦に振った。俺はその言葉の意味が良く分からぬ。取りあえず、後ろでドキドキしながら、見ていた。

肩に下げている小さなリュックから、ミルフィイーが何かを取り出した。

それって……銃？ 俺がそう心で思ったのとほぼ同時に、銃口と思われる先から、大きな炎の球が弾けたかと思うと、爆裂音とともに闇が焼き消される。そして、突然、視界に映つた現代的な風景の奥に見えるビルの一階部分が、数瞬後、爆発した。炎の迸りと黑白入り混じつた煙が辺りの視界を濁らせる。辺りから人間の悲鳴や、何かの羽音、動物の呻く声が聞こえてくる。

「じゃ出るよー！」

「そうね、行きましょー！」

慌しい喧騒の中で、後ろに居た俺の腕を、一人が各々の手でがつしり掴みあげる。俺の体は少し持ち上げられ、踵が浮いた状態だ。そして

「GO！」

ミルフィイーが耳元で叫ぶと、俺たちは 風になつていた。いや！ 風なんて生易しいものじゃない。もう、周りの風景が絵の具を塗りつぶしたみたいになつて、このとてつもない速さは 音速……？ もう目を開けていることも、意識を繋ぎとめている事もできなさそうだ……

光？眩しい。浩々と輝く光を訝しく思つ。俺はもつと寝ていたい……

だけど、何かが足元を擦る。^{くすぐ}ちょっと……しそばゆいつて。

誰だよ……俺はもつと寝ていたいんだよ……ああ、もう駄目だ。

ガバッ！

「……あれ？」

俺は気がつくと、どこかの部屋の大きなベッドの上にいた。青いカーテンの合間から漏れる光が眩しい。思わず目を細めて手を翳した。こじりだ……？

手で光を遮りながら、部屋の中を見渡した。一見、俺が住んでいた現実世界とそれほど変わらない内装が目に映る。木の開閉式扉みたいなもの、クローゼットかな？ 部屋の角には出入り口らしき扉。四角い金属のテーブルに、木製の腰掛椅子。田新しいものは特に見当たらない。

だけど、電灯が消えているせいか、部屋は薄暗い。カーテンをほぼ、閉め切つているせいもあるだろう。カーテンの合間から漏れる陽光だけが光源だ。

俺はさつきから、白い掛け布団の中に伸ばしている足先に触れる、何か柔らかい物に気づいていた。良く見たら、足の辺りの掛け布団の白い布が、こんもり大きく山を形成している。

「ちょっと……」

得体の知れない物が触れる恐怖から、思わず声が漏れる。

「どうした?」

突然どこからか聞こえる謎の声……部屋にはさつき見渡した限りじゃ誰もいないはず。

てことは……

足元の掛け布団の端が、突然大きく上に持ち上がる。俺は反射的に、両足を体に押し付けるように折りたたんだ。そして、背中をベッドの後方の出っ張りにビタつとくつ付けて、震いしながら、こんもりと持ち上がった布団の端に、怯えた視線を置いていた。

「だ、誰だ!？」

恐怖と喉の渴きで掠れた声で、そのこんもりに叫んだ。もう心臓高鳴りっぱなしだ。

「トーラの助だよ」

そのこんもりした影から声が漏れると、徐々に布団が下に擦れ落ち、その恐ろしい姿を俺の前に晒し始める。本当に怖いよ……ホラ一映画のようだ。

黄色い体毛に黒の横線が入った大きな背中? が目に映りこんだ。一見、虎の氣ぐるみでも着ている大男がベッドに座っているように見える。しかし、頭に視線を這わせると、耳が動いたんだ……ピクピクっとね。

体表も氣ぐるみの割りには、皮に透ける骨の影が生々しいし、それにこの匂い……とても獸くさい。

そして、氣ぐるみ男が体を捩つて、俺に体を向けたんだ。

薄つすら部屋の闇に浮ぶその顔を直視して、俺の時間が凍りついた……声が出ない……。

田の前にいるのは、まさしく虎、顔も虎！ 牙もある！ 虎虎虎！ 虎～～がなんで居るの～～？ パニッシュ寸前だつた……気がするみんなかじやない！ こいつは喋る虎だよ！ ちょっと～～、誰か助けて！

バタン！

「拓元氣～？」

突然扉が開け広げられ、ミルフィーの声が俺の耳に届く。すると、途端に部屋が明るくなる。

「ミルフィイ～～～～～！」

ミルフィーの顔を見るや、ベッドから跳ね起きて、彼女の胸に顔から飛びついていた。

「どうしたのよ、拓……！」

部屋に虎が～～～！ 心で叫ぶも、声が出てこない……しかし、指だけは虎をきっちり指し示していた。

「ああ、パパ、おはよー。」

「ミルフィイ～、眞っから見せ付けるねい、一応父親だぞ、わしゃ

「いめん、拓や、ちよつと訳ありで、たぶん、父さんの姿に怖がってゐ……」

ミルフィーの胸の谷間に顔を押し付けながら、二人の会話をからうじて拾っていた。

パパ……！？ なにそれ、なにがどうして…… 訳分からないよ

後頭部にミルフィーの吐息を感じた。その後、俺の怯えた肩をミルフィーは驚掴みにして、まるで置物を扱るように横に俺を移動させた。その場に力なく膝を折つて、俺は座り込む。

#

ミルフィーが虎男の耳に、手を翳してひそひそ何かを喋っている。その間、虎男がこちらを鋭い目で見つめていた。

そして

「なんてこつた！ 拓がね～ そら怖がるわな～」

囁き話が終ると、ミルフィーと虎男がこちらに向き直った。

虎男は大きくため息をついた。両耳がそれに呼応して前に倒れる。虎の顔をしているのに、表情が見てとれる。なんかがっかりしている様子だ。目を閉じて俯いていた。

な、何なんだよ……ため息つきたいのはこっちの方だ……
しばらく、部屋を重々しい沈黙が支配していた。

天空編、キメラ。

「やあ、拓、えーっと、はじめまして」

「ども」

「ま、この椅子座つてくれよ」

「はい」

虎親父いや、虎之助が俺にさくに声を掛けってきた。どうやら、ミルフィイと話を交わしたことで大体の事が分かつたらしい。つまり、俺が記憶喪失である事を理解したようだ。

だけど、相手は俺の事を理解したかもしれないけど、俺は全くこの虎之助のことも、この今いる建物の事も、この世界の事も、さつきの出来事もみーんな知らないわけだ。

さつき、サナも少し遅れてこの部屋へやつて來た。虎之助は顔は怖いけど、取りあえず俺を食べようとか、そんなつもりは無さそうなので、俺は落ち着きを取り戻し始めていた。椅子に腰掛ければ、色々話してくれるに違いない。まあ、色々聞こうじゃないか。

「拓、何か知りたい」とある?」

サナが不意に俺に聞いてきた。さすがにサナは分かつてらっしゃる。

「もうね、色々ありますから困るんだけど、えーっと、そうだな、こじで?」

「ここは、事務所兼、自宅、つまり、虎之助おじさん、ミルフィイ、私、あなたの住まいです」

「なるほど……」

円卓の周りに4人は座っている。三人と一匹といった方が良いのかかもしれない。

だつて、虎混じってるしな…… 住まいが、今、部屋の窓を覆っていた、カーテンは開け広げられ、外の景色が顕になつていた。俺は立ち上がり、窓辺によつて外の風景を食い入るように眺める。さつき降りてきた黒柱が高く聳え立つているのが、遠目に見える。その周りには現代的な建物が軒を連ねているのも分かる。あの辺りはこの降りてきた階層世界モラクでの中心都市カオスシティだとサンは言つていた。

事務所の近辺を眺めると、なだらかな斜面を丁度上りきつた、平坦な平原のような場所だと分かる。カオスシティから、サナ達が音速とも言える猛スピードで、ターミナルから俺を抱えて上がってきたのだ。ここは静かだ、まるで、現実世界のスイスかどつかの牧場ようにも見える。

右側に視線を移すと、屹然と聳え立つアルプスのような山もある。頂には白い靄がかかり、雪が山の中腹より上を白々と覆つている。カオスシティの向こうにも海みたいなものも見えるし、砂地のよくな場所もあるようだ。しかし とてもなく広いな？ ここが天空島の中だとすると、一体、天空島はどれくらい大きいんだろう…ま、色々疑問はあるけれど、想像するより聞くが易しだろう。

おつと、肝心の事務所なんだけど、窓から外見を見た感じじゃ、円柱の黒いビルといったかんじだ。平原とのミスマッチがなんとも不思議に思える。

「次いきます、虎之助さんはなぜ虎なんですか？」

「えーっとそれはね」

「いや、サナちゃん、俺が答えるよ、質問されたのは俺だからねい」とまでできるのか、悔れない奴だ。

さつきから、ミルフィイは黙つて俺の顔を見つめている。その視線はどこか虚ろで、目がかちあうと、俺の方が視線を逸らしたくなるくらいだ。どうしたんだろう……？

「俺は虎と人間のキメラだ。元は人間でナイスガイだったんだよ、まあ、今の姿も気に入っちゃいるけどな」

虎之助は横顔を俺に向けて、その姿の格好よさをアピールしていく。まあ、髪も長く生え揃っているし、牙も鋭いし、見慣れてきたら虎顔もいいもんだ……って違う！ 更に問い合わせよう、尋問の始まりだ！

「でも、虎之助さん、なぜキメラになつたの？ この世界はどう場所なの？」

虎之助は一辺に質問を浴びせられ、困ったような顔をしてくる。そして サナにその顔を向けて、

「『めん、サナちゃん、タツチー！』

サナの肩に手の平を置いた。サナは特に表情を変えること無く、首を縦に振ると、また平然と話しあう。虎之助へ、顔は猛々しいのに、折れるの早すぎだ！

「話すと長いんですが、拓ゆつくり聞いてくださいね」

「うん」

サナは目を瞑り深く息を吸うと、目を細く開けて、淡々と語り始めた。

「Jの天空島を管理するサガット博士は、キメラ工学の第一人者なんです。彼の作り出すキメラは失敗率が低いんです。つまり、豚と犬をキメラとして合成したとすると、ほぼ100%の確率で豚の特徴と犬の特徴を兼ね備えた、未知なる生物を生み出すことが出来ます。しかも、そのキメラは寿命が長く、元の犬や豚より、筋力、知能、その他様々な点において、オリジナルより優れているんです」

「ふむ、つまり？」

「健康体で意図した優れたキメラを生み出す合成率はほぼ100%、それまでのキメラ工学では合成によって、片方の動物が死んでしまったり、意図しない生物が出来上がったり、障害をもつてたりと、あまり実用的ではありませんでした。しかし、サガット博士は長年の研究の末、確実に合成を成功させ、しかも意図した生物を確実に作り出すことを可能にしたんです。最初は動物同士のキメラ、次に動物と魔獣と段階的に合成の種類を増やしていく、確実にそれを成功させていきました。そして最後には人間を使ったキメラにも着手しました。これには倫理の面で反対はありましたが、賛成派の後押しもあって、その研究は滞る事無く進められ、今では人間とその他他の生物とのキメラはほぼ確実に成功するまでになりました」

虎之助は話の途中に部屋を出て行つたが、また戻ってきた。どう

やら、長い話をするサナを気遣つて、飲み物をグラスに注いできたようだ。当然、俺たちにもその橙色の液体の入った飲み物が回されていく。俺は会釈をして受け取った。うーん、オレンジジュースみたいな味だな。サナは少し口に含むと、それを嚥下して、更に深い部分を話しあ始めた。

「地上では、希望した人間を使ってのキメラは、続々と生まれ落ち、その健康で独特の力を兼ね備えた完成度の高いキメラを目にした地上の民は、次々とキメラになる事を希望し始めました。政府もキメラになる事を奨励し、雑誌やメディアでも取り上げられ、一躍キメラは地上の世界で隆盛を極めました。しかし……キメラになる事を良く思わない、いえ、キメラの存在自体疎ましく思う人間も多数いました。そのうち、キメラとなつた元人間と普通の人間達の間で諍いや、トラブル、衝突が起こり始めたんです。これには地上にある連邦政府は頭を捻りました。そして博士も苦悩します。お互い、何かいい案は無いかと議論しあつた結果生まれたのが、この天空島、『ゲルスタシア』なんです」

サナはまた話を区切ると、飲み物を口に入れ。俺は馬鹿でもないでの、8割程はその話の内容を理解していた。けど、ちょっと長かつたので頭で整理するには時間がかかっていた。

しばらく、部屋を沈黙の時が流れていた。サナも俺の質問が無いと、これ以上は語れないらしく、俺の考え込む姿をじ~っと眼鏡の奥に光る青い瞳で見つめていた。

俺は大体整理し終えると、頭の中にある確信が浮んで、それをサナに伝える。

「だんだん分かつてきただぞ、つまり天空島はキメラの住む島だ、普通の人間達は地上に住み、キメラとなつた元人間達はこの天空島で住んでいるってことじゃな

いか?」

「拓賢い！ その通りです」

俺は少し胸を張つて、得意な顔を浮かべた。ふふふ、俺は馬鹿ではないんだ。とはいっても、ここまで言わなければ、これくらいの推測は立つわけだけど。

「そう、拓の言つとおり、連邦政府はキメラとなつた生物には、この天空島に移住する事を義務づけました。ここはキメラが住む地上の遙か上空に浮ぶ人工島です。島は三階層に別れていて、表面の部分、第一階層には人間を除いた生物、幽体、物質を合成したキメラの居住空間『サークル』が広がっています。第二階層、つまり今いる場所は、人間と動物、魔獣、物質の合成で生まれたキメラが住む居住空間『モラク』があり、第3階層には人間と幽体、人間とその他の者を合成して生まれたキメラが暮らす空間、『ヘル』があります」

「なるほど……」

説明を終えると、サナは一通り言い終えたのか、ほつとした顔で丸椅子に腰掛けた。

今まで立ちっぱなしで、長くややこしい事柄を俺に丁寧に話してくれていた。その疲れは半端じゃないだろう。それにしても、ここまで聞いて色々引っかかる事があるな。

ま、それは追々聞いていくか。大体分かっだし。

天空編、俺頑張るかも？

「まあ、なんとなくだけど、分かつたよ」

「そつかそつか」

虎親父は俺の肩を大きな虎の手で揺さぶり、ガツハツハと威勢良く笑った。

取りあえず爪立てないよう、痛いってば……

「じゃあ散歩いこう!」

俺がそつみんなに快活に言い放つ。すると、サナが少し顔を曇らせた。虎親父も急に大口を閉じて笑うのをやめる。何かまずいこと言つた?

「拓、それでさ、前からも頼んでたんだけどよ」

唐突に、虎親父が少し低い声だが、何か重々しい口調で俺を見て言つた。

「お前もキメラになつた方が、良いと思うんだ」

「ええ!？」

じょ、「冗談じゃない……親父ボケたか?」

俺は親父が無茶言つので、サナに頼りない視線を送つた。もちろんミルフィイにも。

そしたら、意外なことに、親父と同じような目で黙つて俺を見下ろしてくれる。

「ちよ、待つて！ それってお前たちみんなの一致した意見かよ？」

「拓、ここね、モラク、いえ、ゲルスタシア全体に言えることなんだけどね」

「サナが言っているやうに、ぱつぱつ語り始める。

「博士がこの地でキメラとなつた人々に『えた法律つてなんだか分かる？』

「ああ、そりゃいろいろあるんじゃないの？」

現実社会の法律を思い出す。色々あるに違いない。

「それが一つしか無いの……」

「一つ？ 少なすぎないか？ 一体……」

俺は息を呑んで、サナの瞳を食い入るよう見つめた。

「『』にある唯一の法律は『好きなように本能の赴くまま振舞え』よ

俺は我知らず言葉を失つた。

しかし、少ししたら色々な予想が頭にどんどん打ち立てられる。つまり、ここは法律が無いも同じ、無法地帯じゃないか？ そんな所にキメラとなつたパワフルな人間がつらつらしてゐつて事は、それはつまり、ま、毎日がサバイバル！？

「拓よ、その意味がどれだけ重く、そして恐ろしい事かお前にも分かるだろ?」

虎親父がもともと精悍な虎顔を更に険しくして話す。

その顔で迫らないでくれ……まだ俺は慣れていないんだよ……

「分かるような気もする。だからあんた達は俺にキメラとなつて、サバイバル生活圏で生き残れる強い体になつて欲しいってわけなんだよな? 足手間といは邪魔だつて事でしょ」

俺にしては鋭く、少し棘のある言葉を三人に投げつけた。だが、ここで更に滔滔と話を切り込んでいくのが俺なんだ。

「でもさ、無法地帯とか、移住する前にちゃんと話し聞いてたの? これもし、話とおつてないなら、詐欺だよ。誰も法律も無いような所へ移住したいなんて思うわけないでしょ。これじゃそのまんまキメラとなつた人々の隔離施設じゃないか? しかもある意味モルモットじゃないかい? ここに来た奴馬鹿みたいじゃないか」

親父とサナがそう言われて、体を少し跳ねて口を噤んだ。痛いところをクリティカルヒットしてしまったらしい。俺は一人が黙るのを見て、自分が言った言葉が嘘でない事を確信した。

そして、同時にものすごく、家に帰りたくなつた。そんな危険な世界観だとは思つていなかつたからだ。

「拓！ キメラになる必要なんてないよ。私は元々その案には反対だつたんだ。どうやつたか知らないけど、拓は人間のままこのゲルスタシアに紛れ込んでいた。他のキメラに襲われそうになつたのを私たちが助けに入つたとき、あんたこう言つたよね」

そんな隠れたエピソードがあつたなんて知らないし。

そうか、俺はこの世界にいたことになつてゐるんだよな。なんて言つたんだろう？

少しの沈黙の後、ミルフィーが優しい瞳を俺に向けて、

「『俺は神だから、全然余裕だよ、助けなんていらない！』ってね」

と、言つた。

うは、俺がそんなこと言つたの！？ それ俺じゃないだろ！ 他力本願大好き人間なのに。

何か違う人みたい。ここに居た俺はまるで別人のようだ。

予想外の『俺』の過去の発言に、動搖し、なぜだか、尊敬の念を抱いてしまう。

「その後さ、結局あんた、殺されそうになつて、危機一髪で助けたんだけどさ、なんか私そんなあんたに惚れちゃつたんだよ。私だけじゃない、サナもね。ただの人間の癖に、そんな強気な発言できる拓に、なんか逞しさというか、強さを感じて、格好良いな〜ってミルフィーが少しうつとりするような目をここでないどこかに向けていた。

たぶん、過去の俺にそれは送られているんだね。だが、ちょっと待つて欲しい！

「ミルフィー話は分かつたけど、過去の俺は別人だよ、少なくとも性

格が違うすぎる。俺はそんな潔い発言はできないし、自信もない。
だから俺……」

俺は素直な心持ちをミルフィーだけではなく、差し向かう三人に告げた。

大きな事はこの場では言えない。率直な事実を述べて置かないと、後々苦労しそうなんで。

「分かつてます。あなたをここに連れてくるまで観察していました。記憶喪失のあなたは

まるで別人のようでした。言葉は悪いですが、少しおどおどして、前ほどの芯の強さのようなものが見受けられませんでした。でも、だからと書いて、拓が拓である事に違いないんです。私は今の拓を守つていいくつもりだし、そして、愛していくます……」

サン……うー、女の子に守られるなんて公言されちゃった。それでいて、そんな情けない俺を愛すとも言っている。何かこれは男として、良いのだろうか……？

俺が良く分からぬ罪悪感に苛まれていると、

「私も同じ意見！ 拓の命は絶対守りきるし、ずっと愛していくよ！ それに拓だつてここにいたら、直ぐに以前のよつに変わつていくだろ（う）」

ええ！？ 変わつていくかな？ 俺が？

うーん、それは無い と言いたいところだが、話を聞いたあと の俺は、何かが変わりつつあった。消えかけた焚き火に枯れ枝がくべられる様に、俺の気持ちは微かに高揚しはじめていたんだ。

天空編、まだ序の口だよ？

「まあ、でも、さつきは大まかに話したけど、無法地帯つてほどで
も無いんですよ」

「どうこう」と？』

「考えてみてください、博士に好きに振舞えって言われて、はいそ
うですかってやりたい放題する人たちばかりだと思いますか？ 元
は人間ですよ。大体この場所に来たのだって安住の生活を求めてき
た人が大半だし……」

「ふむ、てことは？」

「つまり、身の安全と平穏な暮らしを望む人が多数なわけで、そ
ういう人たちと同じような考えを持つ人々と手を取り合って、独自の
法体勢を作り上げて、同じ都市でより固まって生活しています。そ
の際たるもののが中心都市カオスシティなんです」

更にサナは続けた。

「とはいっても、全てがそうではないんですけどね。やはり、やりた
い放題したいひとはいるし、そういう人は辺境の地や地下で好き
なことしていますし。まあ、結局、人間色々ってことです。地上と
あまりそういう部分は大差ありません。ただ、地上ほど治安が良く
ないのは確かです。現にさつきターミナルから出る際、襲われかけ
ました。私たちが排除したんですけどね。その後、拓の記憶喪失の
事を考慮にいれて、安全を最優先でこの場所へ、高速移動しました」

「なるほど」

まあ、そうだよな、元は人間なんだし、いくらキメラになつたからと言つても、平穀無事に暮らしたいとは想つよな……少し安心した……。命のやり取りがそこらじゅうで為されてるのかと思つたよ。とはいへ、さつきのターミナルの闇も何かの仕業らしいし、治安は確かにそれほど良くないみたいだ。

「拓、今からお匂い飯作つてきますね」

「あ、俺の分も……？」

「もちろんです！ 精魂込めて作つてきますから、ちょっと待つてくださいね！」

「ありがと～サナ！」

サナは快活な笑みを浮かべて、足取り軽く部屋を出て行つた。
俺はどうすつかなあ、その間……

ん？ 円卓には虎親父が暇そとに、肘ついでぼーっとしていた。
ミルフィイは窓を開け広げて、様に両手を置いて、眼下の景色を眺
めている様子。

どちらに声かけても良いんだけど、取りあえず、親父さんとの交
流を深めておかないとな。

まだ、言うほど話していいし……

俺は虎親父の隣の椅子に腰掛けると、氣もなく話しかけようと
した。

あ、しかし名前なんだっけなあ、聞いたような気が……そりだ
虎之助だったかな

「虎之助おじさん、ちよつといいかな」

「ん? なんだ拓、どうした?」

「あのせ、何で虎とのキメラ選んだの?」

「虎かっこいいだろ? 強そつだし、ほぼ見た目で決めたよ」

「あ、やつ……」

すんげえ、単純。聞くだけアホらしこうか……

何か無いかな、他に聞くこと……

そうだ、建物について聞いてみようか。

「」の建物さ、何でこんな場所に建てたの?」

虎之助は頭を傾げて悩んでいる。答えが出てこないらしい。そのまま呆けた顔を見ていると、大した理由はないんだろうな。

「高いし周り何もないし、見晴らし良いくからな~」

やつぱりな。それにしても、円柱型のシックな黒で纏めたこの建物は、周りの景色に溶け込んでいない。なんでもっと柔らかい造りの小屋や、ログハウスみたいなのにしないんだろ?

「なあ、おっちゃん、なんでこんな頑丈そうな円形の黒い建物建てたの?」

「そりや、お前、危険だからよ、この辺は少しカオスシティから離れていて、警備団も直ぐにはこれないから、案外危険なんだよ。建

物壊されたり、簡単に進入されたら困るからな

「へへ、じゃあ相当頑丈な材質で出来てるんだろうね、セキュリティもかなりしっかりしてたりするんかな?」

「当たり前よ、建物の外壁はちよつとやそつとの爆撃ではびくともしないし、この建物の周囲にも強固なバリアが張られている。そのバリアだつて俺達四人と予め登録した者以外は通ることすらできない。入り口の扉だつて、備え付けられた認証カメラを通して建物の人工頭脳が許可したものにしか扉は開けられないようになっている」

「鉄壁だね……」

俺はその重厚で用心深いセキュリティの仕組みを聞いて、啞然としてしまった。

まあ、どんなキメラがうわづらしてるか分かんないし、それくらい頑丈なものでないと、安心して寝れないよな……

一応、虎之助とも話したし、次はミルフィにも声を掛けるか。徐に立ち上ると、窓を眺めるミルフィの隣にそっと歩を移す。俺が横に並ぶと、ミルフィはこちらを見て口元を緩める。そして、また景色を眺めながら、

「拓、ここから見える風景いいでしょー?」

「うん、綺麗だね、山も見えるし、高い位置にあるから町も一望できるし、何か気持ちが和らぐね」

俺がそう言つたら、またにこつと笑つて俺に優しい瞳を向けた。ミルフィのつくる香水なんだろうか、とてもいい香りがその場

に立ち込めていた。

右方に見える悠然と聳える山をしばし眺めていた。
柔らかい陽光がほんのり今いる場所を照らし、眠氣を誘うような温もりをもたらしていた。

少し気持ちよくなつて、欠伸の一つもしようかと思い始めた時、右肩に細い柔らかい腕が、そっと巻きつけられる。

「拓～～、記憶無くしても、やっぱり拓は拓だよ～～、この強気な男らしい眉毛も、愛らしい丸顔も、みんな拓だよ～～」

完全に両手を首に巻きつけられて、体もいつの間にかミルフィー側に向かされていた。

恍惚とした瞳で甘い吐息を吹きかけてくる。完全に俺に甘えているといった素振りだ。

俺はドキドキしていた。設定とは言え、ミルフィイは俺の彼女ということになつていて。

要はな・に・し・て・も・オールOKなわけで……童貞な俺には刺激がちと強かつた。

そのうち頭がくらくらしてきていた。ミルフィイが目を閉じるもんだから、理性が吹っ飛んでしまつて、行為（想像にお任せ）の前のキスから入ろうとしていた。

しかし、一線を越えようかと甘美な思いが走った矢先、同じ部屋にいる虎之助の存在を寸前で思い出すと、彼女の両肩をそつと掴んで、距離を離した。

「どうしたのよ～～拓～～～」

まだミルフィイは甘い誘惑を帶びた瞳を向けてくる。

俺は彼女に分かつてもうれるよつこ、親父の方を何回かちらりちらりと見る素振りをした。

ミルフィイもやつとそれに気がついたようで、親父の方に向を直ると、

「父ちゃん… もう血室に戻つたよ～～～」

「ひつねこ～～～は応接間だぞ、好きでいるわい～～」

「わ～～～～～～！」

ミルフィイは親父を見て頬を膨らませると、また俺に向を直つて深いため息をついて口を開いた。少時、頭をうな垂れていたが、急に頭をもたげて、皿を輝かせて俺に言った。

「拓！ 家の中案内するな、どうせ、記憶喪失で覚えてないんでしょ～～～」

「う、うん、頼むよ、ミルフィイ」

「よつし、じゅに行こ～～～。父さんみつと拓あつこが案内してくれるね～～～」

「ほーい

半ば強引に右手を引張られ、部屋を後にすると、ミルフィイの唇から鼻歌が漏れ聞こえる。

「はこ、はは～、お父さんの部屋～」

「まお～」

虎之助の部屋はつ～～んつと臭かった。

思わず俺は顔をしかめて鼻を摘んだ。

壁のいたるところに黄色い染みが、これはまさか……

「臭いでしょ、父さん虎のキメラでしょ、匂いつけあちこちにしてるんだよね、人間の知性はあってもキメラとなつたものは、もう方の習性をも受け継ぐから結構大変なのよね……」

確かに、トラも猫科だよな。ああ、分かる。家で猫飼つてゐるから分かるよ、痛いほど。

あちこち匂いつけといつか、縄張りを誇示するために、小便撒き散らすんだよな。

昔、俺の一張羅の服にかけられた時は、顔を真っ赤にして叱つたもんだよ

だから、さつきの応接間も時折、アンモニア臭がツーンと微かに匂つてきたのか。

それでもほほ無臭だつた事を考へると、サナ辺りが四苦八苦して匂い取りしたんだろうな。

猫なら去勢したら、ああいうのなくなるんだけど、さすがに実の父親を去勢するわけにはいかないだろしちゃ……

俺はあまりのアンモニア臭に、部屋の内部に余り目を配る事無くさつさと部屋を出た。

ミルフィイは俺の気持ちを察してくれたのか、直ぐに出てきて、また先頭に立つて案内し始める。

親父はベッドの掛け布団に体を丸くして寝ていた。

それにしても、この塔みたいな建物の中はさすがに広かつた。

5階建てで1フロアに平均5つは部屋があった。

部屋と部屋を結ぶ長い白い廊下、一階の廊下の合間にには、大窓から光を通した場所に椅子とテーブルが置かれていた。

休憩場所といった所かな。地下には運動器具が所狭し置かれた場所もあった。

トレーニングルームかな。とにかく、なんでもあるし部屋数も半端なかつたな。

その中で一番気になつたのは、事務所として使われている部屋だな。

横長のテーブルに、高級そうな革張りのソファー、誰かの肖像画、よく分からぬ機械、一見、本棚っぽいものの中にも、電子機器が埋め込まれていた。

なんで、その部屋が気になつたかは、仕事に主として使われる部屋だからだ。

俺はこの世界で『複雑な悩みを持つ人の悩みを聞き解決する便利屋みたいな仕事』をして生計を立ててゐる事になつてゐるはずだ。と言う事は、この事務所がその仕事を受け持つ場所であるに違ないからだ。

俺はこの世界の詳細を知つた後から、言い知れぬ不安が俺の中でわだかまっていた。

一体 どんな過酷な仕事が待ち受けているんだろ? 考えるだけでぞっとする。

まあ、それはゆっくり昼ご飯食べた後にでも..... 聞いてみるか.....

天空編、ミルフィの体。

「うめえ！」

サナの料理が円卓を華やかに彩る。

名前も材料も分からぬ。説明はしてくれるけど、変わった発音が混じつてるので聞き流した。俺は美味しいければ、名称は気にしない派なんだ。

ただ、田玉焼きや、ステーキなどはそう俺の世界と変わらない気がする。

何の肉か知らなければね！

豪華に盛られる皿をフンゴフンゴ、言いながら食い散らかす四人。いやあ、はつきり言うとね、俺と虎之助はともかく、サナやミルフィーまで犬食い並の食い散らし方することは思わなかつた。とにかく、フォークは飾りか！ ってな具合に、口から肉にかぶり付いている。お愛想程度に肉の端にフォークが添えられているが、用途は落下防止のためだろう。

俺は野菜も食べなきゃと、思い出したように口へ運ぶ。

「拓！ もつと肉食べないと強くなれないぞー！」

「そりでふよー。おとこはかわらも強くなくてふあー。うぐー。」

「フンゴフンゴー。」

ちょっと、口の中の物飲み込んでから話そうよ……

それにしても……虎之助はともかく、二人の肉への執着を見る限り、肉食系の動物とのキメラなんだろうなあって思う。よく考えると、熊を避けた時の跳躍力、ターミナルからこの建物までやってき

た音速疾走を考えると、とてもない『何か』とのキメラに違いないんだが……

正直、想像がつかない。どんな奴とのキメラになるのを一人は選んだんだろう。

何か聞くのが怖いんだけど、食べ終わった後、聞いてみよつ。

ガチャン！

「ふいー食つた食つた！ サナは料理つまいないつもー。」

「あはは、それほどでもないですよ、おじ様ー。」

「いんや、うまいよ、サナはー。拓と私とサナで結婚したら、サナに料理は任せせるからねー！」

「な、何をー？」

俺は思わず、焦げちゃ色のお茶みたいな味の飲み物を口から噴き出しそうになつた。

ちょ、ちょ、と待てよ。俺とミルフィーとサナで結婚ー？

それって多重婚つて言つんじやないの？

「あのや、俺とサナとミルフィーで結婚つて多重婚つて言つんじやー？」

「そうだよ、普通じゃん。みんなしてるしねー。」

「そ、そ、そ、うー。常識ですよ拓。そんなことまで訊かせつけられたんですか？」

「あ、うん、知らなかつた……」

む～、男にとつて都合が……いやもしかして

「まさか、女も男何人とも結婚できるとか？」

「もちろんですよ～」

平然と眉一つ動かさず、言つてのけるサナ。どうやら、この世界ではどちらの側の多重婚も常識らしい。まあ、所変わればって所だな。

取りあえず、驚いたけど、結婚とかまだピンと来ないし、その話は頭の片隅にでも置いておいた。そのつづね……

#

円卓はサナに綺麗に片付けられて、真白な表面は電灯の光を帯びて浩浩と輝く。

この部屋はベッド以外には、ソファーなど無く、この円卓の周りの椅子にだけ腰を下ろる事ができる。トラ親父は、黄色に黒の縞模様の毛が生い茂る足をもう一方の膝にかけて、何かの本を鼻歌交じりに読んでいる。

その足の先の鋭い爪が、トラ親父の気分に呼応するかのように伸びたり縮んだりしていた。

はつきり言って、トラ親父の隣を通る事は危険だ。出来れば引つ込めて欲しいもんだ。

などと、神経質に考えていた。俺は怪我とかしたくないからね。さて、また窓際で窓いでいるミルフィーにあの質問を投げかけなくては。

「ミルフィイー、ちょっと良いかな」

「うん、どうしたの?」

俺は少し息を呑んで、顔を少し強張らせていたかもしれない。ミルフィイとサナが何のキメラか確かめるんだけど、正直聞くのが怖いんだよね。

こんなに見かけは小柄で、愛くるしい顔をした彼女が……まあ、もう聞いてみる!-

「ミルフィイとサナってさ、何とのキメラ?」

「ん? えーっとね

やつと思い切って聞いてみたんだけど、直ぐに返事が返ってきて来ない。

顎先に指を当て、少し考える素振りを見せるが、やがて

「私たちは結構複雑で、高レベルのキメラ融合をして生まれた、言わばエリートなんだけど」

「ほ~?」

ほ~としか言えなかつた。

「まず、私の足! これは音速で走れる魔獣イダテンラビットの細胞と融合したもので、次にこの腕! これは怪力の魔獣、アークグリズリーとの細胞融合、そして、目は魔獣……鼻は……腹筋は魔獣……etc……」

次々とミルフィーは体の場所を指差し、説明を加えていく。

俺は口をぽかーんと開けて聞いていた。

「分かつたよ、有難う！」

俺は笑顔を目一杯努力して作り上げると、瞼や口端を微妙に痙攣させながら、ミルフィーに言った。

ちょっと……君の体はいくつの中魔との融合でできているんだ！しかも魔獸って何なんだよ！ といつ疑問がもう頭を忙しく駆け巡つて、聞いていられなくなつたんだ。

俺が困惑気味に外の景色に視線を向け、目を白黒させていると、

「だけどね！ 見た目だけは変えたくなかったので、元の姿とほぼ変わらないよう融合してもらつたの。色々な魔獸の特徴が体に出ないようにね。この融合技術は高度でね、同じ融合技術でキメラになつた人は一握りしかいないんだよ！ ほら、見てよ、こことか！」
「ここ？」

そんな俺にミルフィーは目を輝かせて力説した後、上着をめくつて、俺にあらゆる部分を見せ付けてくる。

「ちょっと！ シヤツ、え、パ……そんなとここまで……刺激が強すぎる！」

思わず……自粛。ふ……参つたな。

俺は今ので敏感に稼動した生理現象を見られまいと、少し体をミルフィーとは逆に捻りごまかす。

「それにしてもさあ、あの太陽といい、この場所のあらゆる地形に使われている岩や水や土砂や、大気とか、どうやって、このゲルスタシアに運んだの？」

「ちよつと頭を上ずらせながら、やつきの興奮を冷ますつと堅苦しい話に方向転換を図る。

「さあ、詳しく述べ私は知らないんだよね。サナに聞けば～？」

「サナそう言えぱいないな？」

部屋を見渡すと、いつのまにか、鼻風船を膨らませベッドで丸くなつて眠る親父しかいなかつた。

さつきまで、サナは部屋中をハンドタイプの機械を使って、部屋を撫でるように忙しく掃除してたんだが……

「あ、ほんと……うーん、たぶん、夕食の買出しにカオスシティの食料センターに行つたのかもね、ちよつと聞いてみる」

そう俺に言つた後、ミルフィーの様子が一変した。

突然　虚空を見つめたまま、唇を何かを口づすむように微かに振るわせる。

横目でその無機質な表情を見ていると、急にミルフィーが何かの口ボットにでもなつたようにすら思える。腕をだらんとして、瞳孔を開いたまま、突つ立つてゐからかもしれない。

だが、しばらくすると、急に電源が入つたかのように、ミルフィーの瞳に光が宿り、体に滑らかな筋肉の動きが戻る。

「拓！ 内部テレパシーで聞いてみたんだけどね、今ね、サナ、カオスシティのエリア31地区にあるお肉屋さんについているみたいだよ。ちよつと街案内も兼ねて、一緒に行つてみる？」

ミルフィーがいつもの無邪気な笑みをこぼりに向けてくる。

それを見て、なんだかほっとして、胸を撫で下ろす自分がいた。
テレパシーでサナと話してたのか……びっくりするよ……
やっぱり、複数の魔獣を取り込んでるだけあって、外見は普通に
見えても、俺が現実世界で見知っている普通の女の子とは一線を画
する存在なのかも知れない。

俺は静かに頷くとミルフィイと手を繋いで部屋を出る。トラ親父は
寝てるので置いていくことにした。一人並んで一階に繋がる階段
を下りる。

その時……少し今までとは違った方向から……ミルフィーの横顔
を眺めていたかもしだい……

天空編、神器『携帯』 再び！

「ちょっと待つてくれー！」

「ん？ どうしたの拓」

一階に降りたところで、俺はミルフィイに叫んだ。
敢て大声を出して、ミルフィイの歩みを止める。
いやあ、相手の方が力強いので、強引に外に引きずり出されそう
なんで……
俺はこのまま外へ出るわけにはいかないんだ。

「ちょっとトイレ行かせててくれよ」

「ああ、そつか、ごめん。一階にある場所知ってるよね？」

「うふ、さつき一通り案内してもらつたからね。じゃちょっと行ってくるわ」

ミルフィイに軽く笑みを浮べ手を振ると、少し足早に歩を進める。
黒い扉の前までくると、上部にある丸い銀色の金属の凹みに顔を
近づけた。

すると、トイレの扉は俺を認識したらしく、大気に溶け込むよう
に消えた。

狭い空間には俺の家にあるような洋式の便器があり、大理石のよ
うな材質の白い壁が天井まで伸びていた。芳香剤らしき香りが微か
に鼻腔をくすぐる。

中に入った数瞬後、白い壁が不意に現れて入り口を閉ざし、外の
廊下と内部とを隔てた。

俺は安息の空間を得ると、気を楽にして便座に座った。

ここはもう完全な俺のプライベート空間だ。

何をしようが、誰にも探られる事はないはずだ。監視カメラとかついていなければな！

じゃあ、始めるかな。

実は俺は大便も小便もしたいわけじゃなかつた。

ここへはある目的を完遂するためにやつてきたんだ。

つまり　今、手の平にある携帯、これを使用するためにこの安息場所へ潜り込んだんだ。

俺はうつかりこの世界に携帯の存在を、設定せずに飛び込んでしまつた。

だけど、不思議な事に中へ入ると、俺のズボンの後ろポケットには携帯が入つていた。

前これを設定したとき、俺が作り出す妄想世界全部にその存在が有効になるような書き方をしたようだ。

その影響でこの世界にも携帯は存在していた。おかげでもう一度外へ出て携帯を設定する手間が省けた。

それで今回またある理由で携帯を頼るわけだけど、もちろん楽しみを追求するためには、乱用は控えたいと思つ。あまりに無敵すぎる力も出来れば避けたい。

だが、ある理由即ち、この世界で死ぬ訳にはいかないんだ。自分の物語の中で死ぬような事はしたくない。

この世界は前の世界のように生温くはなさうだ。不慮の事故で唐突に自分の命を散らす事だつて考えられる世界観だ。

だから、命の絶対保証は不可欠だと思う。そうすると、前のようなバリアパワーを使うのかつて事になるけど、同じような命の保護方法では詰まらないと思うんだ。

バリアに変わった命の保護方法を、考へる事は簡単なようで結構難しい。それに下手に力が強大すぎると、話がつまらなくなるからだ。
うーん……ウンコしたくなってきた……緊張すると横っ腹が……
取りあえず……予想もしない襲撃や、思つてもいなかつた未知の攻撃を一発でもその身に受けたら、俺は息絶えるだらう。自信があるんだ。身体の貧弱さに！ 脆さに！

前のバリアパワーは自分の意思で、オンオフ可な無敵なバリアだったわけだけど。

これってつまり、不意打ちみたいな攻撃を受けたらバリアが消えている間は効果を為さない。つまり俺はバリアが消えている瞬間、攻撃を受ければ死ぬ訳だ。

そんな隙だらけの力でも、何とか前の世界ではやり過ごせた。

ただ、それはあの世界がある意味平和であり、多少なりとも攻撃を仕掛けてくる者の予想がついたからだ。そろはいつても危つい場面もあつたけどね。

だが、ここは違つ。キメラなんていうよく分からぬ奴等が、うようよ周りにいて、幾らミルフィ達が傍で守ってくれるとしても、俺の不安を埋めるには至らない。

だから、サバイバルかもしれない外世界に出る前に、命を保証する何かを今から設定する必要があると考えた訳だ。

てことで、力について考へないとどうしようかな……
バリア以外で何かないものか……

・ · · · ·

そうだ、『痛みを感じない不死身の身体』っていうのはどうだろう？

バラバラになつても、足が削れようと頭がもげようとも生きていられる。

しばりべると、再生してもとの通り！ これでいいんじゃなか
うつか。

要はファンタジーの世界に出てくるゴーレムとか、再生しまくる魔
物みたいなもんだ。

痛みが全くなしつていうのも、詰まらないから。足をすりむいたり、青アザが出来る程度の痛みは感じる事にしよう。
それ以上の痛みは遮断される。これでいいかな。取りあえず。

じゃあ設定を。

件名 僕は不死身の肉体をもつ。

不死身の肉体の説明

足を擦りむいたりこけたり、青アザができるくらいの命に関わらない痛みでは感じる。

ただそれ以上の痛みは痛みとして俺に伝わらず。無痛と化す。バラバラにされても炎で焼かれても、頭がもげてもあらゆる攻撃を受けても死なない不死身の肉体。
しばらくすると、再生機能が働く便利な肉体。

これでいいのか！

よし、書いたぞ！ ジャ〇〇K押そう。押した！

これで俺の肉体は不死身になつたはずだ。

ああ、このボタンを押した瞬間、幾分不安が和らいできた気もする……

よつしゃ！ サナ迎いに行くか！ なんだか死がないと思つとや
る氣も出てきた。

「ミルフィー！ 行くぞ！」

「うん、拓行」ひへ、はい、これ！」

ミルフィーは見たこともない赤っぽい全身ゴムスース？ と剣の柄？ みたいなものを俺に手渡してきた。

「爆弾やミサイルを受けてもこのキメラスースを着ていれば平然としてられるよ、そして、この柄は……」

ミルフィーが金色の柄を握ると、突然白光の長剣が、柄の渦をまいたような穴から飛び出してきた。

電流が弾けるようなバチバチッて音が白光する刀身から聞こえてくる。

「イレイザーソードよ、大抵のキメラの身体は切り裂けるよ。力の弱いキメラの人々が護身用に持ち歩く剣よ。あつと、見てて！」

ミルフィーは一階の廊下の窓を開けて、切つ先を空に向けて掲げた。

次の瞬間 轟然たる音と共に剣の先が一瞬眩い光を放つ。

目の前で唐突に起きた派手な現象に、俺は驚いて思わず尻餅をついて床に倒れた。

しばらくして、上空から大気を震わすような爆裂音が耳に届く。

「な、何したの？」

手や足の筋肉が強烈な刺激を受けて震えている。

俺は喉をぐくっと鳴らした後、無心でミルフィーに尋ねた。

「エネルギー弾を剣から放つたのよ」

ミルフィーはこやつと笑うと得意な顔で更に続ける。

「イレイザーソードはね、電子弾を切つ先から放つ事ができるの、要はここれは剣でもあり、大砲でもあるのよ、護身用にしては強力な武器よ！だから、護身用じゃなくても、ならず者のキメラも時々これ使つているの見るわ。私は弱者でもならず者でもないけど、これ使つの楽しいつて～！」

ミルフィーのイレイザーソードを見つめる瞳に妖しさすり漂つ。誰かに使いたくてうずうずしているような眼だ……

怖い……俺はさつきまでの自信が消え入りそうになつていた。あんなもんで切り裂かれたら……？

エネルギー弾で木つ端微塵にされるつてどんな気持ちなんだろう

……
幾ら不死身の肉体としても、恐怖心までは拭いきれないようだ。

俺は恐々その柄を手に取つてみる。

ミルフィーにイレイザーソードをおさめる、黒い皮袋のついたベルトを手渡された。

それを腰に巻いて柄を、その皮袋の穴に押し当てるみる。ピタッと六と柄が吸着して、ちよつとやそつとじゅ落ちない感じだ。

ただ、抜く時は自然に滑らかに離れる。不思議な素材だな……

「あれ～キメラスース履かないの？」

俺がいつまでもスースを履こうとしなでいると、ミルフィーが聞いてきた。

「うん……」

「え？ な、なにいってんの！ 履かないと死ぬよー。」

ミルフィイがはっと眼を見開いて、強い口調で俺を捲くし立てた。その澄み渡つた青い空のような瞳が、心なしか潤んで震えているように見える。

「こりなによ……」

「な、なんで……言う事聞いてくれないの！ いつもいつもー！」

ミルフィイの様子が、いつにも増してヒステリックでどこか悲しげだ。

何だろ？……見ているだけで狂おしいほど胸がしめつけられるような、この哀愁に満ちた眼は……それほど俺を心配してるって事か？

「…………」

ミルフィイは押し黙つたまま顔を逸らした。

いや、スーツ着ても良いんだけどさ、不死身の肉体にそれまできたら過保護すぎる。

待てよ、なんか変だな……これを着用しない俺に怒鳴りたくなるのは分かる。

足手まといも良いとこだし、無力で脆い人間の体を持つ俺を、恋人であるミルフィイが心配するのも当然と言えば当然だ。

しかし、ミルフィイの口ぶりは、その要求を呑まない俺に対してうなずきしているようでもある。

一度や二度の拒否でここまで？ 可笑しくないか？

俺は虚空を見つめながら、しばしその疑問に思いを馳せる。
さつき、いつもいつもって言つてたよな……そうか……一度や二度じゃないんだな。

俺がこの世界にやつてくる前に、存在していたことになつている別の俺も、こいつやってスースを切ることを拒み続けていたんだ……分かつたぞ、つまり、前の俺も不死身の身体を携帯で手に入れたんだ。

それなら全てが合点がいく。なるほど……そうだとしたら……」の後、俺が言つ葉は決まつていて――

「ミルフィイそんなに心配しないでいいよ」

ミルフィイが諦念を滲ませた虚ろな瞳を俺に向かた。

「ん？」

「俺はこの世界じゃ『神』だから、全然心配はいらないよ

ミルフィイは俺のその言葉を聞くと、静かに俯いて眼の辺りに影を刻んだ。

しかし、よくミルフィイの表情を観察すると、ふつくりとした唇が微笑みを湛えて歪み、白い歯が覗いている。

「はあ、言つても無駄か、今日も頑張つてごねたんだけどなあ……」

ミルフィイは深い溜息を吐いた後、呆れ顔でそう言いながら、両手を天に伸ばし背を逸らして伸びをした。

そして、さつきとは打つて変わつて曇りのない快活な表情を俺に

向けて、

「よし、サン迎いにいこつか！」

と、言つた後、俺の手を強引に引張つて外へ連れ出した。

「拓、ほら、エロすとーんよ
「ん？」

「この間置いていったでしょ」

淡い緑色の石、中が透き通っていて、材質はクリスタルに近いのかなあ？

そんな指の一節ぐらいの大きさのエロストーンをミルフィーに手渡される。

石には銀の鎖のようなものが繋がれていた。

俺はそれを携帯のストラップをつける場所に繋いでみる。
嵌るか怪しかったけど、不思議とぴったり噛みあつた。

「それは、色々使つ場所多いから、必ず持つていてね！
「あいよ～」

携帯を宙に持ち上げ、垂れたエロストーンをしばらく見つめた後、後ろポケットにしまいこんだ。

もう、安全地帯ではない外の世界を、手を繋ぎ並んで、ゆっくり歩いている。

なだらかな斜面が続く草地とでもいうべきか。

牛でも放たれていてもおかしくないような平原の斜面を、白い道伝いにカオスシティへ向かつて降りていく。

太陽は現実世界と同じように西に傾きつつあった。

時間で言えば、昼間の3時ってところだらうか……

白い土の道が眼下に見える、カオスシティまで続いているようだ。まだ、その街の姿は薄つすら靈がかかつていて、その輪郭は朧気だ。

さつきから白い道を結構歩いてはいるが、まだ誰とも出くわしていない。

少し拍子抜けしたというか、心配しすぎてたかなあ……

「見てみて～、この花綺麗でしょ」

「ん～？ うん、綺麗だね」

道端に小さな黄色い花が、ひっそり咲いている。

ミルフィーは中腰になつて、快活な笑みを浮かべて、花のそれをやかな美を愛でていた。

じついうとこ見ていると、ミルフィイも女の子なんだなって素直に思える。

ふだんは、男っぽいというか、がさつなイメージがあるから、それとのギャップか、ミルフィーの今の様子が新鮮にさえ感じられる。

道沿いには、所々思い出したように、木の低い柵が現れる。

歪な形をしたものや、二つ連なつたものが、ぽつぽつ道沿いに穿たれている。

「なあ、ミルフィー、この木の柵つてさ、ちょっとちょっとあるけど、何でこんな立てかたしてるんだ？」

「ああ、元々ね～、ずっとこの道に沿つて両側に長く繋がつてたんだけど、色々あって、キメラに引き抜かれたり、壊されたりして、失われていったの」

ミルフィーはそういう終えた後も、鼻歌を歌いながらゆっくり歩いていた。

だけど、俺はそれを聞いてから、全く心境が一変していた。

さつきまで、頭の中で流れていた平穏な風景に合つたクラシックの音楽が、昔やつたRPGのゲームのボス戦間近の、猛々しいBG Mへと変わっていた。

ちょっと……いきなり恐ろしいキメラ現れないだろうな……？

俺はそんな一抹の不安に身を焦がし、あちこちきょねきょねして歩く。

そして、不意に前方に眼をやつた時 先に見える木の柵に、何者かがのつかっているのに気づいた。

小さな子供くらいの大きさだろうか……

「ミルフィーあれ……！」

それに気づいていないミルフィーの背中を、シャツを掴んで引張つる。

「ん？」

花をみていたミルフィーが、俺にきょとんとした眼を向けた。

そんなミルフィーの背後に回り込んで、後ろから肩を掴んでその者に向かせた。

そして、後ろから手を伸ばして前方に指差した。

ミルフィーは俺が指差す方へ視線を向けると、

「あ、あれは……サラフィーさんだよ、良い人だよ」

「ほお……」

ミルフィーがそう言い放った口調は、とても静かで穏やかだった。このかんじからするに、仲のいい知り合いといったところか。

俺は少し安堵して、ミルフィーの横に並んだ。

近付いていくに連れて、その者の容貌が分かつてくる。

大まかに言うと 狐……狐人間？ 狐人間が柵の上に腰かけ、

葉巻のようないしを吸っている。

葉巻の先からは煙が出ているし、たぶん、煙草か何かの類なんだろつ。

「サラフィーさん、お久し振り！」

ミルフィーが朗らかに微笑み声をかける。

サラフィーは茶色っぽい三角帽子を頭にかぶり、これまた、三角錐のような民族衣装、現実の世界で言えば、インディアンのような服を身に着けている。

三角錐の服の腰のあたりに、革ベルトが巻かれていって、長い剣のような赤茶けた金属の鞘がぶら下がっている。鞘は細身で後ろに反りあがっていた。

「やあ……ミルフィーに拓じやないか、久し振りだな……」

狐人間とも言うべき容貌のサラフィー。

そのサラフイーが発した声は、予想とは反して落ち着いた澄んだ声をしていた。

「二人してどこか行くのかい……？」

「はい、サナがカオスシティの食料センターにいるもんですから、合流しようかな～なんて」

「そうか……」

サラフイーは下を向いて、葉巻を口から離すと、溜め込んでいた煙を吐き出した。

辺りの視界が一瞬もやに包まれたかと思つほど、濛々と白い煙が周りに立ち込めていた。

だけど、不思議に煙たくはなかつた。俺の知る煙草とは成分が違うんだろうつか？

もしかすると、煙草の類でさえないのかもしれない。

「気をつけてな……最近は物騒だから……特に拓君は……」

何が言いたいのかは分かる……ええ、俺は弱いですから……

「大丈夫ですよ！ 私がついてますから！」

腕を捲り上げて、握り拳を掲げるミルフイー。

ミルフイーがそんなジエスチャーを見せると、サラフイーの口元が優しく綻ぶ。

う～ん、狐つて物語とかだと、嫌味なイメージあるんだけど、この人は良い人かもしれない……

しばし、サラフイーさんと穏やかな会話を交わしていた。だが、遠くの方から何か轟くような音が聞こえ始める。

機械音……違う……なんだこの音は……

ふと、ミルフイーたちを見ると、俺のほうを見て一人して睨みをきかしている。

え……？ 僕、何かした………？

柵に座っていたサラフイーが、さっと地面に飛び降りた。

そして あのベルトの赤い鞘に右手を置いた。柄と鞘の間から

白刃が鈍い光を放っているのが分かる。

「な、な、何する気……！？」

「拓！ しゃがめ！」

サラフイーが細い目を見開いたかと思つと、ミルфиー突然、俺に飛び掛ってきた。

「な、なんだ！？」

俺はその重みで後ろに勢いよく倒される。しかし、ミルフィーが俺の頭に手を巻きつけるようにしてるので、地面に背中を打ち付けるも、頭への衝撃は緩和されていた。

「ぐ……重い……」

上にミルフィーの体が圧し掛かり、思わず俺は呻いた。

眼を開けると、完全に視界をミルフィーの体に塞がれている。

「ミルフィー……」

俺は搾り出すよつに囁くが、何か傍で聞こえる大きな音に搔き消される。

その轟音の中にサラフイーの、興奮氣味に荒げた声も入り混じつていた。

いや……声だけじゃない、周りの平原の草が、正体不明の風を受けて並立つてゐるし、頬に感じる風の勢いもさつきまでとは違う。そして、極めつけは金属が何か堅いものとかち合つような音。それらの音はしばらく近くで鳴り響いていたが、少し遠ざかつたのか、耳に届く音量も幾分和らぐ。

「拓……ちょっとここにでじつとしていて……動いたら黙れよ……」「ええ……」

「サラフイーを助けに行つてくる！」

不意にミルフィーがそう呟くと、青空が俺の視界に戻る。

俺は打ち付けた背中を撫でながら、ゆっくり半身を起こした。

おもむろに辺りに視線を巡らしてみると、少し離れた位置に大きな黒ずんだ物体が浮いていた。

「な、なんだ、あれ、ば、化け物！？」

俺はその謎の生き物を目にして、裏返った声で叫んだ。

その傍らにはサラファイーもいた。その形容しがたい生き物に向かって細身の剣を、追い払つかのように振り回している。

気持ち悪い謎の生き物……無理に例えるなら、その姿はハエに似ていた……

だが、蠅とは断じて違う……大きな赤い眼の真ん中には白い人間の顔が浮んでるし、胴体のいくつつかの手足が人間のそれと同じものだから……

俺はその怖氣の走る姿に最初釘付けだったが、ゆっくり手前に視線を移していく。

すると ミルフィーが少し前方で両足を広げ氣味に、俺に背中を向けて立ち尽くしている。

そのミルフィーに声をかけようとした時 轟然たる大音響と共にミルフィーのいる辺りが一瞬白くフラッシュした。その強い刺激を受けて、俺は思わず目を瞑つて後ろに尻から倒れこんだ。

ズドーン！

その後、間髪いれずに大気が震えるような炸裂音が俺の耳に届く。

「さすが、ミルフィー、お見事……」

それから少しして、軽快なサラファイーの声がした。

俺は恐る恐る目を開けてみると、ミルフィーの後姿がさつきと変わらない場所にあった。

「ミルフィー！」

俺はおぼつかない足で何とか立ち上がると、ゆっくりミルフィーの傍まで歩いていく。

傍までやってきて、横合いから彼女の姿を覗き見ると、その手にはイレイザーソードが握られていた。

白光の刀身から電流がはじけるような音が聞こえてくる。ミルフィーが目を伏せ気味にふーっと息を吐き出すと、白光の刀

身が大気に溶け込むように消えてしまった。

その刀身が消えた柄を腰のベルトに吸着させると、額に手を押し当てて、もう一度深い息を漏らした。

そのうち傍らにいる俺の存在に気づくと、満面の笑顔で、「拓、もう大丈夫！」と、親指を立てて微笑んだ。快活な笑顔を浮かべるその額には、滲んだ汗が陽光を受けて煌いていた。

天空編、カオスシティへ。

「サラフイー大丈夫?」

「大丈夫さ……しかし……」

サラフイーはレイザーガンでミルфиーが仕留めたキメラの遺骸を見下ろしている。

俺達はサラフイーの傍までやつてくると、ミルфиーが安否を気遣う言葉をサラフイーに投げかける。

それに微笑みを浮かべて返すサラフイー。だが、それも一瞬の事で、すぐに張り詰めた表情でキメラの遺骸に視線を戻した。電子弾を受けたキメラの遺骸の損傷は激しく、高熱で燃え尽き炭のように黒ずんでいた。

殆ど原型を留めていない。

だけど、ところどころ、元の姿の特徴みたいなものは残っていた。黒い残骸ともいえる中に、人間の手足の輪郭が、焼け焦げた胴体らしきものには、纖毛のようなものが伸びているのが見て取れる。

「あんまり見ないキメラだよね」

「うん……こいつは昆虫類とのキメラだ。この第一階層モラクにはいるはずのないキメラだ……」

そう呟いたサラフイーの線のように細い目には、何か理不尽なものを見たような、ある種の緊張感が漂っている。

「まあ、良く分からぬけど、倒せたんだし、いいじゃん!」

ミルフィーは取りあえず、危険なキメラを倒せた事で満足してゐるんだろう。

特にサラフイーの言葉を深く意識した様子はなく、終始笑顔で俺の腕に手を絡めて、頬を擦り付けてくる。

正直言つと、俺もサラフイーの深刻そうな顔は気になつたが、あんまりこの世界の事深く知つてゐるわけでもないので、突つ込む気にはなれなかつた。

そのうち、ミルフイーが思い出したよつて手の平を胸元付近で打つと、

「おつと～～！ サナと合流しないとね！ サラフイー後はお願ひ！」

「あ、ああ、分かつた……まだ遺骸に残り火があるから、後始末はしておくれよ……」

ミルフイーに言われて、一瞬注意をこぢらへ向けてサラフイーが返す。

だが、まだ興味の大半は足元のキメラの遺骸に注がれているらしい。

そのうち、膝をついてじっくり、キメラの遺骸を観察し始めた。

「うん！ お願ひします！ じゃあ、拓、早く行かないと日が暮れちゃうし、走るよ！」

「うげ、走るの……？」

俺は体力に自信がない……それに今から俺のペースで丘陵を降りていつたら、いつカオスシティにつくんだよ……着く頃には夜になつてしまつ……

「大丈夫よ、オンブしてあげるから、目を瞑つてる間にサナのどこまで着くよー！」

「じゃ、ミルフィーは足が速かつたんだ。ミルフィーは前屈みに尻を突き出して、乗つて来いとばかりに後ろ手をヒラヒラさせていく。

女の子にオシゴ被れるつて何だか恥ずかしいといふか、情けないといふか……

だけど、俺は貧弱BOY……結局、従つほかなく、

「じゃ、じゃあ……乗るね」

「どうぞどうぞ……」

「よこしょ……」「……

年老いた老人のよっこ、力ない掛け声を漏らし、ミルフィーの背中に乗つかる。

両足を抱え上げられ、ミルフィーの体に密着した形で覆いかぶさつた。

ミルフィーの首と胸の間辺りに手を絡める。ミルフィーはとてつもないスピードで走るだろうから、高速移動の間に手を振りほどかれないよう、にじり、絡めた手首を両手でしつかり掴む。

少しずれると、すぐ下にある柔らかい胸にまで届きそうな位置だった。

「ちゃんと、掴んでてね!」

「お、おつ……」

俺の顔には照れ臭さが先にたち、熱が籠っていた。下半身もなんだかこそばゆい。

やつぱり女の子の体にこれだけ密着すると……色々ね……

「じゃ行くよ~!」

「うん……」

ミルフィーの掛け声とともに、俺はしがみ付く手の力を更に強めた。

そして、田も堅く閉ざす。高速での視界に田を回さないようにな。すぐにミルフィーの体が動き始めた。足からの振動がミルフィーの体を通して伝わってくる。

まだ最初はゆっくり走っているようだ。だけど、だんだん伝わる衝撃が早く、大きく……

そして、次の瞬間 体にかかる負荷がありえないほど増大した。迫り来る風圧が半端じゃない。顔面をミルフィーの肩につけてそれを凌ぎ、手が離れそうになるのを必死で堪える。

「ちゅうと、ぐるじい……」「

不意にミルフィーの呻き声が聞こえ、揺れが穏やかになってきて、やがてしんとした。

何事かと思い田を開けてみると、ミルフィーに絡めていた手が彼女の首を絞めていた。

無意識に落ちまいとして、首に手がかかつっていたよつだ……

「い、いめん」

俺は首から慌てて手を離し、ミルフィーに謝る。

ミルフィーは俺を降ろして、体を前倒して咳き込む。

苦しそうだ……息を荒立たせ、顔は上気して全体が赤くなっている。

わざとじゅあ無いんだけど、罪悪感が俺の体中に駆け巡っていた。
本当にじめんよ……

「ミルフィイ、大丈夫か……？」

「う、うん……」

前屈みのまま、火照った顔をこすりて擦る。相等苦しかったんだ
うひ。

薄ら笑いを浮かべながらも、その顔は苦痛で歪んでいた。

「ミルフィイ、本当に悪かった、だけどもう少しスピード落としてく
れ……手が離れてしまつ」

「あ……そつか、ごめん、分かつた……」

ミルフィイは俺の言葉を聞いて、少し納得してくれたようだ。
所詮人間なんで……ミルフィイとは感覚のズレが生ずるのも無理は
ない。

また同じよにして、ミルフィイにオンブしてもらひ。今度は恥ず
かしがらず、落ちない程度に胸により近い位置に手を回した。隆起
した胸の麓付近まで手が及ぶが仕方ないよな……

俺はやっぱり照れてしまうんだけど、ミルフィイは全く気にした素
振りは見せない。

「じゃ、気を取り直して、少し押さえ氣味に走るよ」
「うん……」

幾分スピードを弱めて走り出すミルフィイ。それでも速度は速めだ
が、現実の世界の車で言えば時速100キロくらいだろうか、でも
これなら持ちこたえられそうだ。

しばらく、ミルフィイの首筋に顔を伏せて、手を離れない事だけに
意識を集中させていた。

そのうち、だんだん体に感じる振動が、顔に注ぎ込む風の勢い

が弱まりだす。

「着いたよ、拓！」

ある程度、そろそろ着く、だろ？と予期していた俺に、ミルフィイから待望の声が届いた。

やつと、解放された…少し手を緩めて一息つくと、ゆっくり顔を上げた。

夕日の光が横から差してくる。顔を伏せて闇に浸していたせいか、やけに、左目が眩しく感じていた。

「カオスシティの入り口だよ」

その言葉を聞いて、ミルフィイの頭の横からするっと顔を出し正面をみやる。

すぐ眼前には、アーチ状の比較的大きな入り口が目に入る。赤茶色のレンガのようなものをアーチ状に重ねて作ったような入り口だ。夕日を受けて影が差す入り口を塞ぐ木の門は黒ずんで見える。

その入り口を内包する白い城壁のような高い壁が、横になが〜く伸びていた。

左を見ても右を見ても、この場所からは壁の果てが見えない。

その前には、青っぽい金属の鎧を身に纏った衛兵？が立っていた。

腰には灰色の鞘を携えている。腕には赤い突起が星を模る？と

いうよりは赤いウニのような形をした紋章が、白い生地に刺繡された腕章をつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5715e/>

俺的妄想ファンタジーに俺を送り込む話。

2010年10月10日01時05分発行